

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第74集

おお なわ
大 縄 遺 跡

1 9 9 7

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

大縄遺跡の所在する愛知県稲沢市は濃尾平野のほぼ中央に位置し、古代には国府、国分寺が造られ、中世においても尾張守護所が置かれるなど尾張国の中心地として繁栄した場所でありました。

今回調査しました大縄遺跡は尾張国分寺跡の東に隣接する遺跡で、これまで当センターにおいて調査報告されている堀之内花ノ木遺跡・儀長正楽寺遺跡の中間に位置しており、古代・中世における両遺跡との関係や本遺跡周辺の歴史を考える上で貴重な成果を得られたものと思います。特に平安時代末の農業用と思われる用水溝の確認されたことは中世におけるこの地域発展の背景を説明するものといえるかも知れません。本書の調査成果が歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財に関する御理解を深める一助となれば幸いに思います。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、地元住民の方々をはじめ、関係者及び関係諸機関の御理解と御協力を頂きましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成9年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 安 部 功

例 言

1. 本書は愛知県稲沢市井堀大縄町に所在する大縄遺跡（『愛知県遺跡地図』（Ⅰ）尾張地区による遺跡番号は09250、稲沢市遺跡番号は5-34）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は愛知県土木部が建設予定している県道名古屋祖父江線の建設に伴う事前調査として愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成7年10月～同12月である。
4. 発掘調査は水谷寛明（本センター主査・現一色町立佐久島小学校教諭）、蔭山誠一（本センター調査研究員）が担当した。

また調査に参加頂いた方々は、以下の通りである。

浅野文善、飯野香代子、石黒美佐子、稲垣美登里、今田利彦、岩田明美、上田茂寿、上田利子、奥田美由岐、各務則子、垣見和昭、片岡健二、片野百合子、加藤悟子、小崎暢子、後藤栄次、後藤喜久江、杉田千代子、関田美千代、棚橋豊子、東松道昭、徳永悟士、中村幸一、西村澄子、羽田野明美、服部富子、服部礼二、日比芳子、平野加奈子、平野比芦子、平林八寿子、藤井美代子、松田典子、三輪美恵子、百瀬詔子、森本千歳、山崎久美子、山田由起夫、山田芳美、山之内なつ子、山本真紀子、吉田由香、渡辺康子

学生

内蔵菜穂子（愛知学院大学）、加藤優子（名古屋女子大学）、河合征治（三重大学）、新海洋規（名古屋経済大学）、田口雄一（花園大学）、富永晶子（佛教大学）、中島新治（花園大学）、中村晋也（三重大学）、吉兼千絵（同朋大学）

5. 調査・報告書作成に際して次の機関から御協力を得た。
愛知県教育委員会文化課、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県土木部、稲沢市教育委員会
6. 調査・報告書作成にあたっては次の方々の御教示、御協力を受けた。
梶山 勝、蟹江吉弘、土山公仁、八賀晋、日野幸治、藤澤良祐、北條献示
(五十音順・敬称略)
7. 報告書作成に関わる整理事業には蔭山誠一があたり、中島由美子、藪田久子の協力を得た。
8. 本書の執筆・編集は蔭山誠一が担当した。
9. 本書で使用している遺構略記号は以下の通りである。
S K…土坑、S D…溝、N R…自然流路、S X…その他不明な遺構
10. 本書で使用する遺構埋土等の色調については1989年度版『新版標準土色帳』小山正忠・竹原秀雄編著を参考に記述した。
11. 調査区の座標は、建設省告示の国土座標第Ⅶ系に準拠する。
12. 調査の実測図、写真等の記録は財団法人愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
13. 調査による出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目 次

第1章 前言	1
第1節 調査の経緯と方法	1
第2節 地理的環境	3
第3節 歴史的環境	4
第2章 遺構	5
第1節 基本層序	5
第2節 遺構の概況	5
第3節 土坑	8
(1) 土坑の形態	8
(2) 土坑の埋土	8
(3) 土坑の分布	11
(4) 土坑の出土遺物	12
第4節 溝・自然流路	14
(1) 溝の形態と流れ方	14
(2) 溝・自然流路の埋土	14
(3) 溝の分布	15
(4) 溝の出土遺物	15
第5節 S X02 (瓦溜まり)	16
第6節 土坑・溝の時期	16
(1) 奈良・平安時代 (8世紀～12世紀) の遺構	16
(2) 平安時代末～鎌倉時代前半 (12世紀後半～13世紀前半) の遺構	16
(3) 鎌倉時代後半～室町時代 (13世紀中頃～15世紀前半) の遺構	17
第3章 遺物	18
第1節 土器・陶磁器	18
(1) 古墳時代以前	18
(2) 土坑 (SK) 出土	18
(3) 溝 (SD) 出土	20
(4) 包含層出土	22
(5) 試掘トレンチ・攪乱部分出土	23
第2節 瓦	29
(1) 軒平瓦KD	29
(2) 丸瓦KA	32
(3) 平瓦KB	32
第3節 土製品	39
第4節 石製品	40
第5節 鉄資料	41
(1) 鉄資料の肉眼的観察と簡易検査	41
(2) 鉄資料の分析	41
第6節 礫	45
(1) 礫の分類	45
(2) 礫の構成と特徴	45
第4章 まとめ	47
第1節 大縄遺跡の変遷と特徴	47
(1) 奈良・平安時代 (8世紀～12世紀) の特徴	47
(2) 平安時代末～鎌倉時代前半 (12世紀後半～13世紀前半) の特徴	48
(3) 鎌倉時代後半～室町時代 (13世紀中頃～15世紀前半) の特徴	48
第2節 鉄資料の傾向	48
(1) 鉄資料の時期	48
(2) 鉄資料の分布傾向	48
(3) 鉄資料の特徴	48
第3節 平安時代末における開発	49
(1) 明治19年の地籍図にみられる水田とSD11・SD12	49
(2) 大縄遺跡SD11・SD12の位置付け	51

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	調査区位置図 (1:5000)	2
第3図	周辺の遺跡と地形 (1:50000)	3
第4図	遺構配置図と土層堆積図 (1:600)	6
第5図	基本層序①・②部分 (1:50)	7
第6図	B区土坑・溝 (平面図は1:100、土層断面図は1:50)	9・10
第7図	SK48・SK53・SX01 (1:100)	11
第8図	B区SK44植物質の遺物、SX02 (瓦溜まり) 出土状況 (1:40)	12
第9図	SD11・SD12土層 (1:50)	15
第10図	古墳時代以前の遺物 [1~6] (1:4)	18
第11図	A・B区土坑 (SK) 出土遺物 [7~33] (1:4)	19
第12図	A・B区溝 (SD) 出土遺物 [34~63] (1:4)	21
第13図	B区トレンチ・包含層出土遺物 [64~97] (1:4)	22
第14図	攪乱層等出土遺物 [98~140] (1:4)	24
第15図	軒平瓦 [141~146]・丸瓦 [147~150] (1:4)	30
第16図	平瓦 [151~152] (1:4)	31
第17図	平瓦 [153~154] (1:4)	33
第18図	平瓦 [155~157] (1:4)	34
第19図	平瓦 [158~161] (1:4)	35
第20図	平瓦 [162~167] (1:4)	36
第21図	平瓦 [168~174] (1:4)	37
第22図	土製品 [175~184] (1:4)	40
第23図	石製品 [185~187] (1:4)	41
第24図	B区出土鉄資料 [188~200] (1:2)	43
第25図	B区出土鉄資料 [201・202] (1:2)	44
第26図	遺構の時期 (1:500)	47
第27図	鉄資料の分布 (1:500)	49
第28図	大縄遺跡周辺の地籍 (約1:2400)	50

表 目 次

第1表	土坑状遺構	13	第7表	土器・陶磁器 [127~140]	29
第2表	溝状遺構	16	第8表	瓦 [141~174]	38
第3表	土器・陶磁器 [1~26]	25	第9表	土製品 [175~184]	40
第4表	土器・陶磁器 [27~60]	26	第10表	石製品 [185~187]	40
第5表	土器・陶磁器 [61~93]	27	第11表	鉄資料一覧	42
第6表	土器・陶磁器 [94~126]	28	第12表	礫の形態と大きさ	46

付 図

- 図版 1 A区遺構図 (1:200)52
図版 2 B区遺構図 (1:200)53
図版 3 C区遺構図 (1:200)54

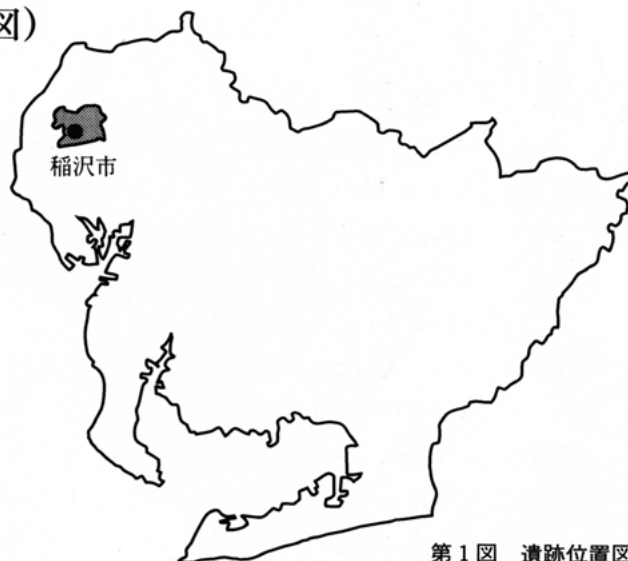
写真図版

- 図版 1 大縄遺跡全景 (A区・B区調査時)
図版 2 大縄遺跡から東方を眺む、A区全景
図版 3 B区全景、A区SK48、B区SX02 (瓦溜まり)、B区SK34・SK44、
B区SK44出土植物質の遺物
図版 4 B区SK38とSK06、B区SD04とSD05、B区SK28とSK29、
B区SD11・SD12、C区全景
図版 5 古墳時代以前の土器・陶器、土坑出土の土器・陶磁器 [1]、
土坑出土の土器・陶磁器 [2]、溝出土の土器・陶磁器 [1]、
溝出土の土器・陶磁器 [2]、B区包含層等出土土器・陶磁器 [1]
図版 6 溝出土の土器・陶磁器 [3]、B区包含層等出土土器・陶磁器 [2]、
B区包含層等出土土器・陶磁器 [3]、攪乱層等出土土器・陶磁器 [1]、
攪乱層等出土土器・陶磁器 [2]
図版 7 攪乱層等出土土器・陶磁器 [3]、攪乱層等出土土器・陶磁器 [4]、
軒平瓦KD、丸瓦KA
図版 8 平瓦KB [1]
図版 9 平瓦KB [2]
図版10 平瓦KB [3]、土製品、石製品、鉄資料

第1章 前 言

第1節 調査の経緯と方法 (第1図、第2図)

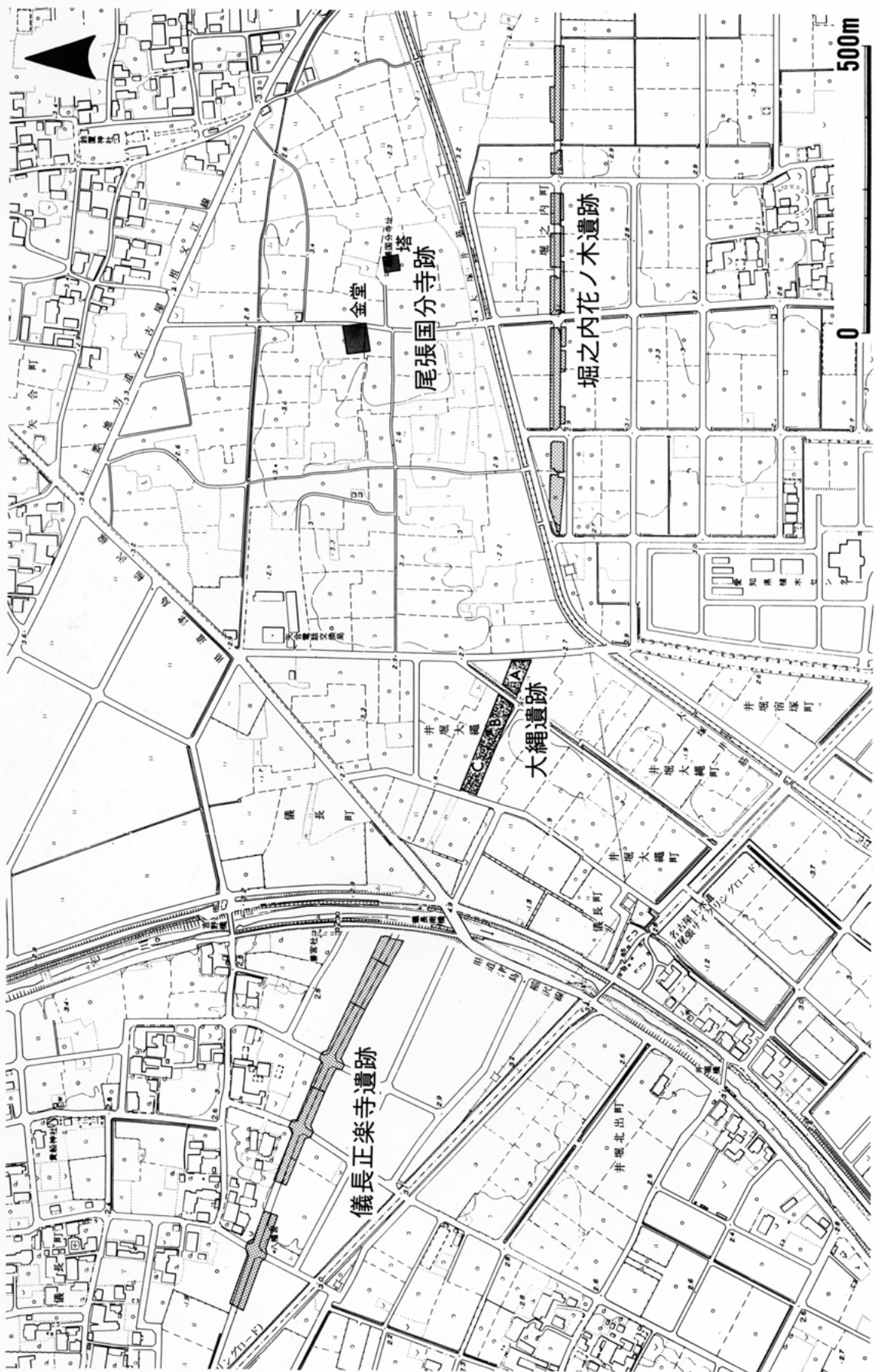
大縄遺跡は愛知県稲沢市井堀大縄町に位置する遺跡で、愛知県土木部道路建設課では、県道名古屋祖父江線建設を計画し、その予定用地内に古代～中世の遺物散布地である『大縄遺跡』（遺跡番号県09250、市5-34）が所在しており、事前に発掘調査し、記録保存する必要性が認められた。そのため愛知県埋蔵文化財調査センターでは調査計画を策定する



第1図 遺跡位置図

ため遺跡の試掘調査を行い、範囲の確認をした。この際試掘トレンチから多くの古代瓦の他、土器・陶器が確認された。このため、新県道建設に先立って発掘調査が計画され、愛知県土木部より愛知県教育委員会をとおして委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが平成7年10月から平成7年12月までの期間（A区・B区：10月下旬～12月中旬、C区：10月上旬～10月中旬）で、大縄遺跡の発掘調査を実施した。調査区はA区とB区の間にある用水路・道路、B区北側・南側の耕作地への侵入路を確保するためにA区・B区・C区の3つに分けて調査した。調査面積はA区500㎡、B区850㎡、C区850㎡の総面積2200㎡である。発掘調査終了後、平成7年度から平成8年度にかけて出土遺物の整理作業、及び報告書作成を行った。

調査方法は、現地表面から表土のみをバック・ホウにより除去したのち、建設省告示によって定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠した5mグリッドを設定し、手掘りで包含層を掘削して遺構を検出する方法をとった。遺構測量については、A区・B区はヘリコプターによる航空写真測量を実施し、調査区全面の1/50基本平面図を作成したほか、重要部分については補助測量図を手測りにより実施し、C区は調査区全面の1/50基本平面図・重要部分の補助測量図全てを手測りによって行った。



第2図 調査区位置図 (1 : 5000)

第2節 地理的環境（第3図）

濃尾平野は木曾川により埋積された沖積平野であり、上流域より扇状地地帯、氾濫原地帯、三角州地帯という地形に分けられる。木曾川南側になる愛知県の尾張地域では、かつての木曾川支流である数多くの小河川が流下し自然堤防と後背湿地を形成している。大縄遺跡のある稲沢市は濃尾平野の氾濫原地帯のほぼ中央部に位置し、西を日光川、東を五条川に画された中にあり、市の中央部を三宅川が蛇行しながら南流する。大縄遺跡は三宅川が稲沢市内で最後に小さく蛇行する部分の左岸自然堤防上に位置する。調査前の本遺跡が植木畑であったように、稲沢市周辺の地域では植木の生産が盛んで、周辺の自然堤防などの微高地には植木畑が、後背湿地にあたる部分では水田が開かれ、水田の中に植木畑が浮かぶ景観となっている。



第3図 周辺の遺跡と地形（1：50000）

- A. 尾張国分寺跡 B. 尾張国分尼寺跡（馬場法花寺遺跡） C. 東畑廃寺跡 D. 法立廃寺跡
E. 三宅廃寺跡 F. 尾張国府跡

第3節 歴史的環境（第3図）

大縄遺跡のある稲沢市周辺は古代以後の遺跡が集中する地域で、濃淡があると思われるが、第3図に見られるように現況で微高地のほとんどで古代の遺物が確認されている。このような遺跡の分布が集中する背景には、A尾張国分寺跡、B尾張国分尼寺跡（法華寺跡）、C東畑廃寺跡、D法立廃寺跡、E三宅廃寺跡、F尾張国府跡など古代の官衙・寺院跡などが集中して分布しており、古代における尾張地域の政治・文化の中心地にあることがすぐに思い起こされる。この様な状況において遺跡相互の関係から地域の歴史を述べることは難しく、ここでは中世における遺跡が古代の遺跡に重複し、さらに分布を広げることが指摘するに留める。

ところで先述したように大縄遺跡は試掘時に瓦が大量に発見され、発掘調査にいたった遺跡であるが、遺跡分布図に見られる瓦散布が確認される遺跡（網目のある遺跡）は、古代に瓦を葺くと思われる官衙・寺院以外の遺跡においても存在する。例えば尾張国分寺に始源を求められる瓦の分布は尾張国分寺と谷を一つ挟んだ大縄遺跡で確認されるのはもちろん、三宅川を挟んだ対岸の遺跡にまで瓦が散布するようであり、尾張国分寺跡を中心に考えると半径1.0km～1.5kmの範囲に瓦散布がある。これらの瓦は洪水などによって流されたものも含むと思われるが、少なくとも川を超えて移動した瓦は何らかの人為的行為により尾張国分寺跡から移動したものと考えられる。また尾張国分寺跡以外に瓦を葺く建物の存在する重要な古代遺跡が、地中に眠っているのかも知れない。

第2章 遺構

第1節 基本層序（第4図・第5図）

大縄遺跡は標高2.5m前後の三宅川左岸自然堤防上の微高地を中心に立地する。西は次第に低くなり三宅川の旧氾濫原に入るC区西端部分で標高2.0m、東側谷部分になるA区で標高2.0mを測る。

本遺跡の立地する微高地は『朝日遺跡II』報告において、縄文時代後期における海岸線の変化によって形成された浜堤列と指摘される微高地上にも位置している⁽¹⁾。

遺跡の基盤土層は可能な限り、深くトレンチで土層を確認した。B区・C区においては基本的に上から耕作土であるシルト（ザラザラとした触感はなく粘土紐ができるがリングにはならない、肉眼では粒子が判別できない）層、近年の耕作による攪乱が及んでいない褐色・黄褐色・オリーブ褐色のシルト・細粒砂（ザラザラとした触感はないが、粘土紐はできない、肉眼では粒子の判別できない）層、そして粒土の粗い褐色・黄褐色の粗粒砂（ザラザラとした触感があり、粒子が肉眼で判別できる）層の大きく3層に分かれ、耕作土層を除く土層はさらに数層に分かれる。また耕作土層にもB区東側、C区西側において近年の植木栽培による畑作耕作土とその下層にある耕地区画整理以前の水田土壌に分かれる。遺構はシルト・細粒砂層の上部から掘り込まれており、一部の溝で検出される面が異なるが、遺構は同一の検出面において確認している。C区では近年の耕地区画整理などにより遺物包含層・遺構とも削平されており、明確な遺構を確認できなかった。

A区はB区・C区とは堆積状況が異なり、上から水田耕作土であるシルト層、近年の耕作による攪乱が及んでいない黄褐色・にぶい黄色・オリーブ褐色・暗灰黄色のシルト・細粒砂層が堆積する。B区の下部に見られた粗粒砂層はA区南西端で耕作土直下でシルト・細粒砂層の上に堆積する。遺構は耕作土直下の土層から掘り込まれている。

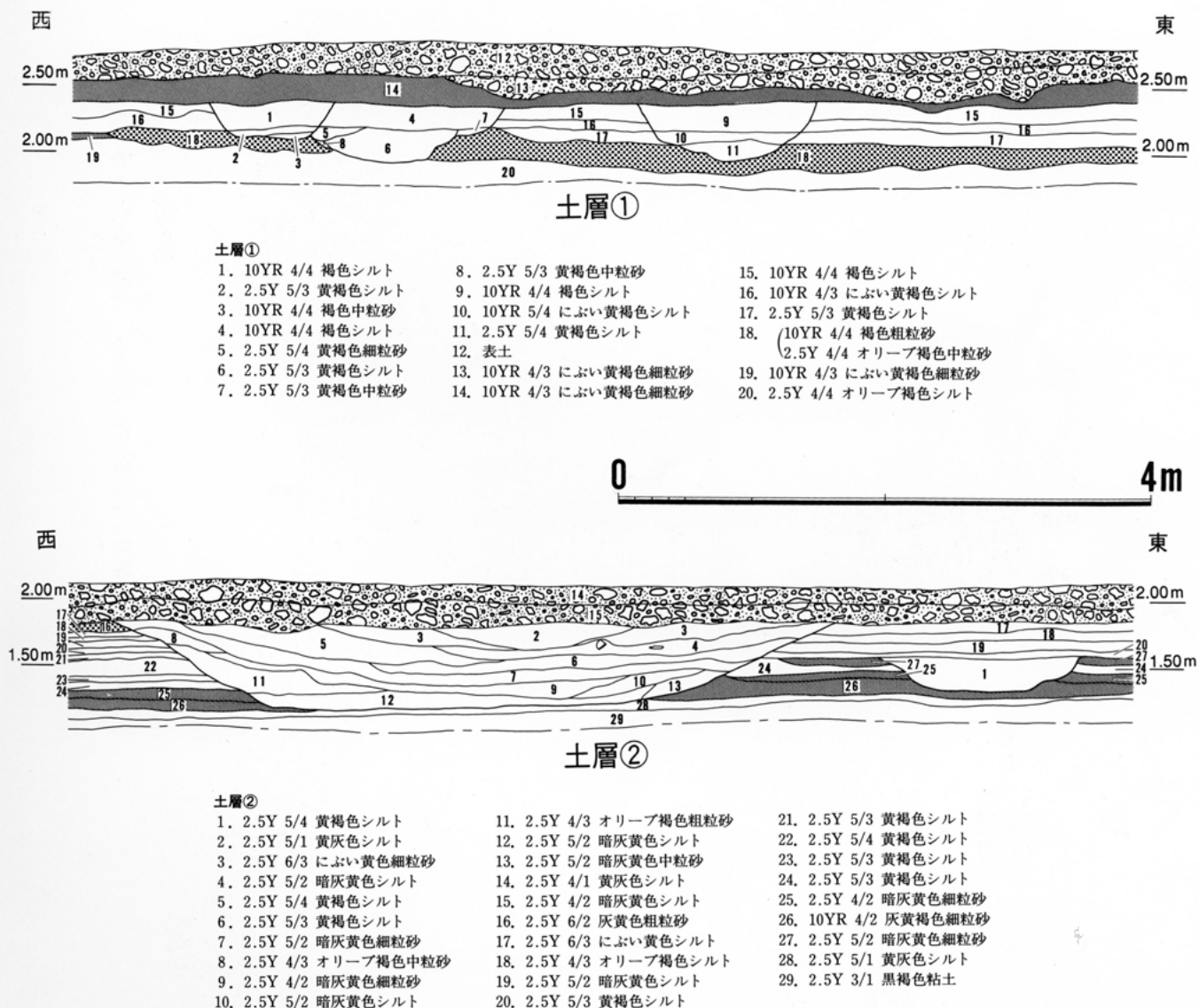
第2節 遺構の概況（第4図）

遺構の分布は、三宅川自然堤防上に位置するB区に集中して検出されており、自然堤防から東の谷部分となるA区、最近の区画整理などによって旧表土・包含層が攪乱されていたC区では遺構が希薄となる。特にC区ではほとんど遺構を確認できなかった。

A区では中世の土坑2基、時期不明の土坑3基、中世の溝1条、古代以前の自然流路4条を確認した。B区では中世の土坑40基、溝9条が確認され、一部の遺構で切り合い

の多いものがあつた。C区では小型の土坑が6基見つかったのみである。古墳時代以前の遺構は検出されていない。

B区では遺構間に切り合い関係が存在することから、いくつかの時期に分かれるものと思われる。溝と土坑の切り合いでは全て溝が新しい関係にあつたが、土坑出土の遺物に室町時代中頃に下る時期のものが出土しており、必ずしも土坑が溝より古いとはいえない。



第5図 基本層序 (第4図矢印①・②部分 1:50)

第3節 土坑（第6図～第8図、第1表）

(1) 土坑の形態

土坑は平面形の形態から溝状丸底土坑・大型平底土坑・方形土坑・円形土坑・楕円形土坑の大きく5形式に分かれ、さらに底（断面形）の形態から方形土坑・円形土坑・楕円形土坑は平底・丸底・ロート状丸底の3形態に分かれる。以下土坑の平面形と底（断面形）を組み合わせる方形平底土坑・方形丸底土坑…とそれぞれを呼ぶことにする。

平面形からの分類

溝状丸底土坑…本来溝の一部かとも思われるもので、幅の割に長いSK03がある。

大型平底土坑…平面形は方形状のもの（SK34・SK43・SX01）と楕円形状のもの（SK53）とあり、土坑の底が平底のもの。深さは0.1m～0.3mと比較的浅い。

方形土坑…隅丸方形状・台形状・長方形状などやや不整形なものもあるが、土坑の平面形が四角形を指向している土坑。平底が多く、丸底とロート状丸底のものがある。

円形土坑…やや不整形なものもあるが、土坑の平面形が円形を指向しているもの。平底の土坑はなく、丸底とロート状丸底のものがある。

楕円形土坑…円形の土坑で明らかに長径が短径に比べて長い土坑。平底のものはなく、丸底とロート状丸底のものがある。

底（断面形）…方形土坑・円形土坑・楕円形土坑の細分類

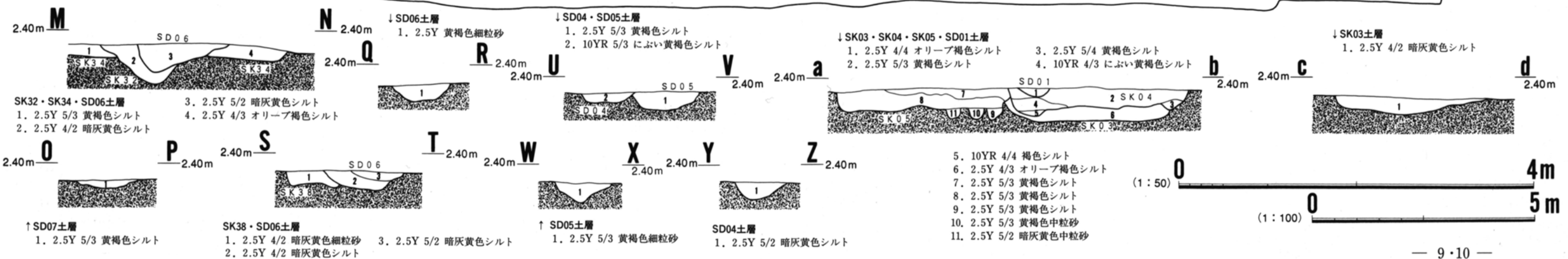
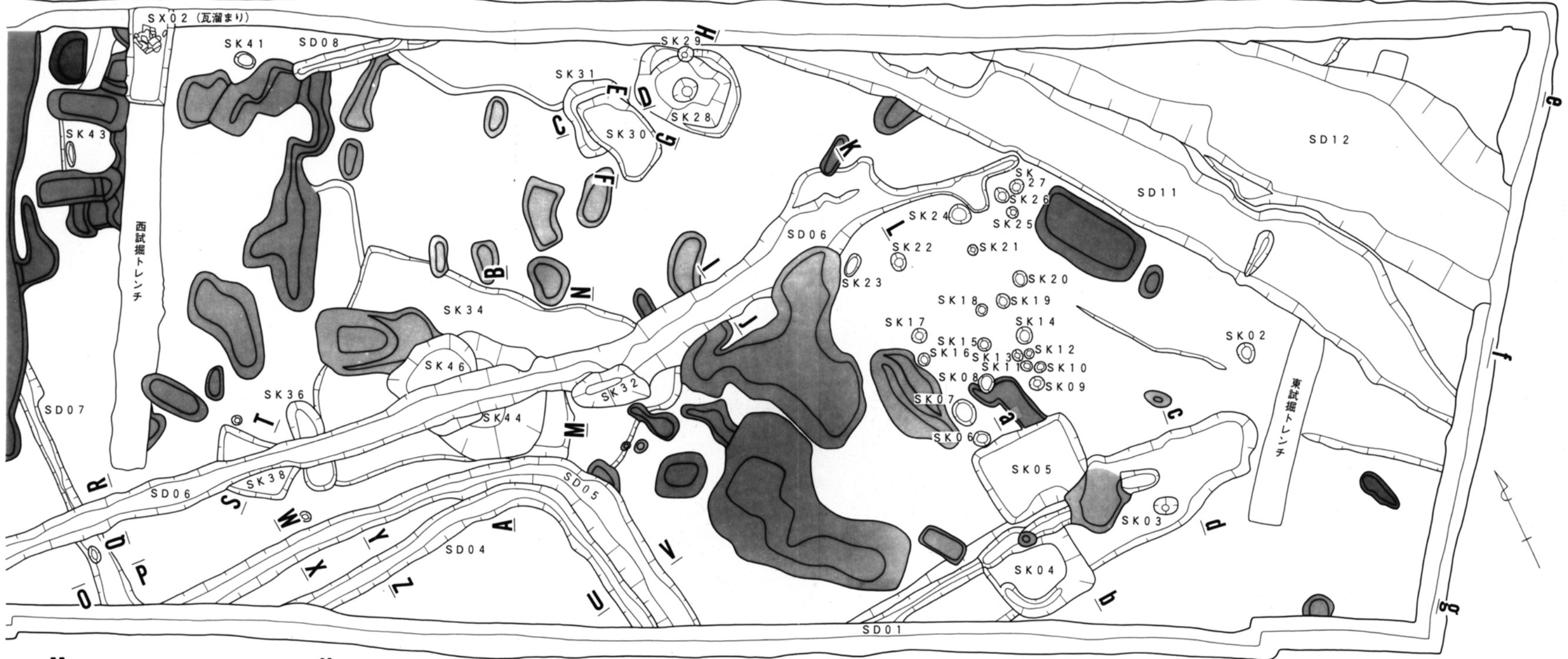
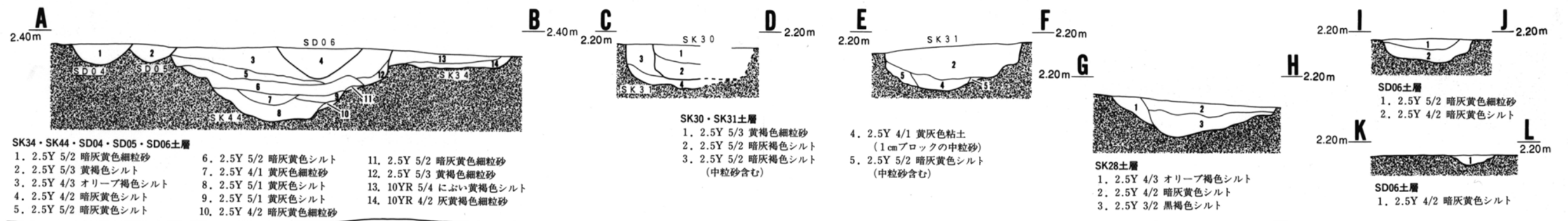
平底…土坑の底の一部に平坦な部分がある土坑。方形土坑のみで深さが0.1m～0.2mの浅い土坑にみられる。[方形土坑…SK04・SK05・SK30・SK38]

丸底…土坑の底に平坦な部分がない土坑。土坑法面の途中に平坦なテラス部分を持つ2段掘りの土坑もある（円形土坑…SK48）。円形土坑の深さが0.5m以下の柱穴状のものが大部分で、方形土坑・楕円形土坑では比較的大型の土坑のみ。[方形土坑…SK31、円形土坑…SK02～SK06・SK22～SK24・SK27・SK29・SK40～SK42・SK49・SK54・SK59、楕円形土坑…SK23・SK36・SK50・SK51]

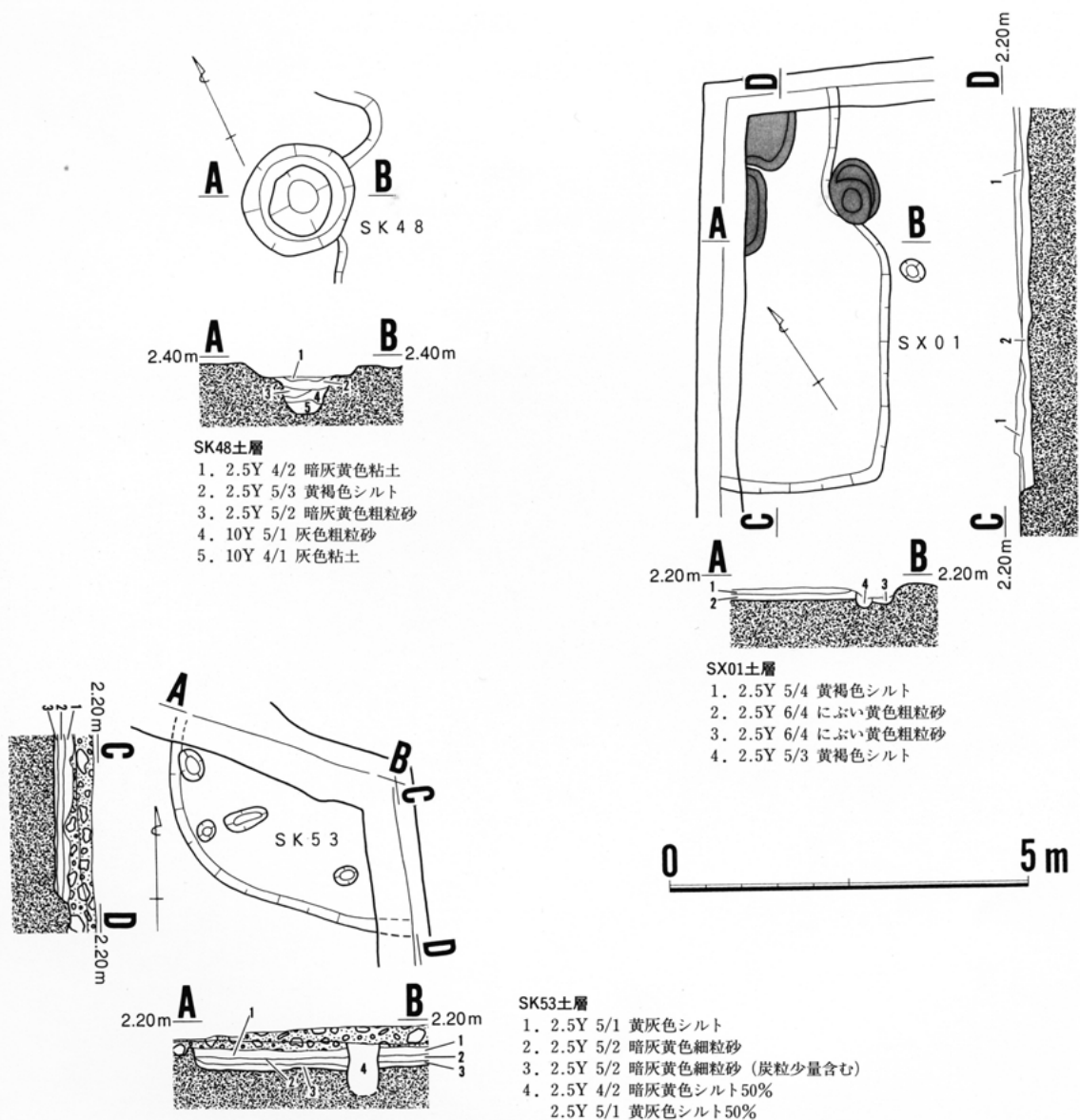
ロート状丸底…断面形が明らかなロート状（摺鉢状）になり、土坑の底に平坦な部分がない土坑。どの平面形態の土坑でも長径が1.5mを超える大型のものである。[方形土坑…SK28・SK46、円形土坑…SK44、楕円形土坑…SK32]

(2) 土坑の埋土

土坑の埋土は、2.5Y4/2～5/2 暗灰黄色、2.5Y5/3～5/4 黄褐色、2.5Y4/1～5/1 黄灰色、2.5Y4/3 オリーブ褐色をしたシルト・細粒砂が埋土としてレンズ状の堆積をしているものがほとんどで、小型の円形丸底土坑の大部分はこれらの単一の埋土であった。埋土の中に班土状になっているものはSK31の最下層でやや見られた程度で他の土坑では確認されなかった。



第6図 B区土坑・溝 (平面図は1:100、土層断面図は1:50)



第7図 SK48・SK53・SX01 (1:100)

大型の土坑SK28・SK44の底に近い下部の埋土に2.5Y 3/2・10YR 3/1黒褐色の粘土・シルトが確認され、SK44の7層からはアシヤガマといった植物に木の細枝がやや格子状に重なって出土しており、深い土坑の下部ではほぼ還元状態に近い状態にあったものと思われる(第9図)。

(3) 土坑の分布

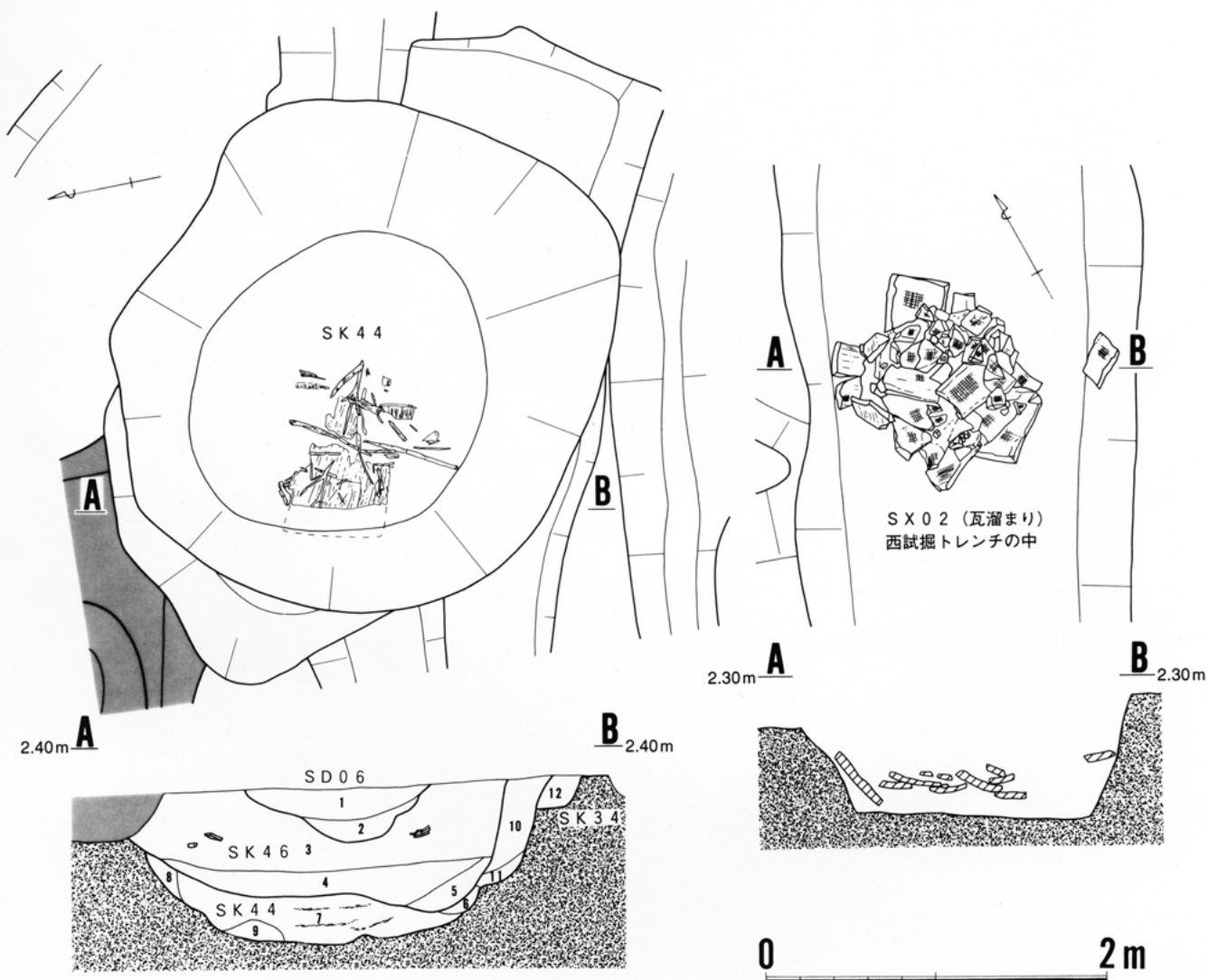
土坑の間にも切り合い関係があり、特にSK32・SK34・SK36・SK38・SK44・SK46は集中し、3～4回の遺構の重複が見られる。またSK03・SK04・SK05も重複し、SK04・SK05の様に同様な形態の土坑でも重複が見られる。他にSK28・SK30・SK31でもよく似た規模の土坑が集まり、重複する部分がある。

SK03・SK04・SK05の北側においては小型の円形丸底土坑が集中しており、これ

らの同一の形態の間では重複が見られず、柱痕跡や土坑が並ぶ列などは明確ではないが、この地点に簡易な小屋状の建物が存在した可能性がある。

(4) 土坑の出土遺物 (第1表)

小型の円形丸底土坑など遺物の出土していない土坑も多くあるが、土坑からは古代～中世の須恵器、灰釉陶器、瓦、古代土師器、緑釉陶器、南部系灰釉系陶器、北部系灰釉系陶器、常滑甕、古瀬戸の施釉陶器、鉄滓が出土しているが、出土遺物の組み合わせ



SK44土層

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1. 10YR 5/3 にふい黄褐色シルト | 7. 10YR 3/1 黒褐色粘土 |
| 2. 10YR 5/3 にふい黄褐色シルト | 8. 2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト |
| 3. 10YR 5/3 にふい黄褐色シルト | 9. 2.5Y 4/2 暗灰黄色中粒砂 |
| 4. 2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト | 10. 10YR 4/2 灰黄褐色シルト |
| 5. 2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト | 11. 2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト |
| 6. 2.5Y 5/2 暗灰黄色粘土 | 12. 10YR 4/3 にふい黄褐色シルト |

第8図 B区 SK44植物質の遺物、SX02 (瓦溜まり) 出土状況 (1:40)

遺構番号	旧番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	出土遺物	備考
S K 02	B区S K 02	円形丸底	0.45	0.35	0.28		
S K 03	B区S K 03	溝状丸底	(9.20)	1.9	0.20～0.40	須恵器、古代土師器	S K 03→S K 05→S K 04→S D 01
S K 04	B区S K 04	方形平底	2.1	2	0.15	瓦、古代土師器、南部系灰釉系陶器	S K 03→S K 05→S K 04→S D 01
S K 05	B区S K 05	隅丸方形平底	2.4	1.8	0.2	須恵器、南部系灰釉系陶器(7)	S K 03→S K 05→S K 04→S D 01
S K 06	B区S K 06	円形丸底	0.35	0.35	0.2		
S K 07	B区S K 07	円形丸底	0.6	0.5	0.45	須恵器、古代土師器	
S K 08	B区S K 08	円形丸底	0.4	0.35	0.25		
S K 09	B区S K 09	円形丸底	0.3	0.3	0.3	南部系灰釉系陶器(8)	
S K 10	B区S K 10	円形丸底	0.25	0.2	0.2		
S K 11	B区S K 11	円形丸底	0.25	0.2	0.15		
S K 12	B区S K 12	円形丸底	0.25	0.2	0.15		
S K 13	B区S K 13	円形丸底	0.25	0.2	0.2		
S K 14	B区S K 14	円形丸底	0.35	0.35	0.3		
S K 15	B区S K 15	円形丸底	0.35	0.3	0.1		
S K 16	B区S K 16	円形丸底	0.3	0.25	0.25		
S K 17	B区S K 17	円形丸底	0.35	0.3	0.25	須恵器	
S K 18	B区S K 18	円形丸底	0.3	0.25	0.15		
S K 19	B区S K 19	円形丸底	0.35	0.3	0.25		
S K 20	B区S K 20	円形丸底	0.35	0.3	0.15		
S K 21	B区S K 21	円形丸底	0.25	0.2	0.2	須恵器、瓦	
S K 22	B区S K 22	円形丸底	0.4	0.3	0.2	古代土師器	
S K 23	B区S K 23	楕円形丸底	0.5	0.3	0.2		
S K 24	B区S K 24	円形丸底	0.5	0.45	0.15		
S K 25	B区S K 25	円形丸底	0.25	0.25	0.1		
S K 26	B区S K 26	円形丸底	0.35	0.3	0.2		
S K 27	B区S K 27	円形丸底	0.3	0.3	0.1		
S K 28	B区S K 28	隅丸長方形 ロート状丸底	2.35	1.85	0.5	須恵器、古代土師器、古瀬戸(9)	S K 28→S K 29
S K 29	B区S K 29	円形丸底	0.35	0.35	0.15		S K 28→S K 29
S K 30	B区S K 30	隅丸長方形平底	2.1	1.15	0.4	須恵器、古代土師器	S K 31→S K 30
S K 31	B区S K 31	方形丸底	1.7	1.3	0.5	須恵器、瓦、古代土師器	S K 31→S K 30
S K 32	B区S K 32	楕円形ロート状 丸底	1.8	0.9	0.45	須恵器00、灰釉陶器	S K 34→S K 32→S D 06
S K 34	B区S K 34 ・S K 45	長台形平底	7	4	0.15	須恵器、古代土師器	S K 34→S K 32→S K 36→S K 44→ S K 46→S D 06
S K 36	B区S K 36	楕円形丸底	2.1	0.75	0.3	須恵器、古代土師器	S K 34→S K 36→S D 06
S K 38	B区S K 38	不整長方形平底	1.85	1.3	0.15	須恵器	S K 38→S D 06
S K 40	B区S K 40	円形丸底	0.25	0.2	0.05		
S K 41	B区S K 41	円形丸底	0.45	0.35	0.2	瓦、古代土師器	
S K 42	B区S K 42	円形丸底	0.4	0.3	0.05		S X 01→S K 42
S K 43	B区S K 43	方形状平底	(1.15)	(1.10)	0.1		
S K 44	B区S K 44	円形ロート状 丸底	3	2.6	0.9	須恵器03、灰釉陶器04、緑釉陶器、 瓦、古代土師器、南部系灰釉系陶器 (15～22)	S K 34→S K 44→S K 46→S D 06、 底部近くに植物質の遺存体
S K 46	B区S K 46	隅丸長方形ロート 状丸底	2.2	2	0.75	須恵器00、灰釉陶器03、瓦(163、172)、 古代土師器00、南部系灰釉系陶器 (24～29)、鉄滓 (194)	S K 34→S K 44→S K 46→S D 06
S K 47	B区S K 47	丸底			0.25	瓦	S X 01より上層
S K 48	A区S K 01	円形二段掘り 丸底	1.6	1.55	0.75	須恵器、灰釉陶器、瓦、古代土師器、 南部系灰釉系陶器02	
S K 49	A区S K 02	円形丸底	1.5	1.3	0.5	須恵器、灰釉陶器、瓦、南部系灰釉 系陶器	
S K 50	A区S K 03	楕円形丸底	1.5	0.95	0.5	須恵器、灰釉陶器、瓦、古代土師器 03、南部系灰釉系陶器、北部系灰釉 系陶器、施釉陶器	
S K 51	A区S K 04	長楕円形丸底	4.9	1	0.45		
S K 53	A区S K 06	楕円形状平底	(3.3)	(2.1)	0.3		
S K 54	C区	円形丸底	0.7	0.65	0.2		
S K 55	C区	円形丸底	0.25	0.2	0.06		
S K 56	C区	円形丸底	0.25	0.2	0.15		
S K 57	C区	円形丸底	0.45	0.45	0.15		
S K 58	C区	円形丸底	0.3	0.25	0.1		
S K 59	C区	円形丸底	0.25	0.2	0.08		
S X 01	B区S Z 01	方形状平底	(4.6)	(2.3)	0.2		S X 01→S X 42

第 1 表 土坑状遺構

から、次の3つに分類できる。

古代型…須恵器・灰釉陶器・瓦・古代土師器・緑釉陶器などの古代の遺物のみ出土する土坑〔SK03・SK07・SK17・SK21・SK30・SK31・SK32・SK34・SK36・SK38・SK41〕

中世前半型…古代の遺物に加えて常滑甕・南部系灰釉系陶器のみ出土する土坑〔SK04・SK05・SK09・SK46・SK49〕

中世後半型…古代の遺物・常滑甕・南部系灰釉系陶器に加えて北部系灰釉系陶器や古瀬戸の施釉陶器が出土する土坑〔SK28・SK50〕

第4節 溝・自然流路（第6図・第9図、第2表）

（1）溝の形態と流れ方

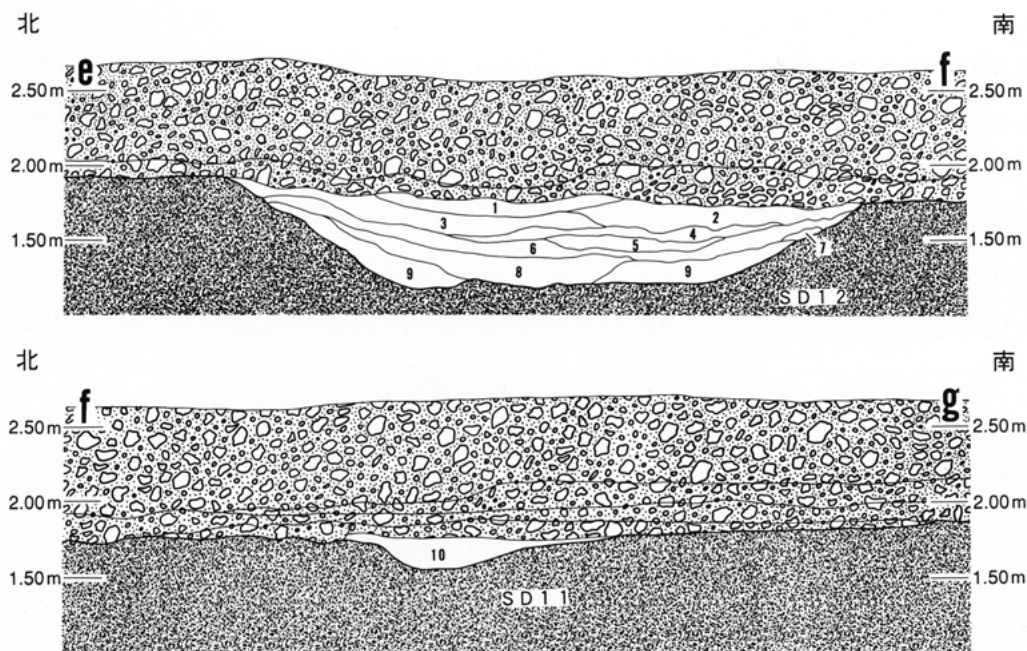
検出された溝は本来あった形の下部、底部近くと思われ、溝の上部は後世の耕作などで攪乱されている。検出された遺構の規模から溝は2つに分類される。幅0.30～0.95m、深さ0.10～0.30mの小型の溝（SD01・SD04・SD05・SD06・SD07・SD08・SD09）と、幅2.0～3.0m、深さ0.50m程ある大型の溝（SD11・SD12）に分かれる。さらに小型の溝は流れる方向から、N-85°-E～N-83°-W、N-14°-E～N-0°30'-Wのほぼ東西・南北方向に流れるSD01・SD04・SD05・SD06・SD07・SD08とN-16°-Eに流れるSD09に分かれる。ほとんど直線状に流れるが、SD04・SD05は南西に開く鍵状に検出された。大型の溝（SD11・SD12）はN-36°-W～N-38°-Wに流れる。溝の断面形は全て丸底状である。

自然流路（NR01～NR04）はA区のある地形の傾斜に合わせて北から南へ蛇行しながら流下する。自然流路は幅1.0mを超える大型の溝状に検出されたが、深さは0.10～0.20mと浅く、底面やや丸みを帯びた平底であった。

（2）溝・自然流路の埋土

溝の埋土は、1層、2層からなる小型の溝と多くの層からなる大型の溝がある。小型の溝の埋土は2.5Y4/2～5/2暗灰黄色、2.5Y4/4オリーブ褐色、10YR4/3にぶい黄褐色、2.5Y5/3～5/4黄褐色、10YR5/3黄褐色をしたシルト・細粒砂が1層の埋土となっているものが多く、2層以上ある溝でも層の違いは不整合な面を持っていない。一方大型の溝で残りの良いSD12は土色は他の溝と大差はないが、粗粒砂・中粒砂の層と粘土・シルトの層が不整合な面を持って互層に堆積しており、少なくとも5段階の埋り方の推移が見て取れる。SD12が廃棄された後SD11が掘られており、おそらくSD12埋土上部の層が堆積した段階にはSD11が掘られていたものと思われる。

自然流路の埋土は2.5Y5/2暗灰黄色、2.5Y6/3にぶい黄色、5Y5/2～6/



SD11・SD12土層

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. 2.5Y 5/2 暗灰黄色粗粒砂 | 6. 2.5Y 5/2 暗灰黄色粗粒砂 |
| 2. 2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト | 7. 2.5Y 4/2 暗灰黄色粗粒砂 |
| 3. 2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト | 8. 2.5Y 4/2 暗灰黄色粘土 |
| 4. 2.5Y 4/6 オリーブ褐色粗粒砂 | 9. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色粗粒砂 |
| 5. 2.5Y 5/2 暗灰黄色中粒砂 | 10. 2.5Y 5/3 黄褐色シルト |

0 4m

第9図 SD11・SD12土層 (1:50)

2 灰オリーブ色、2.5Y 5 / 3 黄褐色のシルト・細粒砂に中粒砂・粗粒砂が混じるものでシルト・細粒砂の層には酸化鉄化した腐食物が含まれている。

(3) 溝の分布

溝の分布ではSD04・SD05・SD06とSD11・SD12が各々流れる方位、大きさとも類似しており、SD04とSD05、SD11とSD12は切り合い関係を持っており、同様の性格をもつ溝と思われる。SD06はSD04・SD05と関連して流れるものと思われる。

(4) 溝の出土遺物 (第2表)

自然流路からは遺物が出土していないので、ここでは溝の出土遺物について述べる。溝の出土遺物には、古代～中世の須恵器、灰釉陶器、瓦、古代土師器、緑釉陶器、南部系灰釉系陶器、北部系灰釉系陶器、常滑甕、古瀬戸の施釉陶器、鉄滓が出土しているが、出土遺物の組み合わせから、次の2つに分類できる。

中世前半型…古代の遺物に加えて常滑甕・南部系灰釉系陶器のみ出土する溝

[SD06・SD07・SD08]

中世後半型…古代の遺物・常滑甕・南部系灰釉系陶器に加えて北部系灰釉系陶器や古

遺構番号	旧番号	深さ(m)	出土遺物	備考
S D01	B区S D01	0.1		S K03→S K05→S K04→S D01
S D04	B区S D03 S D04	0.2	須恵器、灰釉陶器、瓦、古代土師器、南部系灰釉系陶器(34・35)、中世土師器、常滑甕、鉄滓	S D05→S D04
S D05	B区S D02 S D05	0.2	須恵器、灰釉陶器、瓦、古代土師器、南部系灰釉系陶器(36・37・38)、北部系灰釉系陶器(39)、常滑甕	S D05→S D04
S D06	B区S D06	0.3	須恵器(41・42・43・46)、灰釉陶器(44・45・48)、瓦(151・157)、古代土師器(40)、南部系灰釉系陶器(49～56)、常滑甕(47)、炉壁	S K34→S K36・S K44→S D06、S K38→S D06、S K46→S D06、S D07→S D06
S D07	B区S D07	0.08	須恵器、瓦、古代土師器、南部系灰釉系陶器	S D07→S D06
S D08	B区S D08	0.3	瓦、古代土師器、南部系灰釉系陶器(57・58)、常滑甕	
S D09	B区S D09	0.1		S D06より新しい
S D11	B区S D11	0.2	須恵器、古代土師器、北部系灰釉系陶器	S D12→S D11
S D12	B区S D12 A区S D01	0.7	須恵器(60)、灰釉陶器(59)、瓦(167)、古代土師器、南部系灰釉系陶器(61・62・63)、北部系灰釉系陶器、常滑甕	S D12→S D11
N R01	A区S D02	0.10～ 0.20		N R01→N R02・N R03
N R02	A区S D03	0.1		N R01→N R02
N R03	A区S D04	0.1		N R01→N R03
N R04	A区S D05	0.1		

第2表 溝状遺構

瀬戸の施釉陶器が出土する溝 [S D04・S D05・S D11・S D12]

溝は中世以降埋まったものであり、出土遺物から考えるとS D06が古い。またS D04からは北部系灰釉系陶器は出土してないが、中世後半に下と思われる常滑甕片が出土している。

第5節 S X02 (瓦溜まり) (第8図)

試掘調査の際に西試掘トレンチ北側において発見されたもので、古代の平瓦(第16図～第19図、153～155・159・160・162)が数枚重なる形で検出された。本調査時に瓦周辺を精査したが遺構は見つからず、トレンチ東壁の一部に遺構らしき断面が確認されたが、瓦全体を囲むような掘り込みは確認されなかった。この様な状況から、瓦は土坑状の掘り込み底部分に合ったものと思われる。

第6節 土坑・溝の時期 (第26図)

(1) 奈良・平安時代(8世紀～12世紀)の遺構

古代型の遺物が出土していて、他の遺構との切り合い、遺構の形態・分布で古い関係にある遺構という条件で考えるとS K03・S K30・S K31・S K32・S K34・S K36・S K38がある。他に出土遺物はないが、遺構の形態から大型平底土坑のS K43・S X01をこの段階の遺構として考えておく。S K03・S K30・S K31・S K32・S K36・S K38は遺構の形態から次の段階に属する可能性もある。

(2) 平安時代末～鎌倉時代前半(12世紀後半～13世紀前半)の遺構

中世前半型の遺物が出土していて、遺構の切り合いで溝に切られる遺構でS K04・S

K05・SK44・SK46と遺構の切り合いはないが中世前半型の遺物が出土したSK09・SK48、中世後半型の遺物が出土する溝SD05に切られ、中世前半型の遺物が出土するSD07・SD08をこの段階に考える。SD12は中世後半型の遺物も出土しているが、溝下部の粘土層より12世紀後半の灰釉系陶器碗（第12図61）が出土していることから、この時期に機能していたものと思われる。またSK03・SK04・SK05の北に分布する小型円形丸底土坑の一群（SK06～SK27）は、SK07・SK17・SK21で古代型の組み合わせの遺物が出土しているが、周辺で検出された同様な土坑であるSK09からは南部系灰釉系陶器が出土していることから、この段階（以後）のものと考えておきたい。

（3）鎌倉時代後半～室町時代（13世紀中頃～15世紀前半）の遺構

中世後半型の遺物が出土する遺構をこの段階に含むが、土坑では15世紀前半の古瀬戸平碗を出土するSK28とそれより新しいSK29は15世紀代のものと考えられる。溝ではSD04・SD05・SD06・SD09・SD11・SD12がこの段階にあたる。この中でSD05とSD06は先述の通り、有意味な関係にあり、同時期の可能性がある。SD05から出土している北部系灰釉系陶器は田口大畑大洞4号窯式新段階を中心とするものが出土しており、14世紀前半～14世紀中頃に位置付けられる。SD04はSD05より切り合い関係で新しいので、14世紀後半～15世紀、SD06は13世紀前半と思われるSK44やSK46を切り込んで掘られており、この段階にした。SD01も出土遺物はないが、同様な理由でこの段階にした。SD09は他の溝より上層から掘り込まれており、新しいものと思われる。

大型の溝SD11・SD12はどちらからも北部系灰釉系陶器が出土しているが、先行するSD12は先述の通り前時期に利用されていて、13世紀の間でSD11が掘り直されたものと考えておく。

註

- (1) 森勇一 1992「朝日遺跡およびその周辺地域の地質と古環境」『朝日遺跡II（自然科学編）』財団法人愛知県埋蔵文化財センター

第3章 遺物

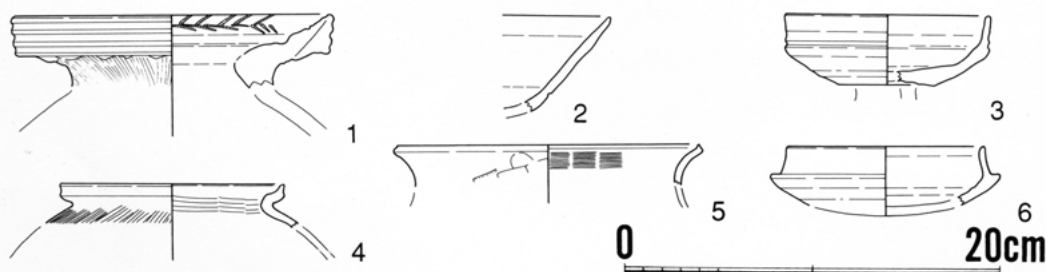
第1節 土器・陶磁器（第10図～第14図、第3表～第7表）

(1) 古墳時代以前（第10図1～6）

土師器（1・2・4・5）と須恵器（3・6）が出土している。廻間Ⅰ式期～Ⅱ式期にかけての土師器と、須恵器では東山50号窯式～岩崎17号窯式にかけてのものがある⁽¹⁾。

1は壺で表面の摩耗が激しく、赤彩などは確認できないが、口縁部が垂下拡張した端面に擬凹線文がめぐるもので廻間Ⅰ式期。2は高杯の杯部。4はS字状口縁台付甕のB類古段階のもの、5は口縁部断面が「く」の字状に外反する甕で、口縁端部を上方につまみ上げるものである。

3は高杯の杯部、6は杯身で東山50窯式のものである。



第10図 古墳時代以前の遺物〔1～6〕（1：4）

(2) 土坑（SK）出土（第11図7～33）

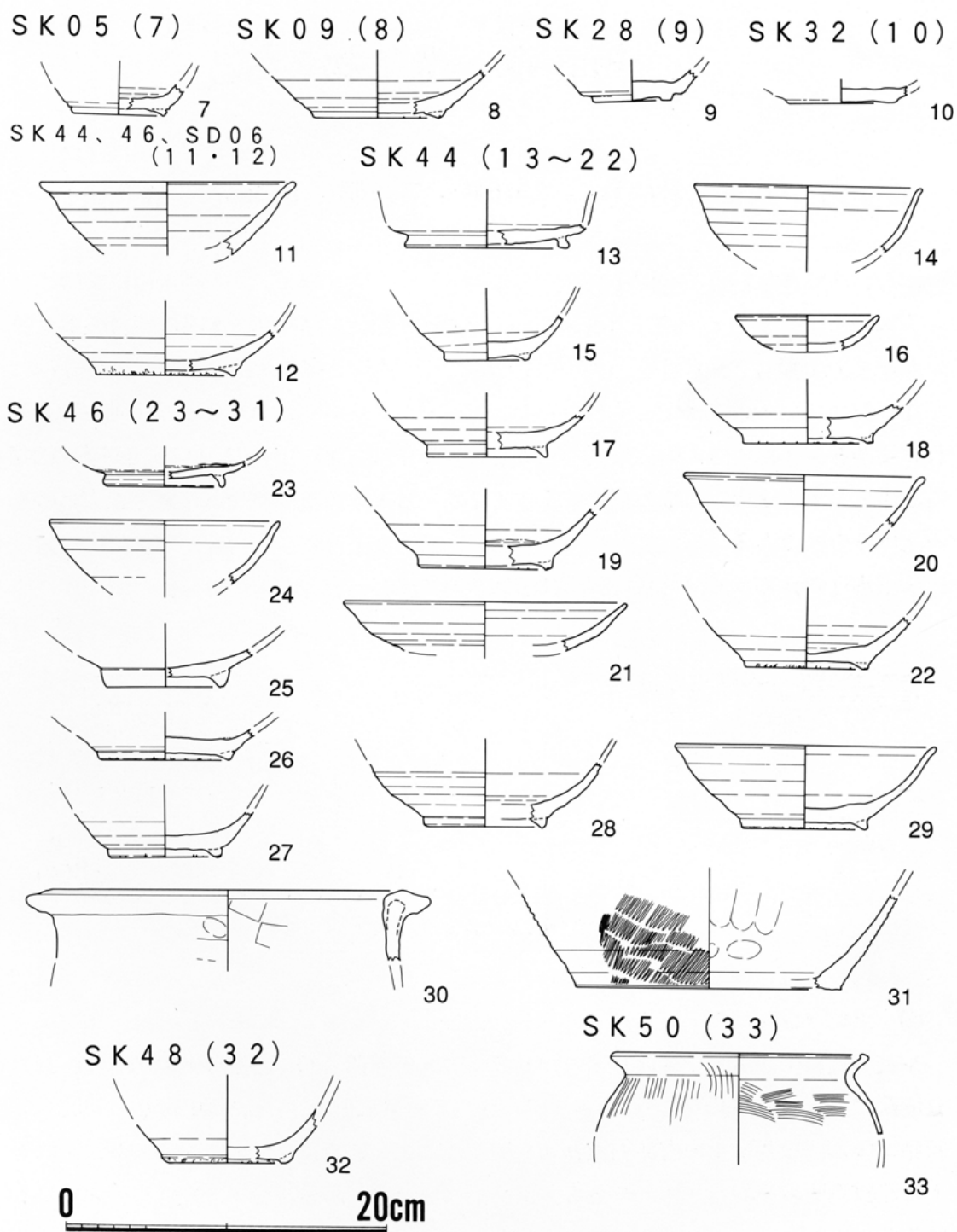
奈良時代以降の遺物で、須恵器（10・13・31）、土師器（30・33）、灰釉陶器（14・23）、緑釉陶器、灰釉系陶器（7・8・11・12・15～22・24～29・32）、施釉陶器（9）がある。灰釉系陶器には荒肌手の南部系灰釉系陶器（7・8・11・15～22・24～29・32）と均質手の北部系灰釉系陶器（12）がある。土坑出土の土器・陶磁器では、平安時代末～鎌倉時代前半のものが主体である⁽²⁾。土師器は少ない。

SK05（7）

灰釉系陶器の椀である。高台が痕跡的で体部の立ち上がりは直線的である。藤澤第7型式。

SK09（8）

灰釉系陶器の椀で藤澤第5型式。



第11図 A・B区土坑 (SK) 出土遺物 [7~33] (1:4)

SK28 (9)

古瀬戸の平椀で、高台は断面方形の削り出し高台である。藤澤古瀬戸後期Ⅲ~Ⅳ段階。

SK32 (10)

須恵器の高台のない杯身で、底部糸切り痕が残る。

SK44・SK46・SD06 (11・12)

11は南部系灰釉系陶器、12は北部系灰釉系陶器で、12は幅広の断面偏平な三角形の高台が付く。11は藤澤第5型式、12は田口浅間窯下1号窯式。

S K44 (13~22)

13は須恵器の断面方形の高台を持つ杯身で、底部には糸切り痕が残る。14は灰釉陶器の椀で、灰釉が付け掛けされている。折戸53号窯式。15~22は南部系灰釉系陶器で、15は小椀、16は小皿、17~22は椀である。17は体部が丸みを持って立ち上がり、高台は断面「ハ」の字にやや開く三角高台を持つもので、藤澤第3型式。20の椀内面には煤の付着が見られる。21は体部の立ち上がりが緩い浅い椀である。15が藤澤第3型式、16・18~22は藤澤第4~5型式に類似する。

S K46 (23~31)

23は灰釉陶器の椀で、23の内面には重ね焼き痕がある。24~29は南部系灰釉系陶器で、24~26は藤澤第4型式、27は藤澤第5型式、28・29は藤澤第5型式に類似する。25の高台は比較的高い断面三角形高台が付く。29の内面には重ね焼きの痕跡が残り、内外面に煤が付着している。30は土師器のいわゆる「清郷型」の甕である。口縁部が短く外に屈折し、口縁端部上面にナデによる浅い窪みがめぐる。永井清郷型鍋E類に類似する⁽³⁾。31は須恵器の甕で、外面にタタキが施されている。

S K48 (32)

南部系灰釉系陶器の椀で、不整形な高台が底部から体部の立ち上がる境に付いている。藤澤第5型式。

S K50 (33)

口縁端部を上方につまみ上げる口縁部が外反する球形状の土師器甕で、北村鍋A1類に類似する⁽⁴⁾。内外面ともハケ目が残る。

(3) 溝(SD)出土(第12図34~63)

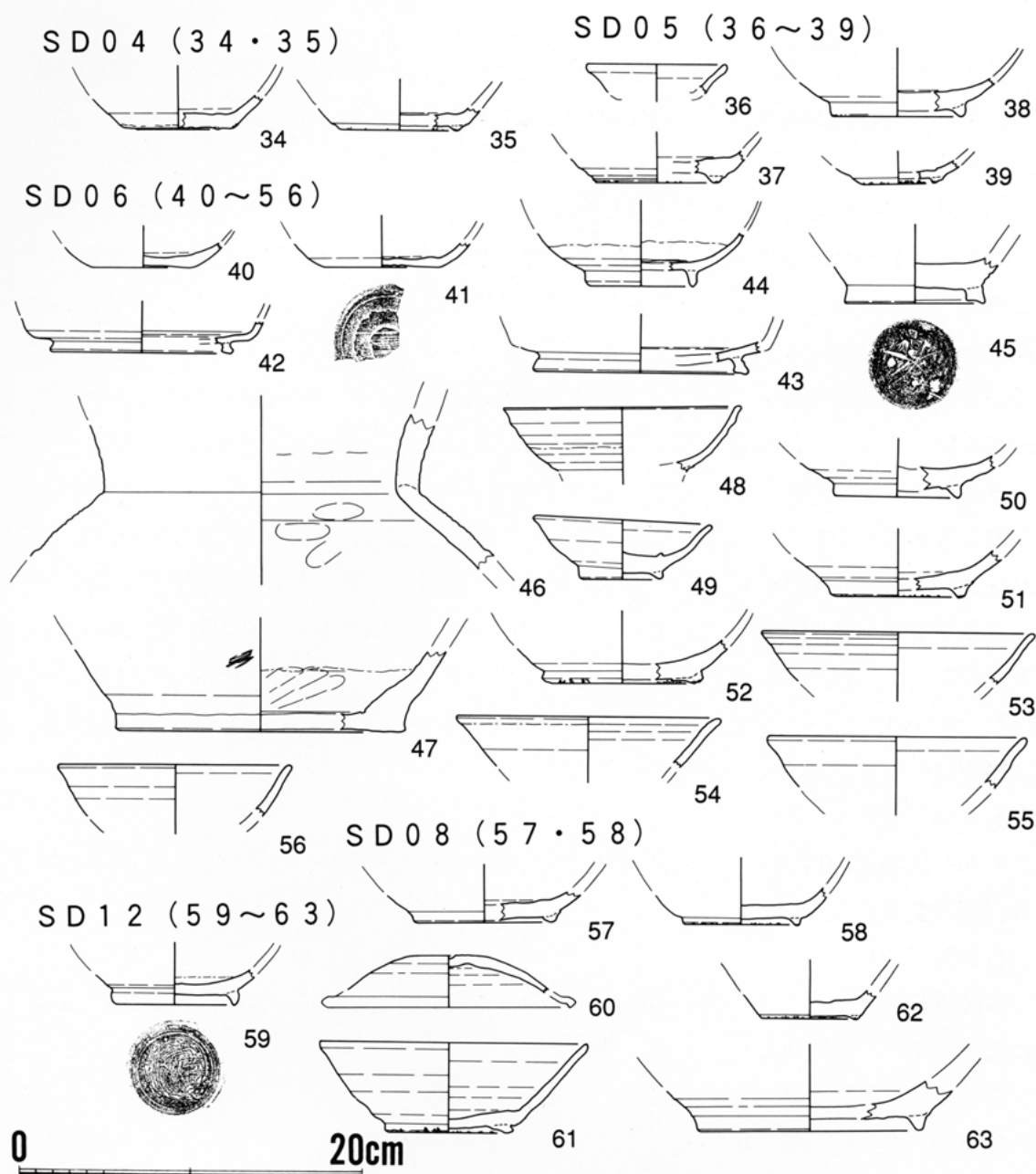
須恵器(41・42・43・46・60)、土師器(40)、灰釉陶器(44・45・48・59)、南部系灰釉系陶器(34~38・49~58・61~63)、北部系灰釉系陶器(39)、施釉陶器、常滑甕(47)がある。溝出土の土器・陶磁器では鎌倉時代のものが主体で、灰釉系陶器では13世紀後半以降と思われる北部系灰釉系陶器がSD04を除く溝から出土している。土師器は少ない。

SD04 (34・35)

34・35は藤澤第7型式に類似する南部系灰釉系陶器の椀で、ともに体部の立ち上がりが直線的なものである。34の高台はほとんど剥離しており、35の高台も偏平で不整形なものである。

SD05 (36~39)

36~38は南部系灰釉系陶器で、36は小皿、37・38は椀である。36は口縁端部が丸くおわり藤澤第4・5型式、38は37に比べて体部が丸く張りをもって立ち上がり、作りも丁寧である。37は藤澤第6型式、38は藤澤第3型式。39は北部系灰釉系陶器で、底部が小さ



第12図 A・B区溝 (SD) 出土遺物 [34~63] (1:4)

く高台が偏平で靦痕が多く付いている。田口大畑大洞4号窯式新段階のものに類似する。

SD06 (40~56)

40は土師器の皿で、内面底部は表面が摩耗して黒くなっている。41~43須恵器の杯身で、42・43は方形の高台が付くもので、41は外面底部に粘土紐の巻上げ痕を残し、中央に板状圧痕がある。やや軟質のものである。46は須恵器の甕の頸部の屈曲部である。44・48は灰釉陶器の椀で、灰釉が44には内外面に、48には外面口縁部から体部にかけて確認できる。44は黒笹90号窯式、48は折戸53号窯式。45は灰釉陶器の長頸瓶と思われるもので、外面底部に「×」のへう描きがある。47は常滑甕の底部。49~56は南部系灰釉系陶器で、49は断面やや「ハ」の字状に開く三角高台を持つ小椀で、50の椀とともに藤

澤第 3 型式。51は高台に靱痕が見られ、接地部が幅広い、藤澤第 4 型式。52・53は藤澤第 5 型式に類似する椀で、54～56は53に比べ口縁部径が小さくなり藤澤第 6 型式。51・52の内面に煤が付着している。

S D08 (57・58)

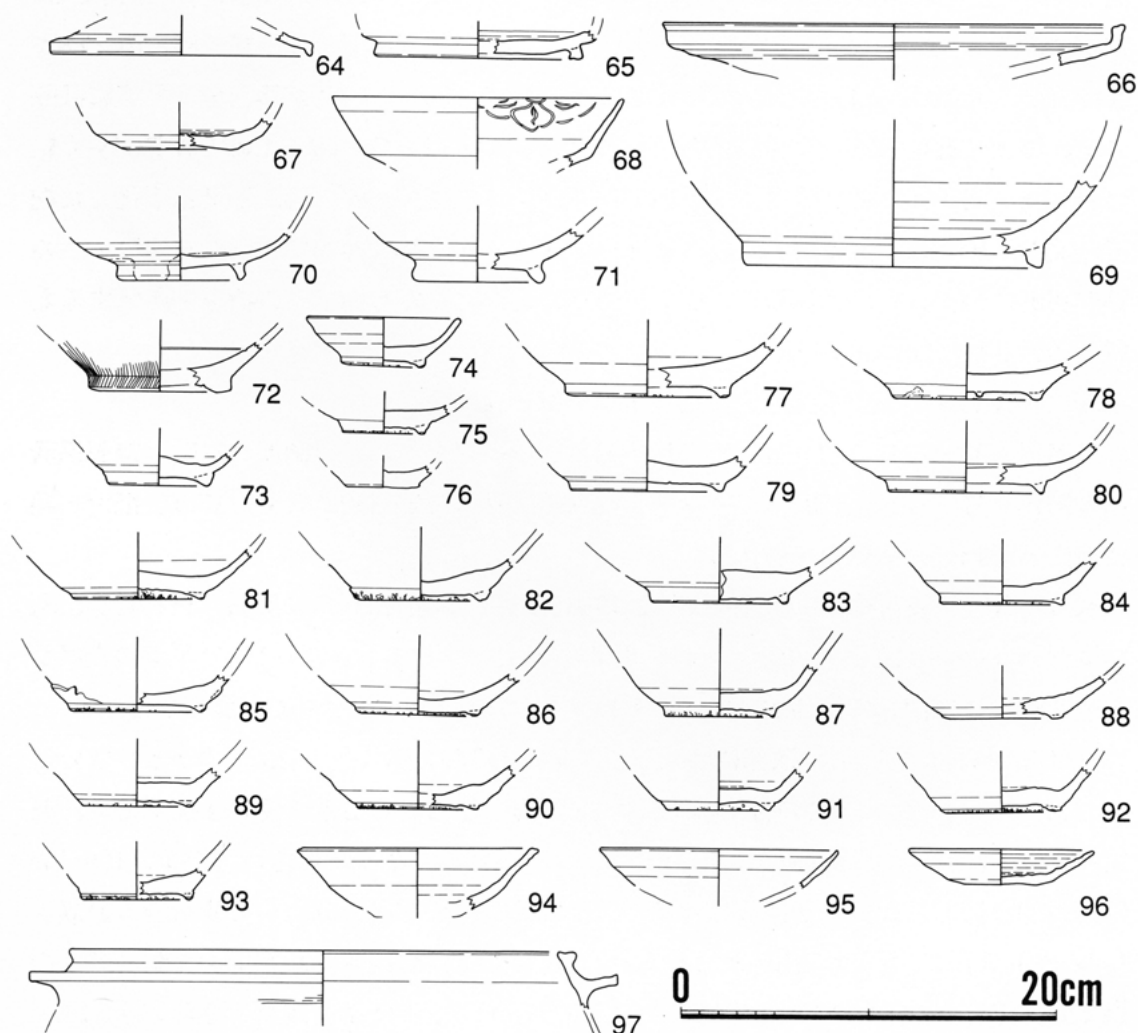
57・58は南部系灰釉系陶器の椀で、藤澤第 5 型式。57の方が高台が幅広で、靱痕がなく古い特徴を持つ。

S D12 (59～63)

60は須恵器杯蓋で紐はない。59は断面三日月状の高台をもつ灰釉陶器の椀で、外面底部に爪状の刺突が円周する。61・62は南部系灰釉系陶器の椀で、61は藤澤第 5 型式、62は藤澤第 7 型式。63は南部系灰釉系陶器の鉢。

(4) 包含層出土 (第13図64～97)

B区における遺構検出・遺構にかかるトレンチ掘削の際の出土遺物 (奈良時代以降) をここで報告する。須恵器 (64～67)、緑釉陶器 (68・69)、灰釉陶器 (70～71)、青磁 (72)、



第13図 B区トレンチ・包含層出土遺物 [64～97] (1 : 4)

南部系灰釉系陶器 (73~93)、北部系灰釉系陶器 (94・95)、土師器 (97)、常滑甕、瀬戸・美濃産陶器 (96) などがある。出土した土器・陶磁器の主体は、遺構出土のものと同様12世紀後半~13世紀中頃のものである。

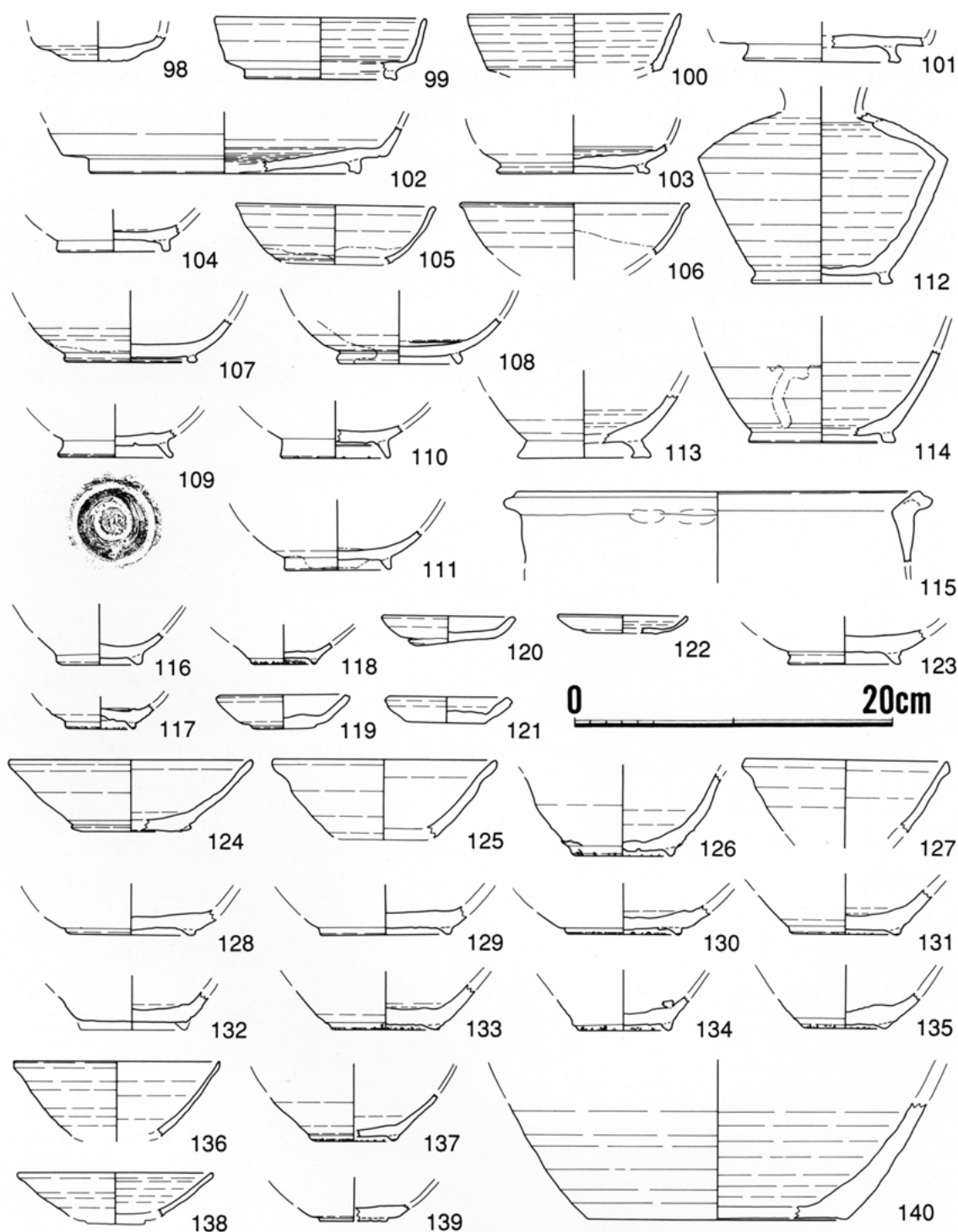
奈良時代~平安時代前半の土器・陶器では須恵器杯蓋 (64)、杯身 (65・67)、盤 (66)、緑釉陶器杯 (68)、壺 (69)、灰釉陶器碗 (70・71) がある。66の盤は大型のもので口縁部が短く直立し、端部が外につまみ出されている。68の杯は内面に陰刻花紋が施され内外面に緑釉が施されている。69は断面方形の高台を持つ大型の壺。70は断面三日月状の高台を持つ碗で内外面に灰釉が認められる、黒笹90号窯式。71は断面丸みを持ち、やや「ハ」の字状に開く高台を持つ碗で、東山72号窯式。

平安時代末~室町時代の遺物では、青磁碗 (72)、南部系灰釉系陶器小碗 (73~75)、小皿 (76)、碗 (77~93)、北部系灰釉系陶器碗 (94・95)、大窯重圈皿 (96)、土師器羽釜 (97) がある。72は外面の高台の側面から体部へのハケ目があり、底部は削り出し高台である。73~75は藤澤第4型式に類似する小碗で、73の高台は幅広で比較的高い三角高台である。75の高台には靱痕が残る。76の胎土は粗いものである。灰釉系陶器碗では、78が藤澤第4型式、79が藤澤第4~5型式、77・80~82が藤澤第5型式、83・87・88が藤澤第5~6型式、84・85・90・93が藤澤第6型式、86・89・92が藤澤第7型式に類似する。胎土が緻密な78、やや粒子が粗い77・79~83・85・87・89、比較的砂礫が多く粗い84・86・88・90~93に分かれる。94~96の胎土は緻密で、94・95は小型偏平化した碗で、北部系灰釉系陶器田口脇之島3号窯式に類似する。96は無釉で内面にロクロナデの跡が明瞭に残る。97は羽釜形の外面口縁部下に鍔がめぐるもので、口縁部が内彎する北村羽釜A3類に類似する⁽⁵⁾。

(5) 試掘トレンチ・攪乱部分出土 (第14図98~140)

須恵器 (98~103、112・113)、灰釉陶器 (104~111・114)、土師器 (115)、南部系灰釉系陶器 (116~121・123~135・140)、北部系灰釉系陶器 (122・136~138)、瀬戸・美濃産陶器 (139)、青磁などがある。

奈良時代~平安時代後半の遺物では、須恵器杯身 (98~103)、長頸瓶 (112・113)、灰釉陶器碗 (104~111)、長頸瓶 (114)、土師器甕 (115) がある。99~103は平底の底部からやや鈍角に屈曲して体部が立ち上がる杯身で、99・101~103は断面方形の高台が付く。112は体部の肩が屈曲して頸部にいたる長頸瓶、113の底部は高台径が7.8cmと小さい。104・107は断面方形高台の付く碗で、黒笹14号窯式。105は器壁の薄い小型の碗で、黒笹90号窯式。108は断面丸みを帯びたやや「ハ」の字状に開く高台を持つ碗で、106・108は折戸53号窯式。109・110は高台が高く、断面「ハ」の字状に開く碗で東山72号窯式、109の外面底部には円形に沈線がめぐる。111は109・110の高台に比べてやや低い高台の碗で百代寺窯式。灰釉は104・107がハケ塗りか不明だが、内外面に確認できる。105・106・108・111は灰釉が付け掛けされたものと思われる。115は色調橙褐色の甕で、口縁部が短



第14図 攪乱層等出土遺物 [98~140] (1:4)

く外に屈曲する。口縁端部の斜め上方にナデによる凹みがめぐる面を持つ、永井清郷型鍋C類に類似する。

平安時代末~室町時代の遺物では、南部系灰釉系陶器小椀 (116~118)、小皿 (119~121)、椀 (123~135)、鉢 (140)、北部系灰釉系陶器小皿 (122)、椀 (136~139) がある。116は内面に灰釉がみられ、比較的幅広の断面三角系の高台が付く、藤澤第3型式。117・118は藤澤第4型式の小椀で、117の内面底部に重ね焼き痕、118の高台には多

くの靦痕が付く。119は底部がやや突出する小皿で藤澤第5型式、120・121は藤澤第6型式に類似する。椀は123が藤澤第4型式、128～130・132が藤澤第5型式、126・131・133・135が藤澤第6型式、127・134が藤澤第7型式に類似する。123は断面やや「ハ」の字状に開く三角高台を持つ椀で、内面底部は丁寧なロクロナデがされている。胎土では、胎土が緻密な129・132、やや粒子が粗い123・126・130・135、比較的砂礫が多く粗い124・125・127・128・131・133・134に分かれる。122・136～138は胎土が緻密な北部系灰釉系陶器で、136が田口明和1号窯式、137が田口大畑多洞4号窯式、138が田口脇之島3号窯式に類似する。139は古瀬戸の緑釉小皿で、底部に糸切り後の板状の圧痕が残る。藤澤古瀬戸後期II段階。

図版	番号	調査区	出土遺構・地点	器種	器形	色調	胎土	焼成	残存率	ロクロ 回転	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法の特徴	備考	登録番号
10	1	B	検 IVA5t	土師器	壺	黄褐色	やや粗	軟質	口縁1/4		16.8			内面口縁部羽状刺突紋、 外面口縁部貼り付け後 縦凹線紋・頸部縦ハケ目	週間I式	E-1
10	2	B	SK03	土師器	高杯	橙褐色	やや粗	やや軟質	口縁若干					内面ナデ、外面ナデ		E-2
10	3	B	SK28	須恵器	高杯	灰色	密	硬質	口縁若干	右	10.7			内面ロクロナデ、外面回 転ヘラ削り・ロクロナデ		E-3
10	4	B	攪乱 VA5r	土師器	S字状口 縁台付 甕	肌色	密	やや軟質	口縁1/7		12			内面ハケ目・指ナデ、外 面ハケ目・指ナデ	S字甕B類古段階	E-4
10	5	B	水田耕土 VB6a	土師器	甕	灰褐色	密	やや軟質	口縁1/12		16			内面ハケ目後ヨコナデ、 外面板状工具による圧 痕		E-5
10	6	B	検 IVA6t	須恵器	杯身	灰色	やや粗	やや軟質	口縁1/8	右	10.3			内面ロクロナデ、外面口 縁部ロクロナデ・底部回 転ヘラ削り		E-6
11	7	B	SK05	灰釉系陶器	椀	灰白色	粗	やや軟質	底部1/3				6.2	内面ロクロナデ、外面体 部ロクロナデ・底部糸切 り後貼り付け高台	藤澤第7型式	E-7
11	8	B	SK09	灰釉系陶器	椀	灰白色	密	硬質	高台1/8				7.6	内面ロクロナデ、外面体 部ロクロナデ・底部糸切 り後貼り付け高台	藤澤第5型式	E-8
11	9	B	SK28	古瀬戸	椀	黄褐白色	密	硬質	高台1/2				4.6	内面ロクロナデ、外面回 転ヘラ削り・削り出し高 台	藤澤古瀬戸後期III ～IV段階	E-9
11	10	B	SK32	須恵器	杯身	灰黄褐色	密	硬質	底部1/5				6.4	内面ロクロナデ、外面体 部ロクロナデ・底部糸切 り		E-10
11	11	B	SK44・46 SD06	灰釉系陶器	椀	灰白色	粗	硬質	口縁1/14	右	15.8			内面ロクロナデ、外面ロ クロナデ	藤澤第5型式	E-11
11	12	B	SK44・46S D06	灰釉系陶器	椀	灰色	密	硬質	高台1/8	右			8.6	内面ロクロナデ、外面体 部ロクロナデ・底部糸切 り後貼り付け高台	北部系、田口浅間 窯下1号窯式	E-12
11	13	B	SK44	須恵器	杯身	褐色	密	やや軟質	高台1/3				10	内面ロクロナデ、外面体 部ロクロナデ・底部糸切 り後貼り付け高台		E-13
11	14	B	SK44	灰釉系陶器	椀	灰白色	密	硬質	口縁1/7		14			内面ロクロナデ・外面ロ クロナデ	灰釉内外面付け掛 け、折戸53号窯式	E-14
11	15	B	SK44	灰釉系陶器	小椀	灰白色	密	硬質	高台完形	右			4.8	内面ロクロナデ、外面体 部ロクロナデ・底部糸切 り後貼り付け高台	藤澤第3型式	E-15
11	16	B	SK44	灰釉系陶器	皿	灰白色	やや粗	硬質	口縁1/9		8.8			内面ロクロナデ、外面ロ クロナデ	藤澤第4～5型式	E-16
11	17	B	SK44	灰釉系陶器	椀	灰白色	やや粗	硬質	高台1/3				7.4	内面ロクロナデ、外面体 部ロクロナデ・底部糸切 り後貼り付け高台	藤澤第3型式	E-17
11	18	B	SK44	灰釉系陶器	椀	灰白色	やや粗	硬質	高台1/2				8	内面ロクロナデ、外面体 部ロクロナデ・底部糸切 り後貼り付け高台	藤澤第3～4型式	E-18
11	19	B	SK44	灰釉系陶器	椀	灰白色	粗	硬質	高台1/5				7.6	内面ロクロナデ、外面体 部ロクロナデ・底部糸切 り後貼り付け高台		E-19
11	20	B	SK44	灰釉系陶器	椀	灰白色	やや粗	やや軟質	口縁1/9		14.8			内面ロクロナデ、外面ロ クロナデ	内面に煤付着、藤 澤第4～5型式	E-20
11	21	B	SK44	灰釉系陶器	小皿	灰色	密	硬質	口縁1/8		17.4			内面ロクロナデ、外面ロ クロナデ	藤澤第4～5型式	E-21
11	22	B	SK44	灰釉系陶器	椀	灰白色	やや粗	やや軟質	高台1/3				7.6	内面ロクロナデ、外面体 部ロクロナデ・底部糸切 り後貼り付け高台	藤澤第5型式	E-22
11	23	B	SK46	灰釉系陶器	椀	灰白色	密	硬質	高台1/2				7.2	内面ロクロナデ、外面体 部ロクロナデ・底部貼り 付け高台	内面重ね焼き痕、 黒塗90号窯式	E-23
11	24	B	SK46	灰釉系陶器	椀	灰白色	やや粗	やや軟質	口縁1	右	14.4			内面ロクロナデ、外面ロ クロナデ	藤澤第4型式	E-24
11	25	B	SK46	灰釉系陶器	椀	灰白色	密	硬質	高台1/4				7.2	内面ロクロナデ、外面体 部ロクロナデ・底部糸切 り後貼り付け高台	藤澤第4型式	E-25
11	26	B	SK46	灰釉系陶器	椀	灰白色	粗	硬質	高台1/2				8	内面ロクロナデ、外面体 部ロクロナデ・底部糸切 り後貼り付け高台	藤澤第4型式	E-26

第3表 土器・陶磁器 [1～26]

図版	番号	調査区	出土遺構・地点	器種	器形	色調	胎土	焼成	残存率	口縁 回転	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法の特徴	備考	登録番号
11	27	B	S K 46	灰釉系陶器	碗	灰白色	粗	やや軟質	高台完形				6.7	内面クロコナデ、外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第6型式	E-27
11	28	B	S K 46	灰釉系陶器	碗	灰白色	密	硬質	高台1/7	右			7	内面クロコナデ、外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第5型式	E-28
11	29	B	S K 46	灰釉系陶器	碗	灰白色	密	硬質	口縁1/14 高台完形	右	16.2	5.2	7.3	内面クロコナデ、外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	内外面に煤付着、内面底部に重ね焼き痕、藤澤第5型式	E-29
11	30	B	S K 46	土師器	甕	橙褐色	粗	やや軟質	口縁1/14		22			内面横へら削り・指押さえ、外面横へら削り・指押さえ	永井清郷型鍋E類	E-30
11	31	B	S K 46	須恵器	甕	黒褐色	密	硬質	底部1/6				16.4	内面ナデ、外面タタキ		E-31
11	32	A	S K 48	灰釉系陶器	碗	灰色	やや粗	硬質	高台1/5				6.8	内面クロコナデ、外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第5型式	E-32
11	33	A	S K 50	土師器	甕	白桃色	密	軟質	口縁1		15.2			内面口縁部横ナデ、外面口縁部横ナデ・体部縦ハケ目	北村鍋A1類	E-33
12	34	B	S D 04	灰釉系陶器	碗	灰白色	粗	硬質	底部1/5				6.3	内面クロコナデ、外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	高台ほとんど剝離、藤澤第7型式	E-34
12	35	B	S D 04	灰釉系陶器	碗	灰白色	粗	やや軟質	高台1/6				6.8	内面クロコナデ、外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第7型式	E-35
12	36	B	S D 05	灰釉系陶器	小皿	灰色	やや粗	硬質	口縁1/9		8			内面クロコナデ、外面クロコナデ	藤澤第4～5型式	E-36
12	37	B	S D 05	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	硬質	高台1/9				7	内面クロコナデ、外面体部クロコナデ・貼り付け高台	藤澤第6型式	E-37
12	38	B	S D 05	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	硬質	高台1/3				7.4	内面クロコナデ、外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第3型式	E-38
12	39	B	S D 05	灰釉系陶器	碗	灰白色	密	硬質	高台1/4				4.1	内面クロコナデ、外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	北部系、田口大畑大淵4号窯式新設跡	E-39
12	40	B	S D 06	土師器	皿	灰白色	密	軟質	底部1/4				5.9	内面クロコナデ・指押さえ、外面体部クロコナデ・指押さえ・底部糸切り痕		E-40
12	41	B	S D 06	須恵器	杯身	灰白色	やや粗	やや軟質	底部1/4				6.6	内面クロコナデ・指押さえ、外面体部クロコナデ・底部指押さえ・ナデ具痕	外面底部に粘土紐巻上げ痕・板状工具痕	E-41
12	42	B	S D 06	須恵器	杯身	灰色	密	やや軟質	高台1/8				10.4	内面クロコナデ、外面体部クロコナデ・底部回転へら削り後貼り付け高台		E-42
12	43	B	S D 06	須恵器	杯身	灰色	密	硬質	高台1/5				12.3	内面クロコナデ、外面底部回転へら削り後貼り付け高台		E-43
12	44	B	S D 06	灰釉陶器	碗	灰白色	密	やや軟質	高台1/5				6	内面クロコナデ、外面体部クロコナデ・底部貼り付け高台	灰釉内外面、黒塗90号窯式	E-44
12	45	B	S D 06	灰釉陶器	長頸瓶	灰褐色	やや粗	硬質	高台完形				8.1	内面クロコナデ、外面体部回転へら削り・底部糸切り後貼り付け高台	外面底部にへら描き「×」	E-45
12	46	B	S D 06	須恵器	甕	灰色	密	硬質	頸部1/4					内面頸部クロコナデ・体部クロコナデ・指ナデ、外面不明		E-46
12	47	B	S D 06	常滑焼	甕	黒色	密	硬質	底部1/5				16.3	内面クロコナデ・指押さえ・指などで外面体部タタキ後クロコナデ・底部クロコナデ		E-47
12	48	B	S D 06	灰釉陶器	碗	灰白色	密	硬質	口縁1/3	右	13.8			内面クロコナデ、外面体部クロコナデ・底部貼り付け高台	灰釉外面付け掛け、折戸53号窯式	E-48
12	49	B	S D 06	灰釉系陶器	小碗	灰白色	密	硬質	口縁1/3 高台完形	右	10.1	3.45	4.4	内面クロコナデ、外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	内面底部に重ね焼き痕、藤澤第3型式	E-49
12	50	B	S D 06	灰釉系陶器	碗	灰白色	密	硬質	高台1/4				7.2	内面クロコナデ、外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第3～4型式	E-50
12	51	B	S D 06	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	硬質	高台1/2				7	内面クロコナデ、外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	内面に煤付着、藤澤第4型式	E-51
12	52	B	S D 06	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	硬質	高台1/8				8.3	内面クロコナデ、外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	内面に煤付着、藤澤第5型式	E-52
12	53	B	S D 06	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	硬質	口縁1/15	右	15.8			内面クロコナデ、外面クロコナデ	藤澤第5型式	E-53
12	54	B	S D 06	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	硬質	口縁1/10		15.2			内面クロコナデ、外面クロコナデ	藤澤第6型式	E-54
12	55	B	S D 06	灰釉系陶器	碗	灰色	やや粗	やや軟質	口縁1/7		14.8			内面クロコナデ、外面クロコナデ	藤澤第6型式	E-55
12	56	B	S D 06	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	硬質	口縁1/8		13.4			内面クロコナデ、外面クロコナデ	藤澤第6～7型式	E-56
12	57	B	S D 08	灰釉系陶器	碗	灰色	密	硬質	高台1/6				7.9	内面クロコナデ、外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第5型式	E-57
12	58	B	S D 08	灰釉系陶器	碗	灰色	やや粗	硬質	高台1/5				6.3	内面クロコナデ、外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第5型式	E-58
12	59	B	S D 12	灰釉陶器	碗	黄灰色	やや粗	やや軟質	高台1/3	左			6.8	内面クロコナデ、外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	外面底部に爪状剥突が内周する、灰釉内面、折戸53号窯式	E-59
12	60	B	S D 12	須恵器	杯蓋	灰色	密	硬質	天井部のみ	右				内面クロコナデ、外面クロコナデ・回転へら削り		E-60

第4表 土器・陶磁器 [27～60]

図版	番号	調査区	出土遺構・地点	器種	器形	色調	胎土	焼成	残存率	口縁 回転	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法の特徴	備考	登録番号
12	61	A	S D 12	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	やや軟質	口縁1/3 高台完形	右	15.5	5.2	6.8	内面クロコナデ・底部中央指ナデ・外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第5型式	E-61
12	62	B	S D 12	灰釉系陶器	碗	灰白色	粗	やや軟質	高台1/4				5.3	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第7型式	E-62
12	63	A	S D 12	灰釉系陶器	鉢	灰色	密	硬質	高台1/5				12.8	内面クロコナデ・外面体部回転へら削り・底部回転へら削り後貼り付け高台		E-63
13	64	B	検 IVA4s	須恵器	杯蓋	灰色	密	硬質	口縁1/9		13.9			内面クロコナデ・外面クロコナデ		E-64
13	65	B	検 IVA5s	須恵器	杯身	暗灰色	密	硬質	高台1/5				10.6	内面クロコナデ・外面体部回転へら削り・底部回転へら削り後貼り付け高台		E-65
13	66	B	検 IVA4s	須恵器	盤	暗灰色	密	硬質	口縁1/10		24.3			内面クロコナデ・外面クロコナデ		E-66
13	67	B	検 IVB6a	須恵器	杯身	橙褐色	密	やや軟質	底部1/2				5.6	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部糸切り		E-67
13	68	B	検 IVA6s	緑釉陶器	杯	内外面 緑釉	密	硬質	口縁1/7		15.4			内面クロコナデ・外面クロコナデ	内面口縁部に陰刻 花紋	E-68
13	69	B	検 IVB6a	緑釉陶器	壺	灰白色 外面緑釉	密	軟質	高台1/7				15.8	内面クロコナデ・外面クロコナデ・回転へら削り		E-69
13	70	B	4 トレンチ	灰釉陶器	碗	灰白色	やや粗	やや軟質	高台1/3	右			6.2	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部回転へら削り後貼り付け高台	内面底部に重ね焼 き痕・灰釉内外面、 黒笹90号窯式	E-70
13	71	B	検 IVA5s	灰釉陶器	深碗	灰色	密	硬質	高台1/2				6.4	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部回転へら削り後貼り付け高台	東山72号窯式	E-71
13	72	B	検 IVA5s	青磁	碗	灰白色	密	硬質	高台1/4				6	外面体部ハケ目・底部削り出し高台		E-72
13	73	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	小碗	灰白色	やや粗	硬質	高台1/2				5.2	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第4型式	E-73
13	74	B	5 トレンチ	灰釉系陶器	小碗	灰白色	やや粗	やや軟質	口縁1/3 高台完形		8.1	2.6	3.7	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第4型式	E-74
13	75	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	小碗	黄灰色	やや粗	やや軟質	底部1/2				4.4	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部貼り付け高台	藤澤第4型式	E-75
13	76	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	小皿	灰色	粗	硬質	底部完形				3.7	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部糸切り	藤澤第5型式	E-76
13	77	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	やや軟質	高台1/2	右			7.8	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第5型式	E-77
13	78	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	碗	灰白色	密	硬質	高台完形				7.2	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第4型式	E-78
13	79	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	硬質	高台1/2				7.5	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第4～5型式	E-79
13	80	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	硬質	高台1/4				8.2	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第5型式	E-80
13	81	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	硬質	高台完形				6.8	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部貼り付け高台	藤澤第5型式	E-81
13	82	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	碗	灰白色	粗	やや軟質	高台完形				6.4	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第5型式	E-82
13	83	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	やや軟質	高台1/4				6.7	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第5～6型式	E-83
13	84	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	硬質	底部1/2				6.2	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部板状圧痕・貼り付け高台	藤澤第6型式	E-84
13	85	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	碗	灰色	粗	やや軟質	高台1/3				6.6	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第6型式	E-85
13	86	B	検 IVA5r	灰釉系陶器	碗	灰白色	粗	硬質	高台1/4				5.8	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第7型式	E-86
13	87	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	碗	灰色	やや粗	硬質	高台1/2				5.8	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第5～6型式	E-87
13	88	B	検 IVB7c	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	硬質	高台1/4				5.6	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第5～6型式	E-88
13	89	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	やや軟質	高台1/3				5.7	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第7型式	E-89
13	90	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	硬質	高台1/3				6	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部貼り付け高台・クロコナデ	藤澤第6型式	E-90
13	91	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	硬質	底部完形				5.4	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部貼り付け高台	藤澤第7型式	E-91
13	92	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	碗	灰色	やや粗	硬質	底部完形				5.8	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・指押さへ・底部貼り付け高台	瀬戸産・藤澤第7型式	E-92
13	93	B	検 IVB5a	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	硬質	高台1/4				5.6	内面クロコナデ・外面体部クロコナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第6型式	E-93

第5表 土器・陶磁器 [61～93]

図版	番号	調査区	出土遺構・地点	器種	器形	色調	胎土	焼成	残存率	口縁 回転	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法の特徴	備考	登録番号
13	94	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	碗	黄灰色	密	硬質	口縁1/4	右	12			内面ロクロナデ、外面ロクロナデ・指ナデ	北部系、田口脇之島3号窯式	E-94
13	95	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	碗	黄灰色	密	硬質	口縁1/8		12.6			内面ロクロナデ、外面ロクロナデ	北部系、田口脇之島3号窯式	E-95
13	96	B	検 IVA5s	大甕	重圈皿	黄灰色	密	硬質	高台1/8 底部1/6		9.6	1.85	3.8	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り	藤澤大甕1～2段階	E-96
13	97	B	検 IVA5s	土師器	羽釜	黄白色	やや粗	やや軟質	口縁1/15		25			内面ロクロナデ、外面ハケ目	北村羽釜A3類	E-97
13	98	B	攪乱 VB6a	須恵器	碗	灰色	密	軟質	底部完形				3.4	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部回転ヘラ削り		E-98
13	99	B	攪乱 VA4s	須恵器	杯身	黄白色	密	軟質	口縁1/5 高台1/6		13.1	3.85	9.4	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・回転ヘラ削り・底部貼り付け高台		E-99
13	100	B	攪乱 VA4s	須恵器	杯身	暗灰色	密	硬質	口縁1/7		13.4			内面ロクロナデ、外面ロクロナデ・回転ヘラ削り		E-100
13	101	B	攪乱 VA4s	須恵器	杯身	灰色	密	硬質	高台1/4	左			9.6	内面ロクロナデ、外面体部回転ヘラ削り・底部糸切り後貼り付け高台		E-101
13	102	C		須恵器	杯身	黄灰色	密	硬質	高台1/7	右			16.8	内面ロクロナデ、外面体部回転ヘラ削り・底部糸切り・回転ヘラ削り後貼り付け高台		E-102
13	103	C		須恵器	杯身	黄灰色	密	やや軟質	高台1/3	右			9.5	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り・回転ヘラ削り後貼り付け高台		E-103
13	104	C		灰釉陶器	碗	黄灰色	密	硬質	高台1/2				6.8	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り後貼り付け高台	黒笹14号窯式	E-104
13	105	B	試掘トレンチ	灰釉陶器	碗	灰色	密	硬質	口縁1/6		12.4			内面ロクロナデ、外面ロクロナデ	灰釉内外面付け掛け、黒笹90号窯式	E-105
13	106	B	試掘トレンチ	灰釉陶器	碗	灰白色	密	硬質	口縁1/5	左	14.2			内面ロクロナデ、外面ロクロナデ	灰釉内外面付け掛け、折戸53号窯式	E-106
13	107	B	攪乱 VA4s	灰釉陶器	碗	灰白色	やや粗	硬質	高台1/3	右			8	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部回転ヘラ削り後貼り付け高台	灰釉内外面、黒笹14号窯式	E-107
13	108	B	試掘トレンチ	灰釉陶器	碗	灰白色	密	軟質	高台1/2				7.2	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部回転ヘラ削り後貼り付け高台	灰釉内外面付け掛け、折戸53号窯式	E-108
13	109	B	N トレンチ	灰釉陶器	深碗	黄灰色	密	硬質	高台1/2				6.9	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部回転ヘラ削り後貼り付け高台	東山72号窯式	E-109
13	110	B	攪乱 VA4s	灰釉陶器	深碗	灰白色	やや粗	やや軟質	高台1/4				6.6	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り後貼り付け高台	東山72号窯式	E-110
13	111	B	攪乱 VA4s	灰釉陶器	碗	灰白色	密	硬質	高台1/2				6.4	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り後貼り付け高台	灰釉内外面付け掛け、百代寺窯式	E-111
13	112	B	攪乱 VA5s	須恵器	長頸瓶	灰白色	密	硬質	高台2/3	右			8.6	内面ロクロナデ、外面体部回転ヘラ削り・底部糸切り後貼り付け高台・板状圧痕	外面上部に板状圧痕	E-112
13	113	B	攪乱 VA4s	須恵器	長頸瓶	灰色	密	硬質	高台2/3	左			7.8	内面ロクロナデ、外面体部回転ヘラ削り・底部回転ヘラ削り後貼り付け高台		E-113
13	114	B	表土	灰釉陶器	長頸瓶	灰白色	やや粗	硬質	高台1/3				9.2	内面ロクロナデ、外面回転ヘラ削り後貼り付け高台	灰釉外面	E-114
13	115	B	攪乱 VA4s	土師器	甕	橙褐色	粗	軟質	口縁1/14		25			内面横ナデ、外面横ナデ・指ナデ	水井清輝型鍋C類	E-115
13	116	B	攪乱 VA4s	灰釉系陶器	小碗	灰白色	やや粗	硬質	高台2/3				4.7	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り後貼り付け高台	灰釉内面、藤澤第3型式	E-116
13	117	C		灰釉系陶器	小碗	灰白色	やや粗	硬質	高台完形				4	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り後貼り付け高台	内面底部に重ね焼き痕、藤澤第4型式	E-117
13	118	C	S トレンチ	灰釉系陶器	小碗	灰白色	密	硬質	高台完形				4.1	内面ロクロナデ・底部中央指ナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り後貼り付け高台・板状圧痕	藤澤第4型式	E-118
13	119	B	攪乱 VA4s	灰釉系陶器	小皿	灰白色	やや粗	硬質	口縁1/4 底部3/4		8	2.1	4	内面ロクロナデ・底部中央に押圧痕、外面体部ロクロナデ・底部糸切り後板状圧痕	藤澤第5型式	E-119
13	120	B	攪乱 VB6a	灰釉系陶器	小皿	灰白色	粗	やや軟質	口縁1/4 底部完形	右	8	1.6	5.9	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り	藤澤第6型式	E-120
13	121	C		灰釉系陶器	小皿	灰白色	やや粗	やや軟質	口縁1/2 底部1/2		7.4	1.6	4.6	内面ロクロナデ・底部中央指ナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り	藤澤第6型式	E-121
13	122	B	攪乱 VA4s	灰釉系陶器	小皿	淡褐色	密	硬質	口縁若干 底部1/3		8	1.15	4.3	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り	北部系	E-122
13	123	B	攪乱 VA4s	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	硬質	高台4/3				6.8	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第4型式	E-123
13	124	B	攪乱 VB6a	灰釉系陶器	碗	灰白色	粗	軟質	口縁1/2 底部1/3		15.3	4.5	6.2	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第6型式	E-124
13	125	B	N トレンチ	灰釉系陶器	碗	灰白色	粗	軟質	口縁1/3		14			内面ロクロナデ、外面ロクロナデ	瀬戸産、藤澤第6型式	E-125
13	126	B	攪乱 VA4s	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	やや軟質	高台1/3				6	内面ロクロナデ・底部中央に指ナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第6型式	E-126

第6表 土器・陶磁器 [94～126]

図版	番号	調査区	出土遺構・地点	器種	器形	色調	胎土	焼成	残存率	口縁 回転	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法の特徴	備考	登録番号
13	127	B	攪乱 VA4s	灰釉系陶器	碗	灰白色	粗	やや軟質	口縁1/8		12.6			内面ロクロナデ、外面ロクロナデ	藤澤第7型式	E-127
13	128	C		灰釉系陶器	碗	灰白色	粗	硬質	高台1/2				7.6	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第5型式	E-128
13	129	B	攪乱 VB6a	灰釉系陶器	碗	灰白色	密	やや軟質	高台1/2				8	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第5型式	E-129
13	130	B	攪乱 VA 5 r	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	硬質	高台完形				7	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第5型式	E-130
13	131	B	攪乱 VA4s	灰釉系陶器	碗	灰白色	粗	やや軟質	高台3/4	右			6.6	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第6型式	E-131
13	132	C		灰釉系陶器	碗	灰白色	密	硬質	底部完形				(6.6)	内面ロクロナデ・底部中央指ナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り・板状圧痕	藤澤第5型式	E-132
13	133	C		灰釉系陶器	碗	灰白色	粗	硬質	高台1/2	右			6.6	内面ロクロナデ・底部中央指ナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り後貼り付け高台	藤澤第6型式	E-133
13	134	B	攪乱 VA4s	灰釉系陶器	碗	灰白色	粗	硬質	高台2/3				5.6	内面ロクロナデ・底部中央指ナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り後貼り付け高台	内面底部に重ね焼き痕、藤澤第7型式	E-134
13	135	B	攪乱 VA4s	灰釉系陶器	碗	灰白色	やや粗	硬質	底部完形				5	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り後貼り付け高台・板状圧痕	藤澤第6型式	E-135
13	136	B	攪乱 VB6a	灰釉系陶器	碗	黄灰色	密	硬質	口縁1/5	右	12.8			内面ロクロナデ、外面ロクロナデ	北部系、田口明和1号窯式	E-136
13	137	B	試掘トレンチ	灰釉系陶器	碗	灰白色	密	硬質	高台1/3				4.8	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り後貼り付け高台	北部系、田口大畑大洞4号窯式	E-137
13	138	B	攪乱 VA4s	灰釉系陶器	碗	黄灰色	密	硬質	口縁1/7		12.2			内面ロクロナデ、外面ロクロナデ	北部系、田口脇之島3号窯式	E-138
13	139	B	攪乱 VA6a	古瀬戸	緑釉小皿	灰白色	やや粗	硬質	底部1/2				5.4	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ・底部糸切り後板状圧痕	藤澤古瀬戸後期II段階	E-139
13	140	C		灰釉系陶器	鉢	黄灰色	密	やや軟質	底部1/5	左			16.2	内面ロクロナデ、外面ロクロナデ・回転ヘラ削り		E-140

第7表 土器・陶磁器 [127～140]

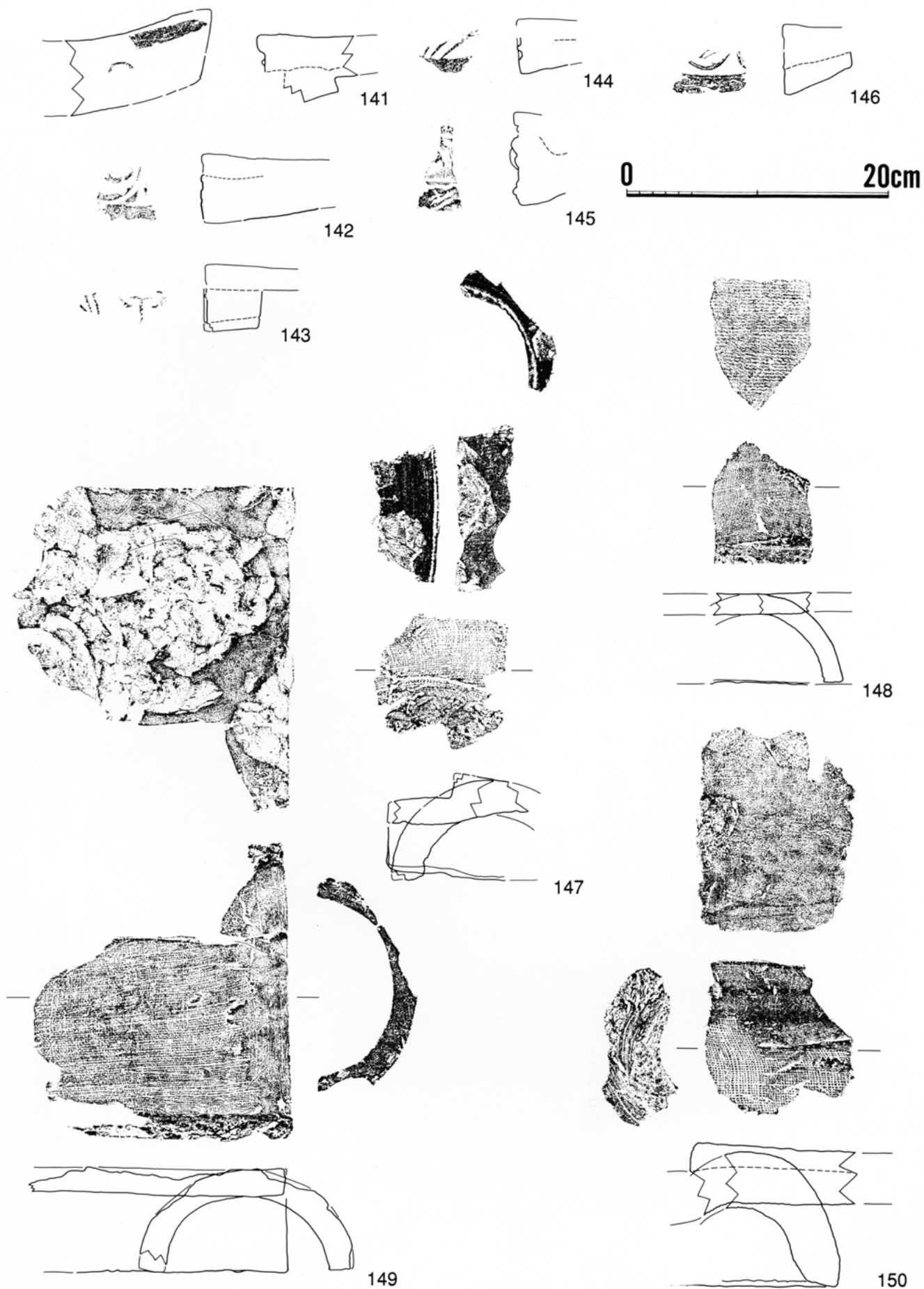
第2節 瓦 (第15図～第21図、第8表)

瓦はB区とC区から主に出土しているが、B区では中世の遺構・包含層・西試掘トレンチ・攪乱部分から、C区では後世の水田耕作土からの出土がほとんどで、古代の遺構から出土したものはない。整理の段階で端面・側面などの遺存している瓦をコンテナ8箱分選別し、その中から残りの良いもの、製作技法などの特徴的なものを抽出して図化した。瓦の観察などは『堀之内花ノ木遺跡』報告による分類を参考にしている⁽⁶⁾。また出土した瓦を軒平瓦KD、丸瓦KA、平瓦KBに分類した。

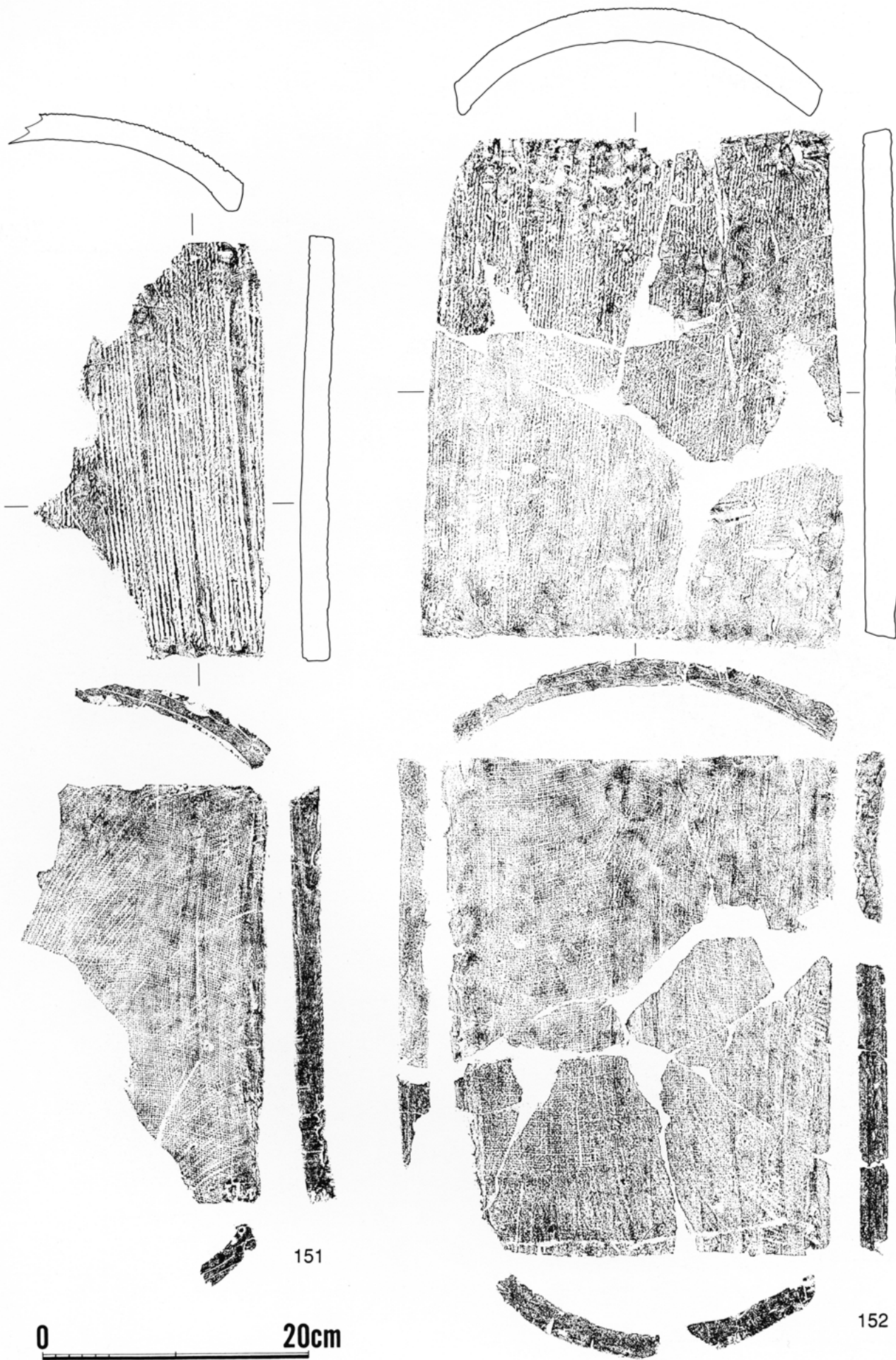
(1) 軒平瓦KD (第15図141～146)

軒瓦では、瓦当の残る軒丸瓦は確認できず、瓦当文様やその製作技法などが多少分かる軒平瓦6点を報告する。

141は均整唐草文様を持つもので、外縁と一部残る唐草文との間に珠文帯がなく、唐草の表現が細い突線条であることからHIV型式かHV型式に類似する文様を持つ軒平瓦である。142はHV型式に類似する文様を持つもので、中心飾りの左に当たる部分である。少し唐草の部分の幅が太く、直線顎である。143は均整唐草文の中心飾りの部分で、その形態からHI-A型式の軒平瓦。144は均整唐草文の中心飾り右に当たる部分で、文様はHI型式か法性寺系である。145は軒平瓦の中心飾りの部分で外縁との間に圈線がめぐる。146は唐草がリング状にめぐるHIII型式。



第15図 軒平瓦 [141~146]・丸瓦 [147~150] (1 : 4)



第16図 平瓦 [151・152] (1 : 4)

141・143・146は凸面瓦当側に段顎をもつ軒平瓦で奈良時代の国分寺の軒平瓦と類似する。また段顎部分の成形に粘土の貼り付けがされているがその方法は全て異なっている。

(2) 丸瓦K A (第15図147～150)

丸瓦は後述する平瓦に比べて出土も少なく、図化できたのは4点のみである。丸瓦尻部に玉縁のあるK A I と玉縁のないK A IIを想定しているが、玉縁のない行基葺丸瓦は確認できていない。

147は玉縁のあるK A I で、凹面に布の合わせ目と布を引き取るための縄の痕跡がある。148にも同様に布の合わせ目と布を引き取るための縄の痕跡がある。149は大型の丸瓦で建物の棟を覆う雁振り瓦の可能性があるものである。150は玉縁らしき段があり厚さ4.3cmを測る厚い瓦で、粘土板を2枚重ねて作られている。凹面に加熱痕がある。

(3) 平瓦K B (第16図151～第21図174)

出土した瓦のほとんどは平瓦で、西試掘トレンチ・遺構からは良好に遺存したものがあった。平瓦は基本的に平面やや台形状であるが、平面長方形のものK B I、平面台形のものK B IIに分類した。

平面形

明らかに平面長形状(K B I)の151・157・160・164～167・173と平面台形状(K B II)の152～155・158・161・163・168・169・171・172に分かれる。K B IIの154は調整技法なども異なり、桶巻4枚作りによる可能性がある。

大きさ

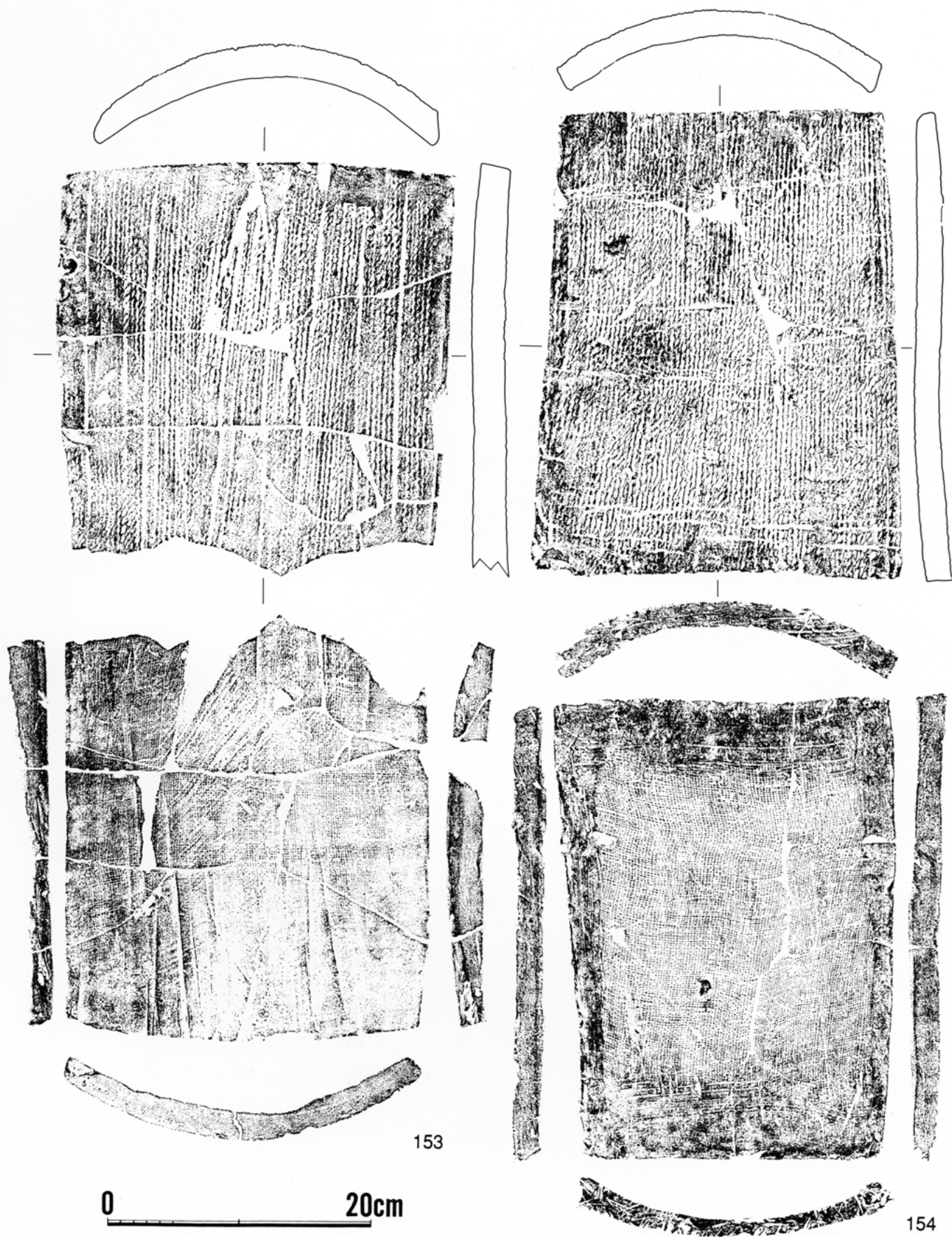
瓦の大きさではほぼ完形に残っていた152と154を比べて見ると、頭部幅で6.1cm、長さで2.8cm154の方が小さく、これら瓦の形や大きさの違いが瓦を製作する瓦工人の差なのか、用途の差なのかは不明である。厚さでは1.8cm～2.6cmまであり、1.9cm～2.3cmの間に中心があるようである。

凸面調整と凸面縄目数

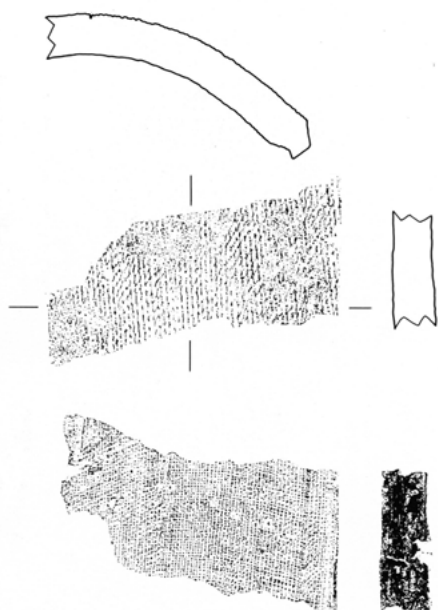
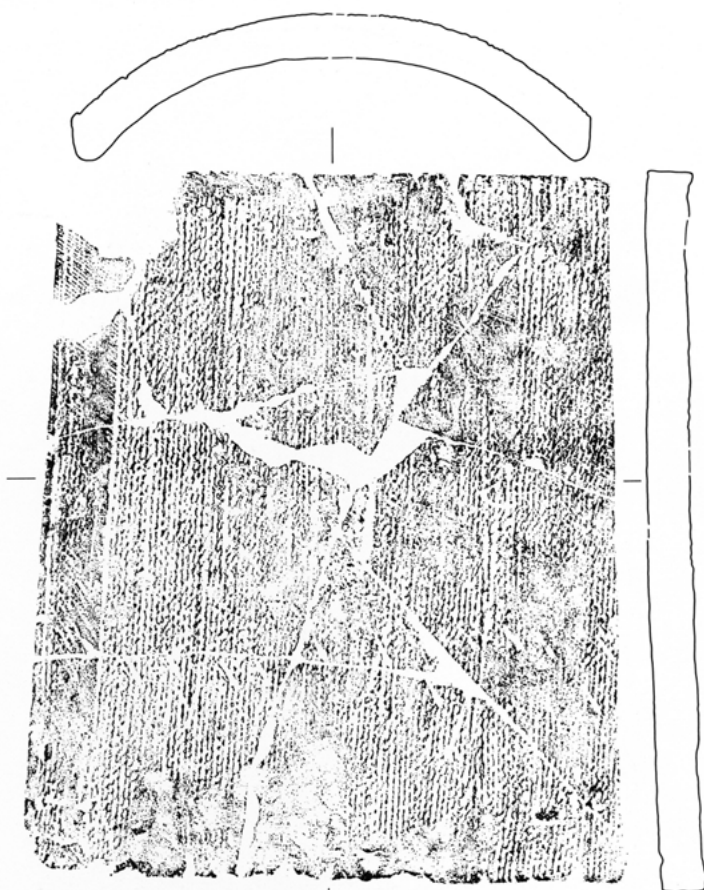
凸面調整では縄タタキ目の下にコビキ痕が残るものがあり(151・155・158・162・170・173)、縄タタキの後に指ナデ(152・156・159～162・164・166・168・169・173)、指押さえ(151・152・155・156・158～162・167・169・171)・ケズリ(154・171・173)が施されているが、あまり規則的には施されていない。154において縄タタキ板の縄を綴じていたと思われる綴じ痕が長さ4cm～5cmで見られ、タタキ目が平行にあまり重複することなく平行に走ることから、T字状に柄が付く叩板の可能性がある。縄タタキの縄目数は、縦6～9、横3～6で横の縄目数は、タタキの縄の間隔が6.7mm～3.4mm程であることを示している。

153・154・156・158・161・162・166・169に、凹面調整の際に伴うと思われるはなれ砂が確認された。

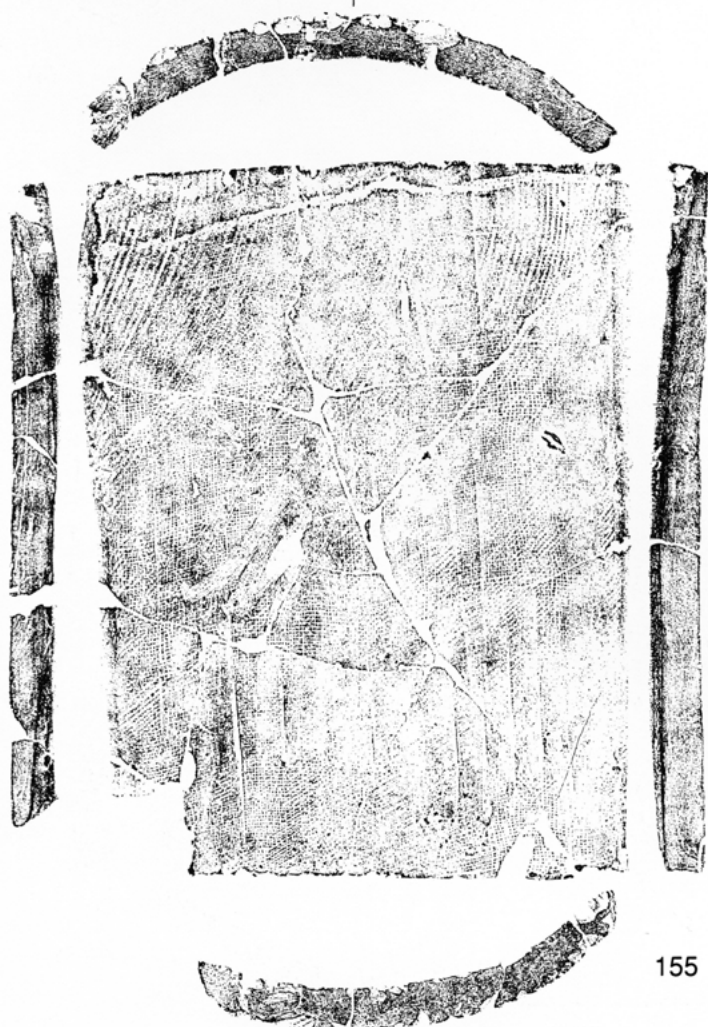
凹面調整と凹面布目数



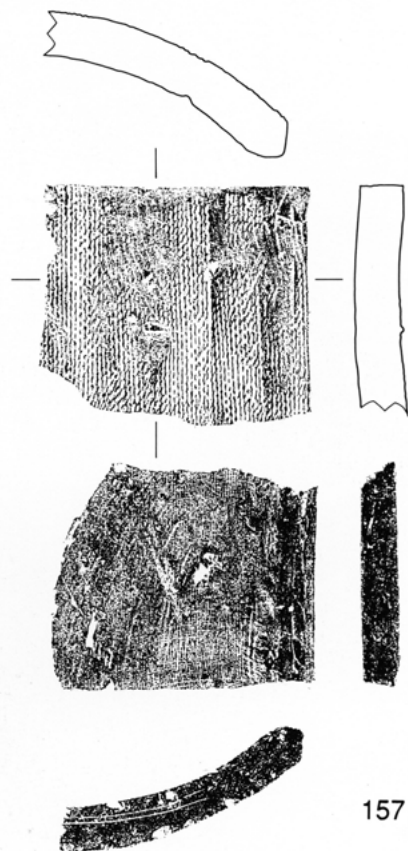
第17図 平瓦 [153・154] (1 : 4)



156



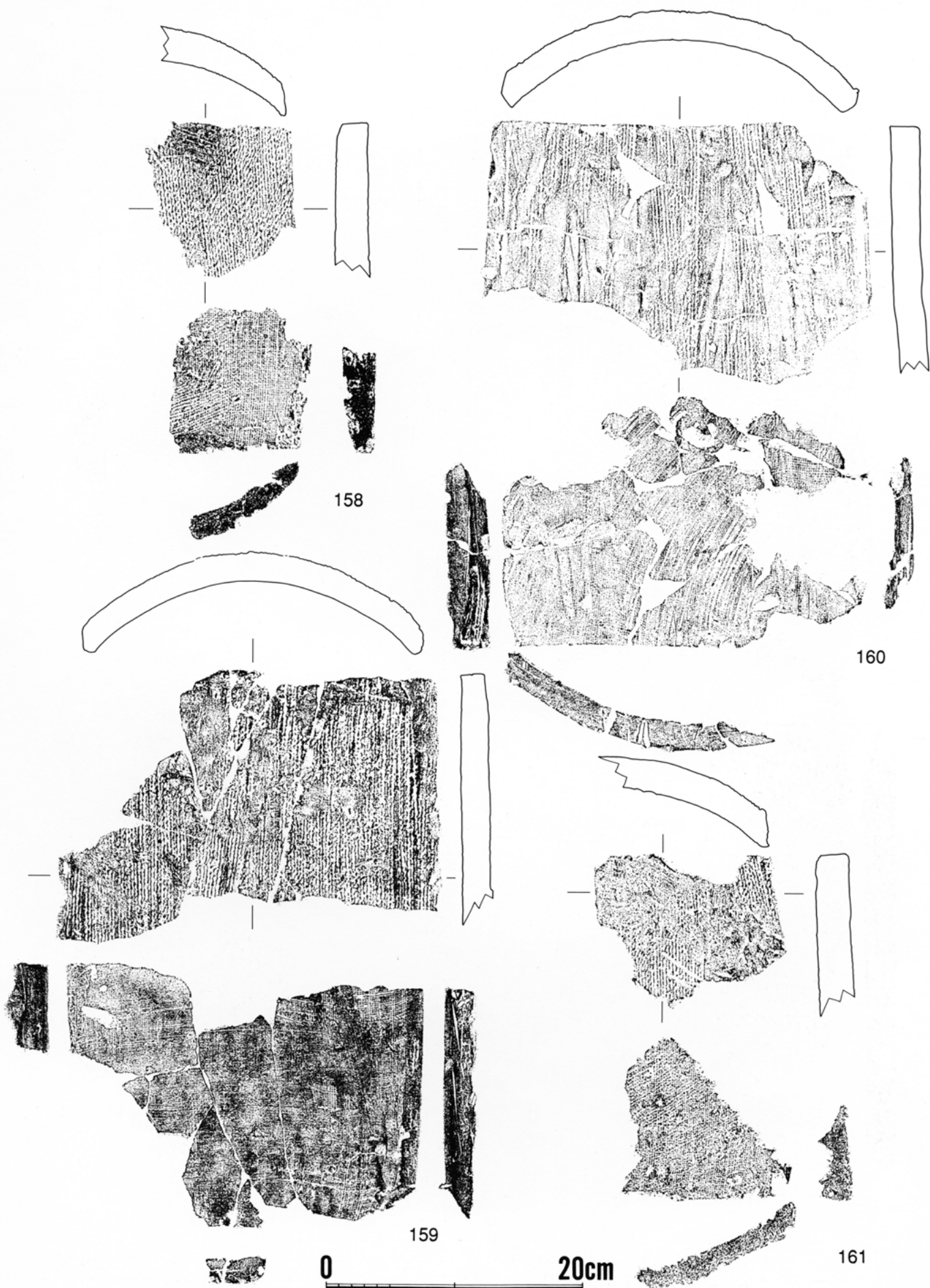
155



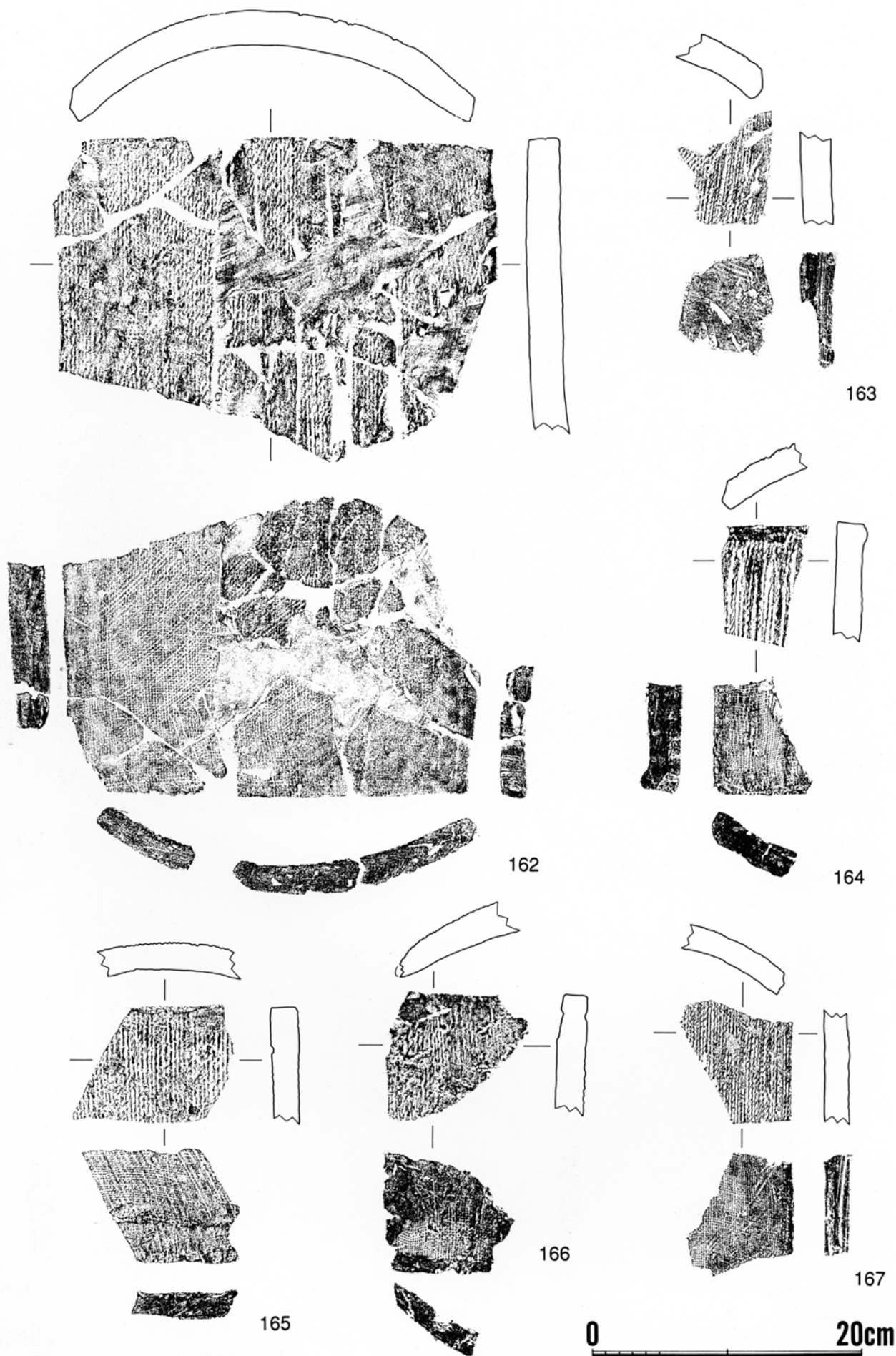
157

0 20cm

第18図 平瓦 [155~157] (1 : 4)

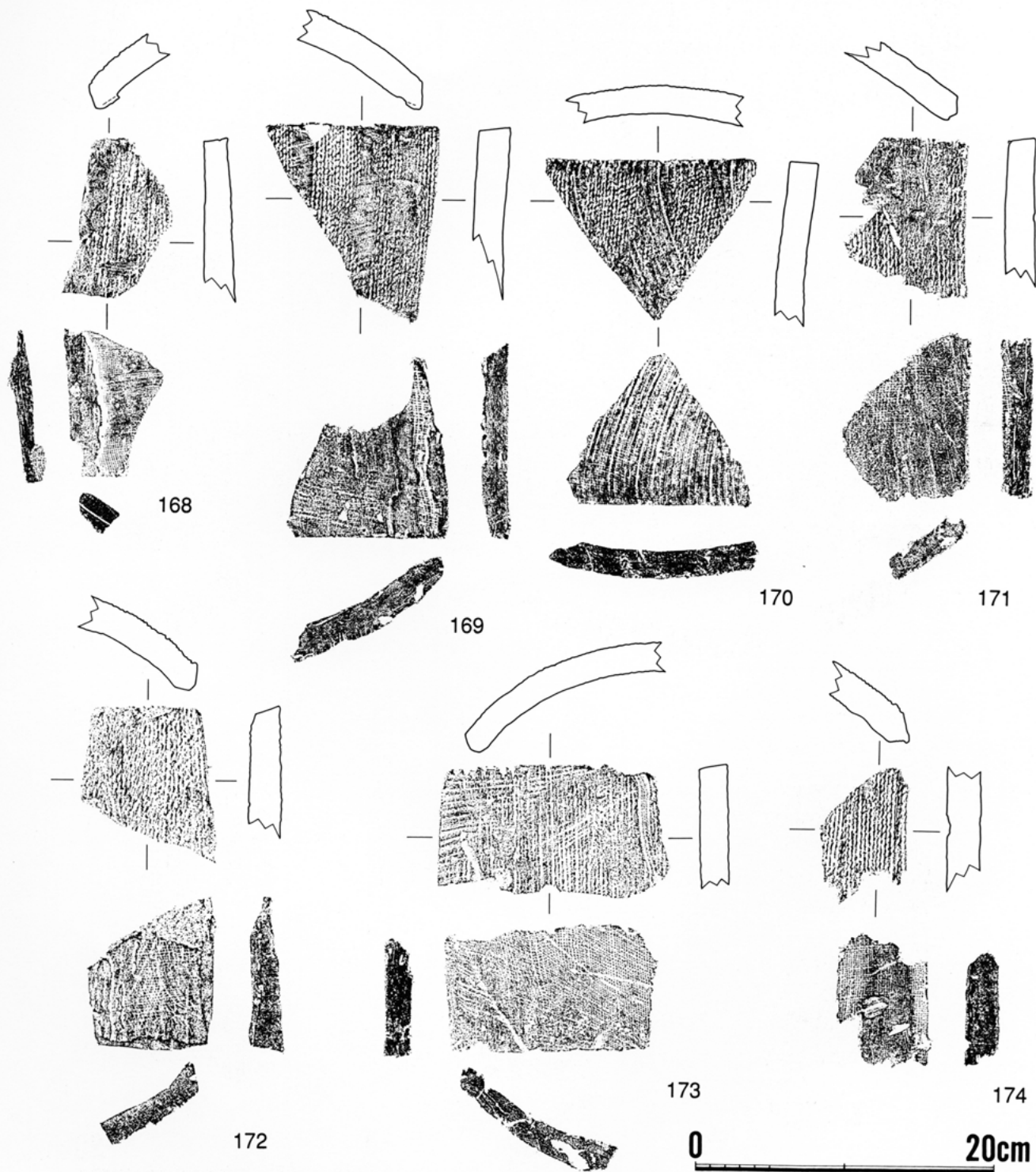


第19図 平瓦 [158~161] (1 : 4)



第20図 平瓦 [162~167] (1 : 4)

凹面調整では布目の下に凸面と同様コビキ痕が残るものがあり (151~153・155~162・165~167・169・170・173)、凸面の縄タタキ調整の際に付いた布目痕の上からタタキを施したと思われる長細い無文板状の圧痕⁽⁷⁾が瓦の両端部側に顕著に確認できる (151~153・155・156・162・165・166・169・171・172)。タタキの幅が分かる資料を確認できなかったが、2~3cm前後の幅をもって施されている。また布目の上から端面に



第21図 平瓦 [168~174] (1 : 4)

番号	調査区	遺構・地点	分類	頭部幅 (cm)	尻部幅 (cm)	長さ (cm)	厚さ (cm)	凸面調整	凸面縄目数 (縦×横)	凹面調整	凹面布目数	はなれ 砂	側面形状	端面形状	色調	胎土	焼成	備考	登録番号
141	B	検ⅠVA5s	KD				3	ナデ		布目	14×12			唐草文	灰白色	密	軟質	HIV型式かHV型式	E-141
142	B	検ⅠVA4s	KD											唐草文	黄白色	密	軟質	HV型式	E-142
143	B	検ⅠVA5s	KD											唐草文	黄白色	密	やや軟質	HI-A型式	E-143
144	B	検ⅠVA4s	KD					ナデ						唐草文	白灰色	密	軟質	HI型式か法性寺系	E-144
145	C	水田耕土	KD							布目・ナデ				(唐草文)	黄灰色	密	やや軟質		E-145
146	B	検ⅠVA4s	KD					ナデ		コビキ・布目				唐草文	青灰色	密	やや軟質	HI型式	E-146
147	C	水田耕土	KA I			(10.8)	(2.6)	横ナデ・指ナデ		布目	12×12		なし・c	凹・なし	灰色	密	硬質		E-147
148	B	表土	KA			(7.5)	1.6	縄タタキ	8×4	コビキ・布目 縄の圧痕	18×15		なし・a		黄色	密	硬質		E-148
149	B	西試掘 トレンチ	KA (16.3)			(19.5)	(2.0)	縄タタキ		布目・横ナデ	11×13		なし・	垂直・なし	灰色	密	硬質	凸面表面剥離	E-149
150	C	水田耕土	KA			(12.6)	4.3	ケズリ		布目・ケズリ	12×9		なし・c		灰色	密	硬質	凹面に加熱痕、煤付着、粘土板2枚作り?、凹面にタタキ状工具痕	E-150
151	B	SD06 土器11	KB I (15.9)	(5.0)		31.8	2	コビキ・縄タタキ 指押さえ	6×5	コビキ・布目 タタキ	15×13	なし	凹・凹	垂直・なし	灰色	密	硬質		E-151
152	B	西試掘 トレンチ	KB II 28.9	(23.7)		38.2	2.5	縄タタキ・指ナデ 指押さえ	9×5	コビキ・布目 タタキ・ケズリ	15×12	なし	垂直・なし	垂直・なし	灰色	密	硬質	凹面尻部端部寄りに布目端痕	E-152
153	B	西試掘 トレンチ 瓦溜まり	KB II 27			(31.3)	2.5	縄タタキ	6×4	コビキ・布目 タタキ	12×13	凸	凹・凹	凹・なし	灰色	密	やや軟質		E-153
154	B	西試掘 トレンチ 瓦溜まり	KB II 22.8	26		35.4	1.9	縄タタキ・ケズリ	5×3	布目・ケズリ	9×12	凸	垂直・凹	凸・なし	灰色	密	硬質		E-154
155	B	西試掘 トレンチ 瓦溜まり	KB II (22.5)	(28.5)		38.2	2.3	コビキ・縄タタキ 指押さえ	6×4	コビキ・布目 タタキ	10×11	なし	凹・凹	垂直・なし	灰色	密	硬質	凹面頭部端部寄りに布目端痕	E-155
156	B	検ⅠVB7d	KB (15.6)			(6.3)	2.2	縄タタキ・指ナデ 指押さえ	8×4	コビキ・布目 タタキ	13×16	凸	凹・凹		青灰色	密	硬質	凹面側面端に凹み	E-156
157	B	SD06土器5	KB I (14.4)			(12.3)	2.4	縄タタキ	9×5	コビキ・布目 ナデ	×19	なし	凹・凹	垂直・なし	灰色	密	硬質		E-157
158	A	表土	KB II (11.7)			(12.1)	2.6	コビキ・縄タタキ 指押さえ	9×4	コビキ・布目	12×15	凸	凹・なし	垂直・なし	灰色	密	硬質		E-158
159	B	西試掘 トレンチ 溜まり	KB 26.5			(19.6)	2.2	縄タタキ・指ナデ 指押さえ	7×5	コビキ・布目 横ナデ	15×17	なし	凹・凹	垂直・なし	灰色	密	硬質		E-159
160	B	西試掘 トレンチ 瓦溜まり	KB I (27.8)			(19.4)	2.2	縄タタキ・指ナデ 指押さえ	8×5	コビキ・布目 縦ナデ・指押 さえ	12×12	なし	凹・凹	垂直・なし	灰色	密	硬質		E-160
161	C	水田耕土	KB II (14.8)			(12.8)	2.5	縄タタキ・指ナデ 指押さえ	8×5	コビキ・布目 指押さえ	13×16	凸	凹・凹	垂直・なし	灰色	密	やや軟質	凸面に粘土付着	E-161
162	B	西試掘 トレンチ 瓦溜まり	KB 30.1			(21.9)	2.5	コビキ・縄タタキ 指ナデ・指押さえ	7×3	コビキ・布目 タタキ	11×12	凸	凹・凹	垂直・なし	青灰色	密	やや軟質		E-162
163	B	SK46	KB II (6.8)			(7.1)	2.2	縄タタキ	8×4	布目・横ナデ	×16	なし	凹・凹		灰色	密	硬質		E-163
164	B	検ⅠVB7d	KB I (6.7)			(8.9)	1.9	縄タタキ・指ナデ	5×4	布目	11×15	なし	凹・凹	垂直・なし	灰色	密	硬質	凹面端部寄りに布目端痕	E-164
165	B	検ⅠVA5q	KB I (10.6)			(8.7)	2	縄タタキ	6×4	コビキ・布目 タタキ	15×13	なし		垂直・なし	黄色	密	硬質	凹面端部寄りに布目端痕	E-165
166	C	水田耕土	KB I (9.8)			(9.1)	2.1	縄タタキ・指ナデ	8×3	コビキ・布目 タタキ・ケズリ	14×11	凸	凹・なし	垂直・なし	灰色	密	やや軟質	ほとんど側面がなく なっている	E-166
167	B	SD12	KB I (8.3)			(8.4)	1.8	縄タタキ・指押さ え	8×3	コビキ・布目 指ナデ	13×14	なし	凹・凹		灰色	密	硬質	凹面の側面寄りに布目端痕	E-167
168	B	西試掘 トレンチ	KB II (6.2)			(11.0)	1.9	縄タタキ・指ナデ	8×5	布目・横ナデ	×15	なし	凹・凹	凸・なし	白色	密	硬質	側面の一部に布目、側面に 縁折曲り痕	E-168
169	C	水田耕土	KB II (9.9)			(11.6)	2.1	縄タタキ・指ナデ 指押さえ	8×5	コビキ・布目 タタキ	×12	凸・凹	凹・なし	垂直・なし	灰色	密	やや軟質		E-169
170	B	検ⅠVA5s	KB (11.9)			(11.1)	1.9	コビキ・縄タタキ	9×6	コビキ・布目	×13	なし		垂直・なし	黄色	密	硬質		E-170
171	C	水田耕土	KB II (8.5)			(10.1)	1.9	縄タタキ・ケズリ 指押さえ	7×4	布目・タタキ	×13	なし	凹・凹	垂直・なし	黄色	密	やや軟質	側面の部分まで布目が付く	E-171
172	B	SK46	KB II (9.0)			(8.9)	2.1	縄タタキ	8×4	布目・タタキ	12×11	なし	凹・凹	凸・凹	灰色	密	硬質		E-172
173	A	表土	KB I (14.6)			(8.4)	1.9	コビキ・縄タタキ ケズリ・ナデ	7×4	コビキ・布目	15×13	なし	凹・凹	凸・なし	黄色	密	やや軟質		E-173
174	A	表土	KB (7.3)			(8.4)	2.2	縄タタキ	8×4	布目・ナデ	14×15	なし	凹・凹		黄色	密	やや軟質	側面の部分まで布目が付く	E-174

第8表 瓦 [141～174]

平行方向な横ナデを施すもの(159・163・168)、側面に平行方向に縦ナデを施すもの(160)がある。布目はほぼ瓦の大きさに沿ったものと思われるが、布の端の部分と思われる布目の端に紐状の凹みとして残るものがあり(端面側に布目端痕152・155・164・165、側面側に布目端痕167)、側面の部分にも布目が付くものがある(168・171・174)。側面の布目は凸面の縄タタキ調整の段階に付いたものと思われ、縄タタキ後凸面側面取りが行われている(171・174)。また156の凹面の側面端で幅1.5cm、深さ0.3cm程三角形に凹部分があり、布目が着いている(同様なものは152にも確認できる)。その部分の側面側に粘土板の端部分があることから、全てではないが凸面成形台の側面側に断面三角形の低い縁がある形態を反映している可能性がある。側面に布目が付くと見えるのはこの部分にあった布の痕を反映したものかも知れない。

169のみはなれ砂が付着している。

側面形状

側面のほとんどはへう削りによって整えられており、152・154の側面形状が側面垂直である他は瓦の凹面側が突出している。また側面取りは全て凹面側に施されている。

端面形状

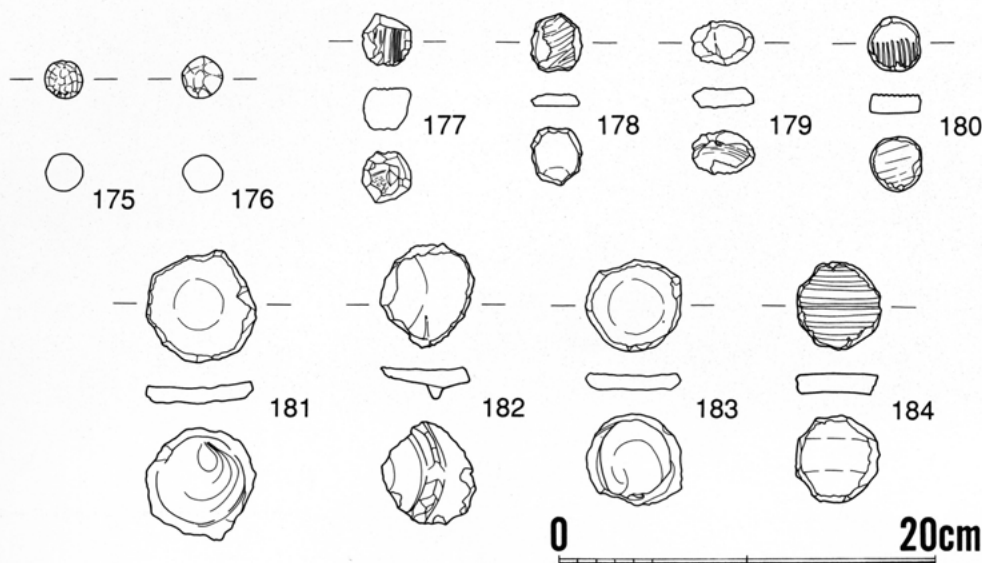
端面の調整もほとんどへう削りされており、端面形状は凹面側が突出しているもの(153)、凸面側が突出しているもの(154・168・172・173)があるが、凸面垂直であるものが多い。

色調・胎土・焼成

色調は灰色のものが主体で(151～155・157～161・163・164・166・167・169・172)、青灰色(156・162)、白色(168)、黄色(165・170・171・173・174)がある。焼成は硬質なもの为主体であるが、やや軟質なのは灰色(153・161・166・169)、青灰色(162)、黄色(171・173・174)があり、色調が黄色のものにやや軟質なものが多い。

第3節 土製品(第22図175～184、第9表)

175・176は陶丸で、ともに径1.95cmの球形。177～184は加工円盤で、177が古代の瓦、178が須恵器甕、179・181～183が南部系灰釉系陶器陶器(181・182は碗、183は小皿)、180・184が施釉陶器(180は擂鉢)が素材になっている。円形への加工方法は、177～179・181～184が打ち欠き、180はさらに側面が研磨されている。大きさから径2.5cm前後の177～180と径5cm前後の181～184に分かれる。加工円盤は古代から近世にいたる時期の素材が使われており、近世以降の遺物がほとんどない本遺跡において近世の施釉陶器を素材にした加工円盤が出土する点は注目される。



第22図 土製品 [175~184] (1 : 4)

番号	調査区	出土遺構・地点	器種	器形	色調	胎土	焼成	残存率	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	技法の特徴	備考	登録番号
175	C	検 IVA2j	灰釉系陶器	陶丸	灰白色	密	硬質	完形	径1.95			ナデ		E-175
176	B	攪乱 VA4s	灰釉系陶器	陶丸	灰白色	密	硬質	完形	径1.95			ナデ		E-176
177	B	攪乱 VA4s	瓦	加工円盤	灰色	密	硬質	完形	2.6	2.5	2.1	上面ハケ目状の線刻、下面縄タキ痕、側面打ち欠き		E-177
178	C	水田 VA2j	須恵器	加工円盤	灰色	密	硬質	完形	2.9	2.6	0.55	上面タキ痕、下面ナデ、側面打ち欠き		E-178
179	B	攪乱 VA4s	灰釉系陶器	加工円盤	灰白色	やや粗	硬質	完形	2.3	3.3	0.9	上面クロナデ、下面糸切り痕、側面打ち欠き		E-179
180	A	表土	施釉陶器	加工円盤	鉄釉	やや粗	やや軟質	完形	2.85	2.7	0.95	上面クロナデ後摺目、下面回転ヘラ削り、側面研磨		E-180
181	B	検 IVA5s	灰釉系陶器	加工円盤	灰白色	やや粗	硬質	完形	5.7	5.6	0.8	上面クロナデ、下面糸切り痕、側面打ち欠き		E-181
182	B	試掘トレンチ	灰釉系陶器	加工円盤	灰色	密	硬質	完形	5.4	4.6	0.8	上面クロナデ、下面糸切り後貼り付け高台、側面打ち欠き		E-182
183	B	攪乱 VA4s	灰釉系陶器	加工円盤	灰白色	やや粗	硬質	完形	4.8	5	0.75	上面クロナデ、下面糸切り痕、側面打ち欠き		E-183
184	C	水田 VA2・3j	施釉陶器	加工円盤	上面鉄釉 下面灰釉	密	硬質	完形	4.6	4.3	0.95	上面摺目、下面クロナデ、側面打ち欠き		E-184

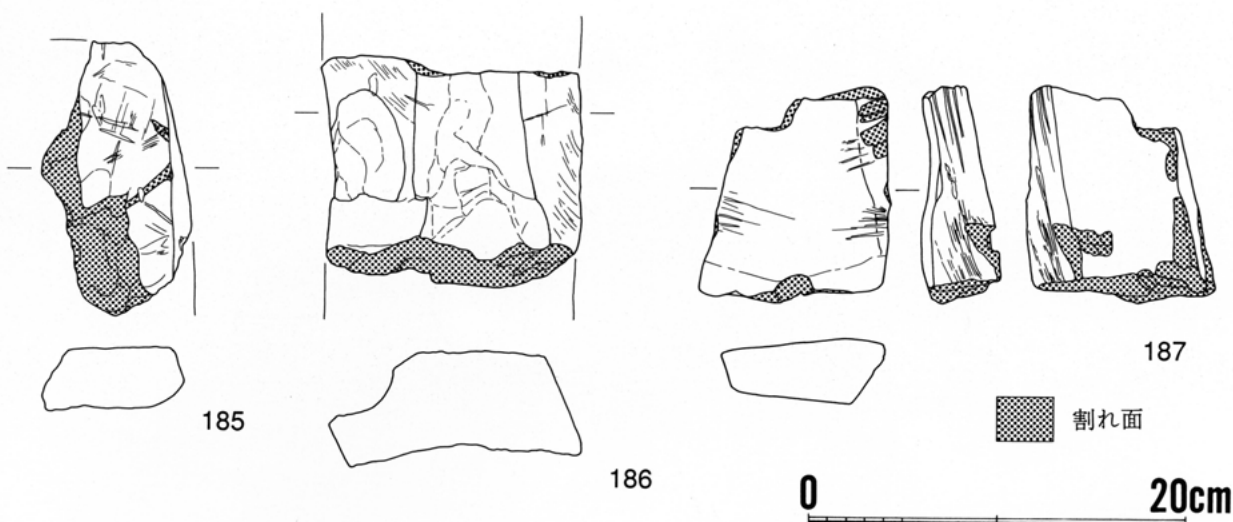
第9表 土製品 [175~184]

第4節 石製品 (第23図185~187、第10表)

185は磨製石斧と思われるもので、泥岩製である。186・187は砥石でともに割れた残りであるが、186は図の左側面に径2.0cm前後で親指状の凹みがある。ともに緻密な泥岩を用いており、187の図の側面と下面に研ぎ跡と思われる条線がみえる。

番号	調査区	出土遺構・地点	器種	器形	色調	残存率	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	備考	登録番号
185	C		石器	磨製石斧	黒色	刃部の一部	(7.3)	(3.7)	1.5	泥岩 (化石を含む)	S-1
186	B	検 IVA5s	石器	砥石	赤灰色	両端欠く	(5.5)	7	2.5	泥岩	S-2
187	C		石器	砥石	赤褐色	両端欠く	5.7	4.5	1.5	泥岩	S-3

第10表 石製品 [185~187]



第23図 石製品 [185~187] (1 : 4)

第5節 鉄資料 (第24図188~第25図202、第11表)

遺跡から出土する鉄資料には製鉄・鍛冶の鉄加工に伴う鉄滓類・未製品と鉄製品がある。本遺跡出土の鉄資料には製鉄に伴うと思われるものはなく、全て鍛冶に伴うもので鉄滓類30点・炉壁1点・鉄製釘4点があり全部で35点出土している。ここではその(1)肉眼的観察と簡易な検査により一覧表(第11表)を作成し⁽⁸⁾、(2)本遺跡において特徴的な鉄資料を挙げる。

(1) 鉄資料の肉眼的観察と簡易検査 (第11表)

(2) 鉄資料の分析

出土した鉄資料は、椀型滓13点、流動滓A 9点、流動滓B 3点、炉壁2点、鉄製釘4点、含鉄遺物4点がある。ここでは、その中で特徴的な鉄資料を挙げた。

椀型滓 (197~202)

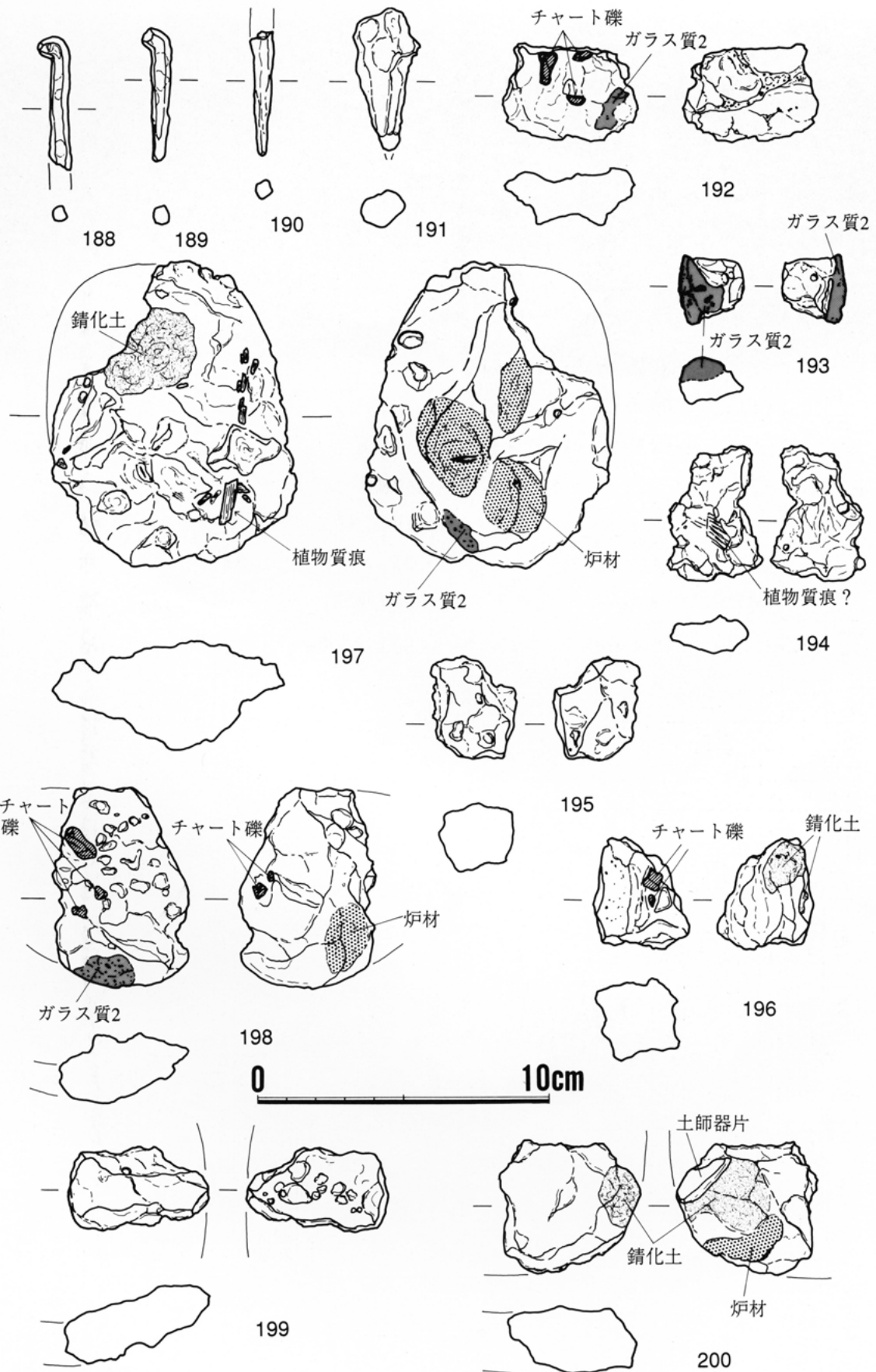
197~200は普通の椀型滓で、197・198が2分の1分割椀型滓、200が4分の1分割椀型滓、やや不整形であるが199は8分の1分割椀型滓と考えた。197の上面には木質状の植物質痕が付着し、下面に炉材が付着している。下面の一部にガラス質2の部分を確認できる。198は上面・下面にチャートの礫が付着するもので、上面には径0.5cm前後の大きな気泡が多く見られる。199の下面にも径0.5cm前後の大きな気泡が見られる。200の下面に錆化土と混ざって土師器片が付着している。

201・202は含鉄椀型滓で、上面側の端で金属反応部分が確認された。201は2分の1分割椀型滓、202は4分の1分割椀型滓。どちらとも下面に炉材の付着が見られる。

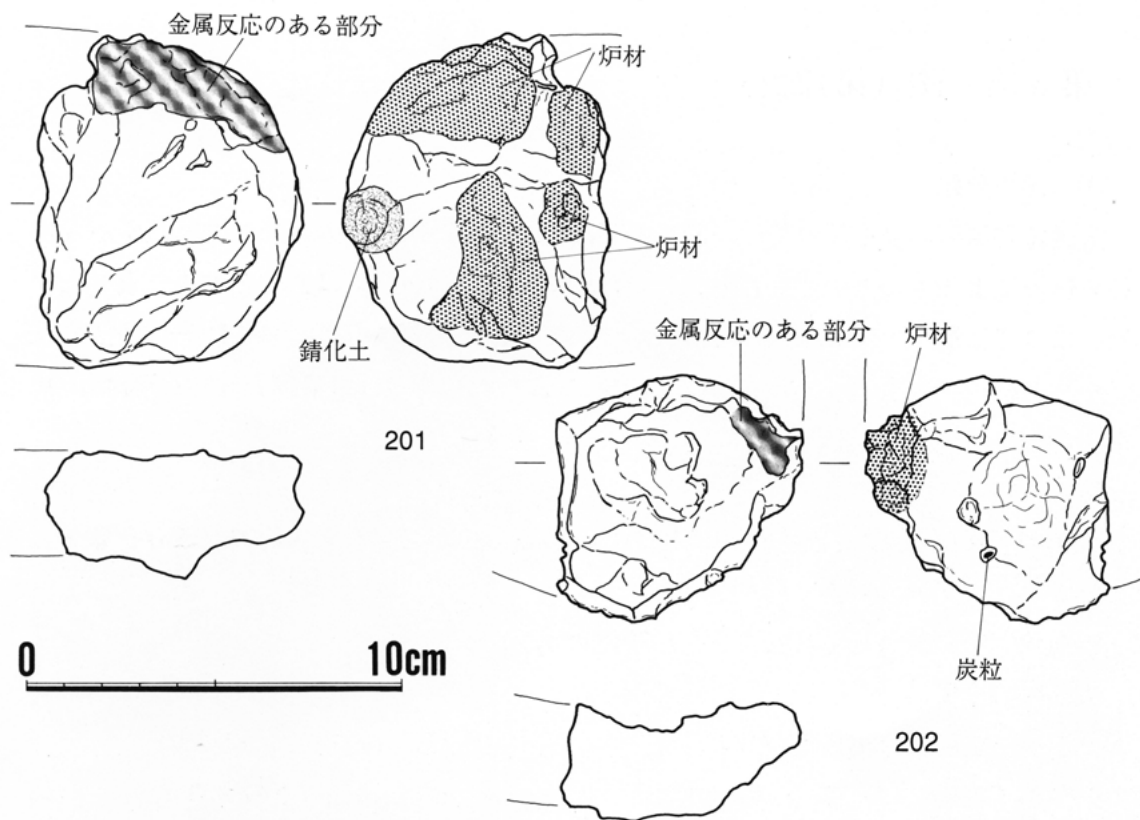
他に4分の1分割椀型滓が8点ある。

番号	報告書 番号	調査区	遺構	遺構・地点 (報告前)	保存番号	種別	形状	重量 (g)	長さ (cm)	短径 (cm)	高さ (cm)	着磁度	メタル	残存	発泡	小石	植物	木炭	炉材	ガラス	備考	登録番号	
1	190	95B		検 I V B6a	96-71	含鉄遺物	棒状	3	4.1	0.6	0.6	2	0	欠						0		M-1	
2	188	95B		検 I V A6t	96-72	鉄製品	棒状	5	4.4	0.5	0.5	2	0	欠						0	釘	M-2	
3	189	95B		検 I V A6t	96-73	鉄製品	棒状	3	4.4	0.6	0.5	2	0	完						0	釘	M-3	
4		95B		攪乱 V A4s	96-74	鉄製品	棒状	6	4.2	2.5	0.6	3	2	完						0	釘	M-4	
5		95B		攪乱 V A4s	96-75	鉄製品	棒状	2	5.8	0.3	0.3	3	2	欠						0	釘	M-5	
6	194	95B	S K46	S K46	96-601	流動滓A	偏平	26	4.5	2.9	1.2	5	0	欠	○	○			1			M-6	
7	191	95B		検 I V A5s	96-602	含鉄遺物	棒状	16	4.7	2	1.3	2	0	完					0			M-7	
8		95B		検 I V A6s	96-603	碗型滓		66	4.9	4.7	2.2	3	0	欠	○			○	1	1/4分割碗型滓		M-8	
9	200	95B		検 I V A5s	96-604	碗型滓		93	4.3	4.3	2.1	2	0	欠	○			○	1	1/4分割碗型滓		M-9	
10		95B		検 I V A5s	96-605	流動滓A	偏平	36	4.1	3.7	1.3	2	0	完	○				1			M-10	
11	195	95B		検 I V A5s	96-606	流動滓A	碟状	41	3.5	3	1.2	1	0	欠	○				1	破断面		M-11	
12	196	95B		検 I V A5s	96-607	流動滓A	碟状	50	3.4	3	2.1	2	0	欠	○	○			1	破断面、チャート礫をかみ込む		M-12	
13		95B		検 I V A5t	96-608	流動滓B	碟状	14	3.1	2.3	1.5	2	0	完	○				○	2		M-13	
14	197	95B		検 I V A5s	96-609	碗型滓		350	10.4	8.3	3.5	2	0	欠	○		○		○	1	1/2分割碗型滓		M-14
15		95B		検 I V A5s	96-610	碗型滓		35	4.1	3.2	1.7	2	0	欠	○				○	2	1/4分割碗型滓		M-15
16		95B		攪乱 V A4s	96-611	碗型滓		59	5.1	2.5	1.8	2	0	欠	○				○	1	1/8分割碗型滓		M-16
17	199	95B		攪乱 V A4s	96-612	碗型滓		45	5.5	4.7	2.1	2	0	欠	○				○	1	1/4分割碗型滓		M-17
18		95B		攪乱 V A4s	96-613	流動滓B	碟状	24	2.7	2.3	1.9	1	0	欠	○				○	2	赤色付着物		M-18
19	198	95B		攪乱 V A4s	96-614	碗型滓		81	6.5	4.3	2.3	2	0	欠	○	○			○	1	1/2分割碗型滓、チャート礫をかみ込む		M-19
20	193	95B		攪乱 V A4s	96-615	流動滓B	碟状	12	2.2	2.1	1.5	1	0	欠	○				○	2	ガラス側に炉材の溶融したもの付着		M-20
21		95B		攪乱 V A4s	96-616	流動滓A	偏平	38	5.4	3.3	1.2	2	0	欠	○					1		M-21	
22	192	95B		攪乱 V A4s	96-617	炉壁	凹凸	17	4.3	3	1.5	0	0	欠	○	○			○	2	白色付着物、流動滓付着、礫をかみ込む		M-22
23		95B		攪乱 V B6a	96-618	碗型滓		87	5.8	4.5	2	3	0	欠	○				○	1	1/4分割碗型滓		M-23
24		95B		攪乱 V B6a	96-619		碗型滓	125	5.6	4.6	2.7	4	0	欠	○				○	1	1/4分割碗型滓		M-24
25	201	95B		攪乱 V A4s	96-620	含鉄碗型滓		300	8.4	6.5	3.9	3	2	欠	○				○	1	1/2分割碗型滓		M-25
26	202	95B		攪乱 V A4s	96-621	含鉄碗型滓		212	6	5.6	2.6	3	2	欠	○				○	1	1/4分割碗型滓		M-26
27		95B		攪乱 V A4s	96-622	碗型滓		100	5.3	5.3	2.1	1	0	欠	○				○	1	1/4分割碗型滓		M-27
28		95B		攪乱 V A4s	96-623	碗型滓		59	4.7	3.7	1.7	3	0	欠	○				○	1	1/4分割碗型滓		M-28
29		95B	S D04	S D04		流動滓A	偏平	27	4.5	2.4	1.3	1	0	欠	○				1	破断面、赤色付着物		M-29	
30		95B		検 I V A5s		流動滓A	碟状	3	1.6	1.1	0.9	0	0	欠		○			1	チャート礫をかみ込む		M-30	
31		95B		検 I V A5s		流動滓A	碟状	2	1.1	1	1.1	2	0	欠		○			1	チャート礫をかみ込む		M-31	
32		95B		検 I V A5s		流動滓A	碟状	15	2.5	2	1.5	1	0	欠	○				1	灰色付着物		M-32	
33		95B		攪乱 V A4s		炉壁	碟状	2	2.4	1.4	1	1	0	欠	○				2	炉壁の溶融したもの		M-33	
34		95B		攪乱 V A4s		含鉄遺物	偏平	4	2.3	1.3	0.7	2	0	欠					0			M-34	
35		95B		攪乱 V A4s		含鉄遺物	棒状	1	1.4	1.1	0.5	1	0	欠					0			M-35	

第11表 鉄資料一覧



第24図 B区出土鉄資料 [188~200] (1:2)



第25図 B区出土鉄資料 [201・202] (1:2)

流動滓 (193～196)

193は礫状の流動滓Bで上面側にガラス質2部分がみられる。194は偏平な流動滓Aで上面に植物質痕らしき痕跡が残る。195～196は礫状の流動滓Aで196は上面にチャート礫が付着する。碗型滓の破割りされたものかもしれない。他に流動滓Bには礫状のものが2点、流動滓Aには礫状のもの3点、偏平なもの3点がある。

鉄製釘 (188・189)

188・189は断面方形で、頭がやや鈍角に折曲げられるもので、189は長さ4.4cmのやや短い釘である。他の2点の釘は断面円形で新しいものかもしれない。

含鉄遺物 (190・191)

190・191は棒状含鉄遺物で、190は釘状で断面方形の先尖りである。191は鍍化土の付着が多いもので、先尖りのようである。他にも棒状のもの1点、偏平のもの1点がある。

炉壁 (192)

上面にチャート礫が3個付着し、鉄滓のガラス質2部分がある。表面に一度溶けた痕跡を残す。

第6節 礫（第12表）

(1) 礫の分類

大縄遺跡周辺の濃尾平野では一般的に礫はみられず、本遺跡の多量の礫は他所からの持ち込みによるものと考えられる。そのため調査で見つかったほとんどの礫を取り上げた。ここでは遺構・出土地点ごとの礫について角礫と円礫に分け、さらに礫の長径の長さからL型～SS型に4分類し、礫の種類ごとにカウントした(第12表)。以下分類の基準を示す。

礫の分類

角礫：礫が割れた状態にあり、礫の角があるもの。必ずしも人為的な破碎を意味しない。

円礫：礫が河原石の状態にあり、礫の角がないもの。

大きさの分類

L型：長径10.1cm以上のもの

M型：長径7.1cm～10.0cmのもの

S型：長径4.1cm～7.0cmのもの

SS型：長径4.0cm以下のもの

(2) 礫の構成と特徴

礫の種類には安山岩、凝灰岩、流紋岩、チャート、花崗岩、片岩、泥岩、シルト岩、石灰岩、頁岩があり、量的には圧倒的に安山岩が多く、凝灰岩、流紋岩、チャートと続く。礫の大きさは量にほぼ比例しており、安山岩、凝灰岩、流紋岩まではほぼ同様な比率で礫の大きさが分かれているようにである。他の礫ではチャートのものがやや大きいものを含むが、L型の石材はなく、花崗岩、片岩、泥岩、シルト岩、石灰岩、頁岩ではほとんどの石材がS型、SS型の小礫である。

礫の大部分は割れた角礫の状態にあり、人為的に割られた可能性がある。一部の礫には、加熱による赤変や煤の付着がみられるものがあり、火を使うような用途に使われた可能性があるが、加熱を受けたと思われる礫は数点にすぎず、あまり火に直接掛かる状態で使われたものではないと思われる。

礫の産地は安山岩、凝灰岩、流紋岩が主体を占めることから木曽川上流部の地域と思われる。

礫の時期は一時期に属するものではないかも知れないが、SK44・SK46など遺構出土の礫から13世紀前半以前のものが主体となっている可能性が高い。

調査区	遺構・出土位置	安山岩	凝灰岩	流紋岩	チャート	花崗岩	片岩	泥岩	シルト岩	石灰岩	頁岩	計
B	SK39	▲M1	▲L1									▲L1M1
B	SK44	▲S2	▲L2M1 S1		▲SS1							▲L2M1S3S S1
B	SK46	▲L2M6S 1	▲L2									▲L4M6S1
B	SD04	▲S1S1	▲SS1									▲S1S2
B	SD06	▲L1S1 ●L1	▲S2									▲L1S3 ●L1
A	東・西トレンチ	▲S1										▲S1
B	検I (VA5s)	▲L4M9S 18S S33 ●S5S4	▲L1M2S 3S S2 ●S2	▲M1S4S S2 ●L1S S2	▲S3S S 22 ●S4S S9	●S2	▲M1S1	▲M2S1	▲SS3			▲L5M15S30 S S62 ●L1S11S S 17
B	攪乱VA4s	▲L15M27 S36S S19 ●M3S2S S2	▲M12S6 S S4 ●S3	▲L1S S4 ●L3M1S S4	▲M2S2S S15 ●M1S S9	▲S3S S2 ●S2	▲S4S S3		●SS2		▲S S1● S1	▲L16M41S 51S S48 ●L3M5S8S S17
B	攪乱(VB6a)	▲L5M11 S S12 ●L1S S5	▲M4S7S S3 ●L1	▲L1S S1 ●L1S1S S7	▲S1S S 23 ●S1S S 12	▲S1S S1 ●S S1	▲L1S S1		▲SS2	▲SS4 ●SS1	▲S1S S1	▲L7M15S10 S S48 ●L3S2S S 26
C	水田耕作土	▲L13M15 S14S S10 ●L1M2S 2S S1	▲L1M11 S14 ●M1	▲L2M1S 1S S1 ●M1	▲M1S4S S4		▲L1					▲L17M28S 33S S15 ●L1M4S2S S1
計		▲L40M69 S74S S75 ●L3M5S 9S S12	▲L7M30 S33S S10 ●L1M1S 3S S2	▲L4M2S 5S S8 ●L5M2S 1S S13	▲M3S10 S S65 ●M1S5S S30	▲S4S S3 ●S4S S1	▲L2M1S 5S S4	▲M2S1	▲SS5 ●SS2	▲SS4 ●SS1	▲S1S S2 ●S1	▲L53M107S 133S S176 ●L9M9S23 S S61

▲：角礫 ●：円礫 L：長径 10.1cm～ M：長径 7.1cm～ S：長径 4.1cm～7.0 SS：長径 10.0cm ～4.0cm

第12表 礫の形態と大きさ

註

- (1) 赤塚次郎1990「考察」『廻間遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター、檜崎彰一1983「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡分布調査報告Ⅲ』愛知県教育委員会
- (2) 灰釉陶器については齊藤孝正1986「灰釉陶器の研究Ⅰ」『名古屋大学文学部研究論集XCV』、同1986「灰釉陶器の研究Ⅱ」『名古屋大学文学部研究論集104』を、灰釉系陶器については藤澤良祐1982「山茶碗の型式編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館、同1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター、田口昭二1984『美濃焼』ニューサイエンス社を、瀬戸・美濃産陶器については藤澤良祐1996「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』瀬戸市教育委員会・財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター、同「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』瀬戸市歴史民俗資料館を主に参考にした。
- (3) 永井宏幸1996「清郷型鍋再考」『年報平成7年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター、以下同類の甕についてはこれによる。
- (4) 北村和宏1996「尾張の「伊勢型鍋」」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム
- (5) 北村和宏1996「尾張の羽釜」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム
- (6) 蟹江吉弘1994「瓦」『堀之内花ノ木遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター、また軒平瓦については稲垣晋也1968「尾張国分寺の発掘調査一遺物（瓦類）」『稲沢市史』所収を参考にした。
- (7) 堀之内花ノ木遺跡報告の瓦の記載において「無彫刻タタキ」とされているものと同じものを指している。蟹江吉弘1994「瓦」『堀之内花ノ木遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- (8) 鈴木正貴・蔭山誠一1997「愛知県における古代・中世の鉄器生産その1」『年報平成8年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター

第4章 まとめ

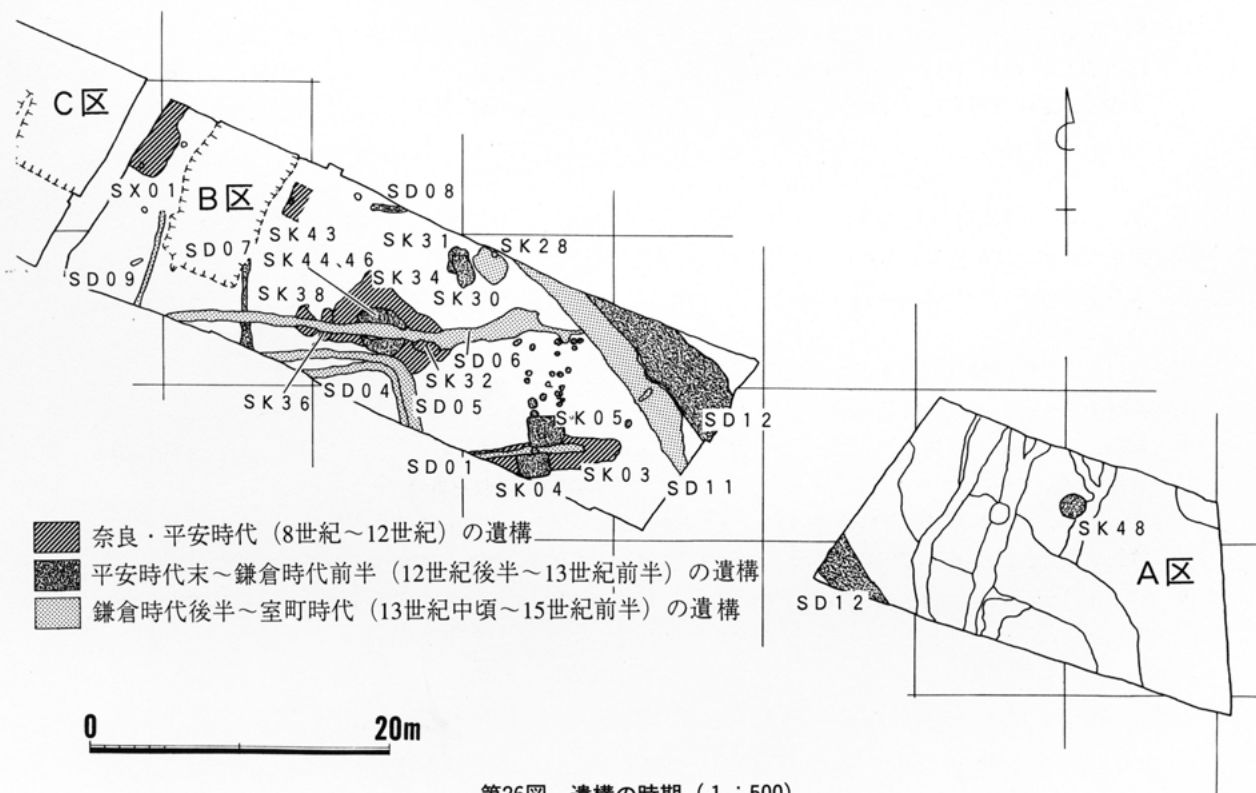
第1節 大縄遺跡の変遷と特徴 (第26図)

第2章 遺構において各遺構を奈良・平安時代(8世紀～12世紀)、平安時代末～鎌倉時代前半(12世紀後半～13世紀前半)、鎌倉時代後半～室町時代(13世紀中頃～15世紀前半)の大きく3時期に分けた。ここでは各時期における特徴を遺構の変化等から考える。

(1) 奈良・平安時代(8世紀～12世紀)の特徴

この時期の遺構は明確に時期を限定できるものがなく、非常に幅広い時期の遺構をまとめて扱っており、遺構の在り方もまとまった傾向を示していない。しかしSK34・SK43・SX01といった大型平底の土坑状の遺構が存在する点が特徴である。これらの遺構には火処など内部施設がみられず、用途は不明である。

遺物ではこの時期に属する古代の瓦がまとまって出土している。しかし瓦の使用が考えられるような遺構は確認できておらず本遺跡において直接瓦の出土する理由は見い出されない。このことは西に隣接する儀長正楽寺遺跡においてもほぼ完形に復元できる平瓦が出土しているが本遺跡と同様な傾向を示すものと思われる。また本遺跡出土の軒平瓦は全て尾張国分寺系の軒平瓦の文様を持つことや平瓦の製作技法でも類似することか



ら、国分寺とは何らかの関係を持つ瓦と考えられる。瓦の数量をカウントしていないが、丸瓦はコンテナ3箱に対して平瓦はコンテナ17箱と平瓦の量が圧倒的に多く、建物に通常の瓦葺きがなされた状態は想定できない。

よって本遺跡で瓦が出土する理由としては、本遺跡の立地と国分寺への距離といった関係から国分寺用の瓦置場があったことを示すか、あるいは瓦を部分的に少量使用する様な建物の存在、瓦の他の用途への転用といった可能性を推定しておきたい。

(2) 平安時代末～鎌倉時代前半（12世紀後半～13世紀前半）の特徴

本遺跡ではこの時期における土器・陶磁器の出土が最も多いようであるが、この時期の遺構では小型円形丸底土坑の一群と土坑3基、溝2条がある。溝に囲まれた区画内におけるピークを反映している可能性があり、農業等の用水用の溝と考えられるSD12はこの時期に機能していたものと思われる。

またこの時期以前と考えられる鉄資料はこの様な地域開発に伴って行われた可能性もある。

(3) 鎌倉時代後半～室町時代（13世紀中頃～15世紀前半）の特徴

この時期にはSD12が埋め戻され、SD11が掘り直されたものと思われる。その用水用溝の傍らにおいて方形状に区画を表す溝が多数みられ、中世において継続的な営みが行われたものと考えられる。SD05からSD04へほぼ同位置に同規模で溝が掘り直された事もこれを示唆するものと思われる。

第2節 鉄資料の傾向（第27図）

(1) 鉄資料の時期

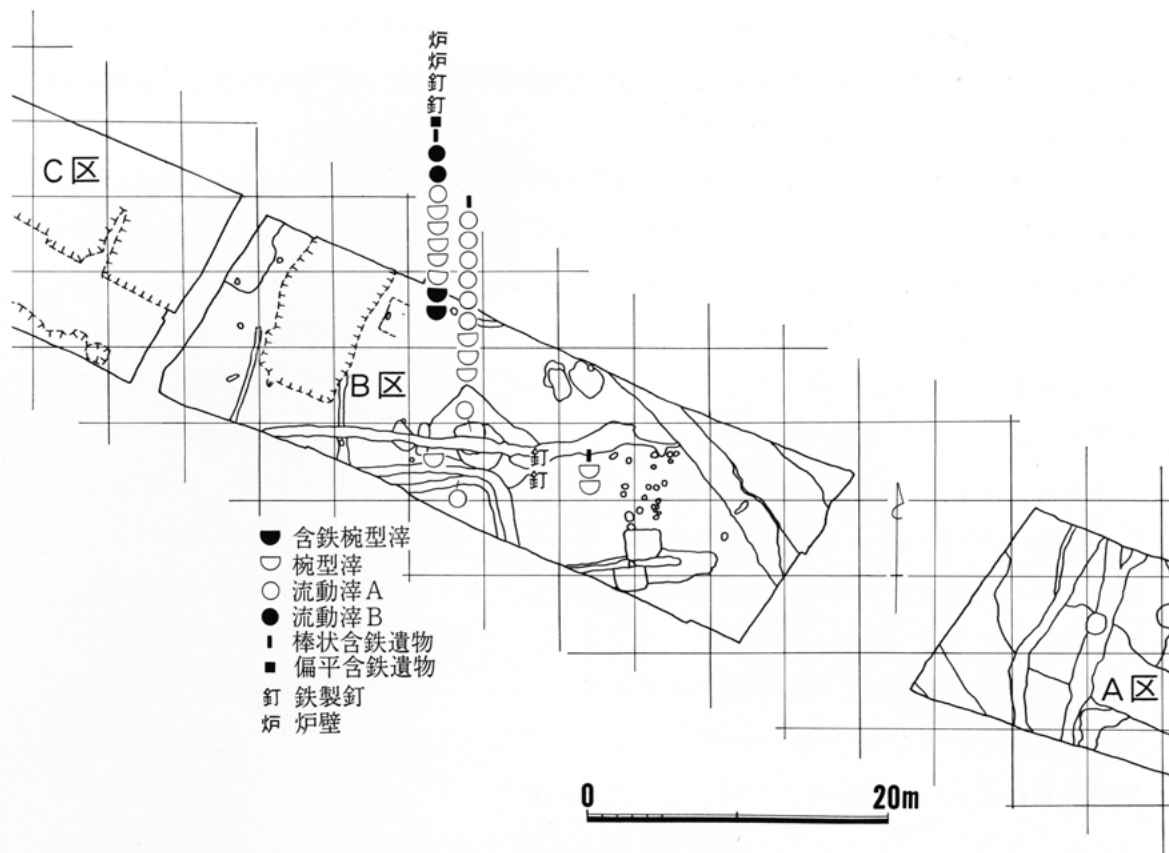
本遺跡では鉄器製作に関連する遺構は確認されておらず、鉄資料の出土した遺構は13世紀前半と考えられるSK46、14世紀後半以降のSD04があるのみで、大部分の資料は包含層や耕作による攪乱層からのものである。したがって鉄資料の時期を限定できないが、13世紀前半以前において他の遺物で量等の相対的なピークである12世紀後半～13世紀前半にその時期を想定したい。

(2) 鉄資料の分布傾向（第27図）

先述の通り厳密な時期を想定できない状況にあるので、遺構との厳密な関係は不明であるが、鉄資料の出土地点を表したのが第27図である。この図から分かることは鉄資料が圧倒的にSK34の北側地点からの出土が多いことで、SK34東側の鉄資料の分布も考慮にいればSK34を中心に分布しているともいえる。

(3) 鉄資料の特徴

第3章第5節でも触れたように出土した鉄資料の内訳は椀型滓13点、流動滓A9点、流動滓B3点、炉壁2点、鉄製釘4点、含鉄遺物4点の構成である。本遺跡だけの特徴



第27図 鉄資料の分布 (1:500)

とはいえないかも知れないが、碗型滓が全体の37%を占めること、流動滓Aが流動滓Bに比べて多いことなどが特徴といえる。また隣接する堀之内花ノ木遺跡・儀長正楽寺遺跡の鉄資料と比較してみると鉄資料全体の中で碗型滓の比率が高いこと、流動滓Bが流動滓Aに比べて少なく流動滓A・Bの比率が逆転していること、各形態の含鉄遺物が少ないことが挙げられる。これらの特徴から大縄遺跡では鉄精練を主体とする鉄加工が行われたことを想定している⁽¹⁾。

第3節 平安時代末における開発 (第28図)

(1) 明治19年の地籍図にみられる水田とSD11・SD12 (第28図)

SD11とSD12は北西から南東にほぼ同方向で流れており、一定の役割を担った用水用溝と想定している。本節では溝の流れる方向とその役割について遺跡周辺の明治19年に作成された地籍図をもとに地籍の区画割と土地利用の違いから分析する。

明治19年の本遺跡周辺は西に三宅川が南北に流れ、三宅川右岸には畑が、左岸の氾濫原には水田が開かれており、本遺跡や尾張国分寺の立地する三宅川左岸の自然堤防上も主に畑に利用されている。基本的な土地利用の在り方は当時とやや異なるものの現在とあまり変化はなく、基本的に畑に利用されていた部分は微高地で、水田に利用されてい

た部分は相対的に低い後背湿地や谷状の窪みの部分を表しており、土地利用の在り方が当時の地表面の起伏をある程度表すものと考えられる。

この様な視点からまず当時の水田の上に①～⑦と記した。この中で現在と大きく異なるのはa. A区南側の水田の部分が広がったこと、b. 逆にA区の北側にあった水田②が植木畑に変わり完全にその区画が周りの区画に取り込まれて消滅したこと、c. B区東側を北から南に細長くあった水田①が植木畑に取り込まれ、その区画が完全に消滅していること、d. C区西側の水田⑦の部分が現在植木畑に取り込まれて消滅したこと、e. 水田⑤の部分が道路になっていること等5点が挙げられる。大縄遺跡に直接関係する部分としてはa～dの4点でa・bの2点については調査によってその痕跡を確認できなかったが、cについてはB区東側で植木耕作土の下層から水田耕作土を確認し、水田耕作土の下からSD11・SD12を検出した。dについてもC区西側で植木耕作土の下層から水田耕作土と現在の区画整理以前の用水溝の一部と思われる杭列などを確認している。c・dの変化は主に昭和30年代後半の耕地区画整理による改変に起因している。

ここで問題であるのは、B区東側の水田耕作土下において見つかったSD11・SD12がcのB区東側を北から南に細長くあった水田①の位置に沿って検出されたことで、明治19年の段階に水田①にある谷状の窪み部分は中世における溝の痕跡を残していた可能



性が高いことである。この様に考えることが可能であれば、水田①の部分は中世の溝SD11・SD12の流路を示しているものと思われる。水田①の部分は北からB区東側をかすめ、A区南西に現在も流れる大塚井筋の南西に流れを屈曲させる部分まで辿ることができ、SD11・SD12の流路も基本的にその位置にあったものと考えておきたい。さらに推測を強くするならばSD11・SD12の流路が大塚井筋の流路と切り合い関係を持って存在するようであることから、SD11・SD12は大塚井筋以前（中世）の農業用水路として機能しており、15世紀の段階以降に大塚井筋の流路に切り替えられたのではないであろうか。

さて現在の大塚井筋は稲沢市大塚町において大江用水（川）から取水しており、SD11・SD12の取水口は流路の方向から考えると大塚井筋とは異なる所からの可能性が高く、流路の上流と考えられる地点としては三宅川以外には考えられない。またSD11・SD12の取水口の方向には小字に「樋上」の地名が残っており、SD11・SD12に伴うかは不明であるが、三宅川からの用水等の取水口としての樋がかって存在した可能性が高い。

(2) 大縄遺跡SD11・SD12の位置付け

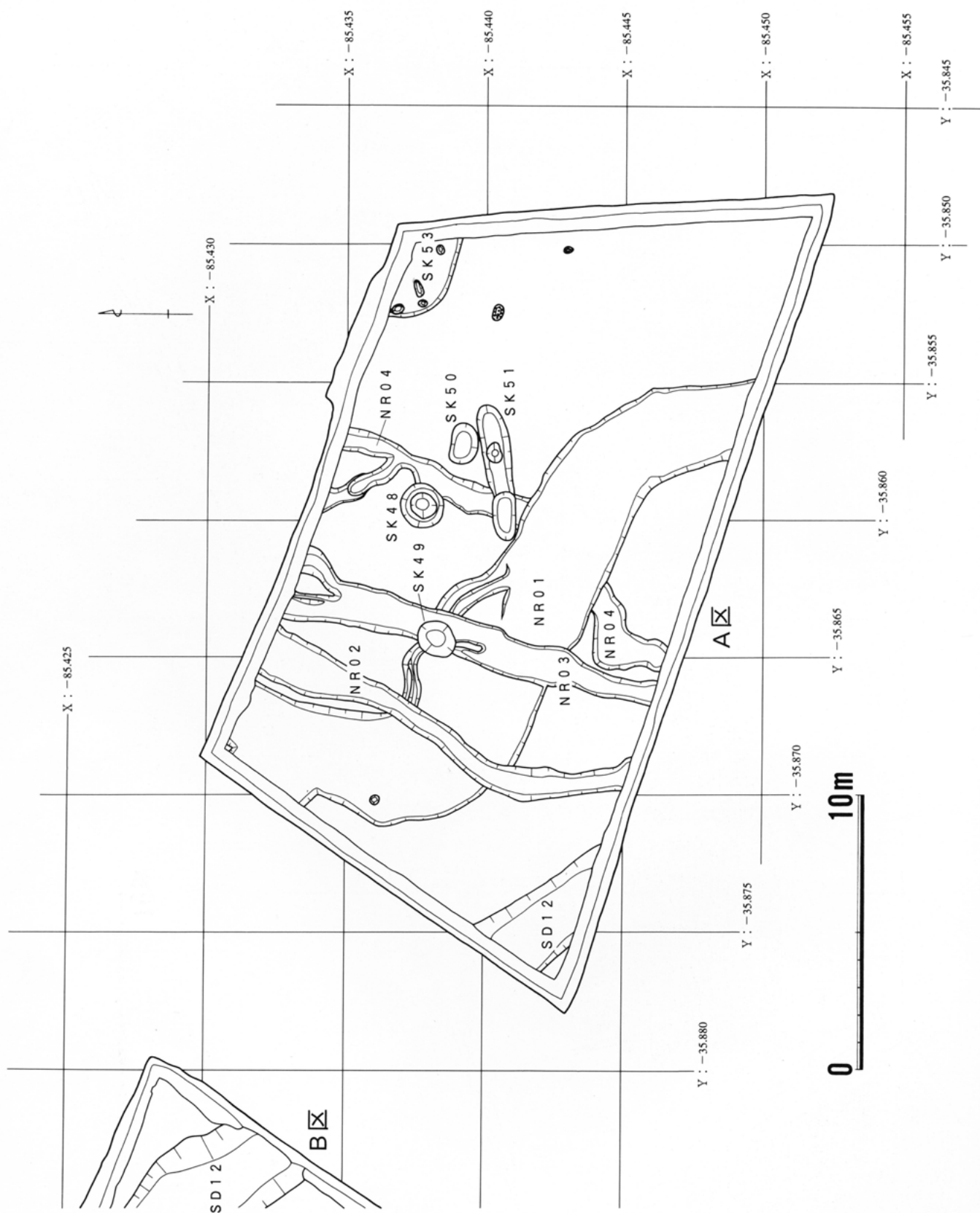
最後にこれまでに調査報告書が刊行されている堀之内花ノ木遺跡・儀長正楽寺遺跡について触れ、SD11・SD12掘削の歴史的な位置付けを考えたい⁽²⁾。

遺構や遺物等の変遷から両遺跡においても本遺跡と同様に弥生時代後期以後の遺物が確認され、8世紀～9世紀に一つのピークがあり、12世紀～15世紀前半にかけて再び集落が営まれている。大縄遺跡がやや異なるのは、明確な遺構はないものの10世紀～11世紀の資料も継続して散見される点にある。

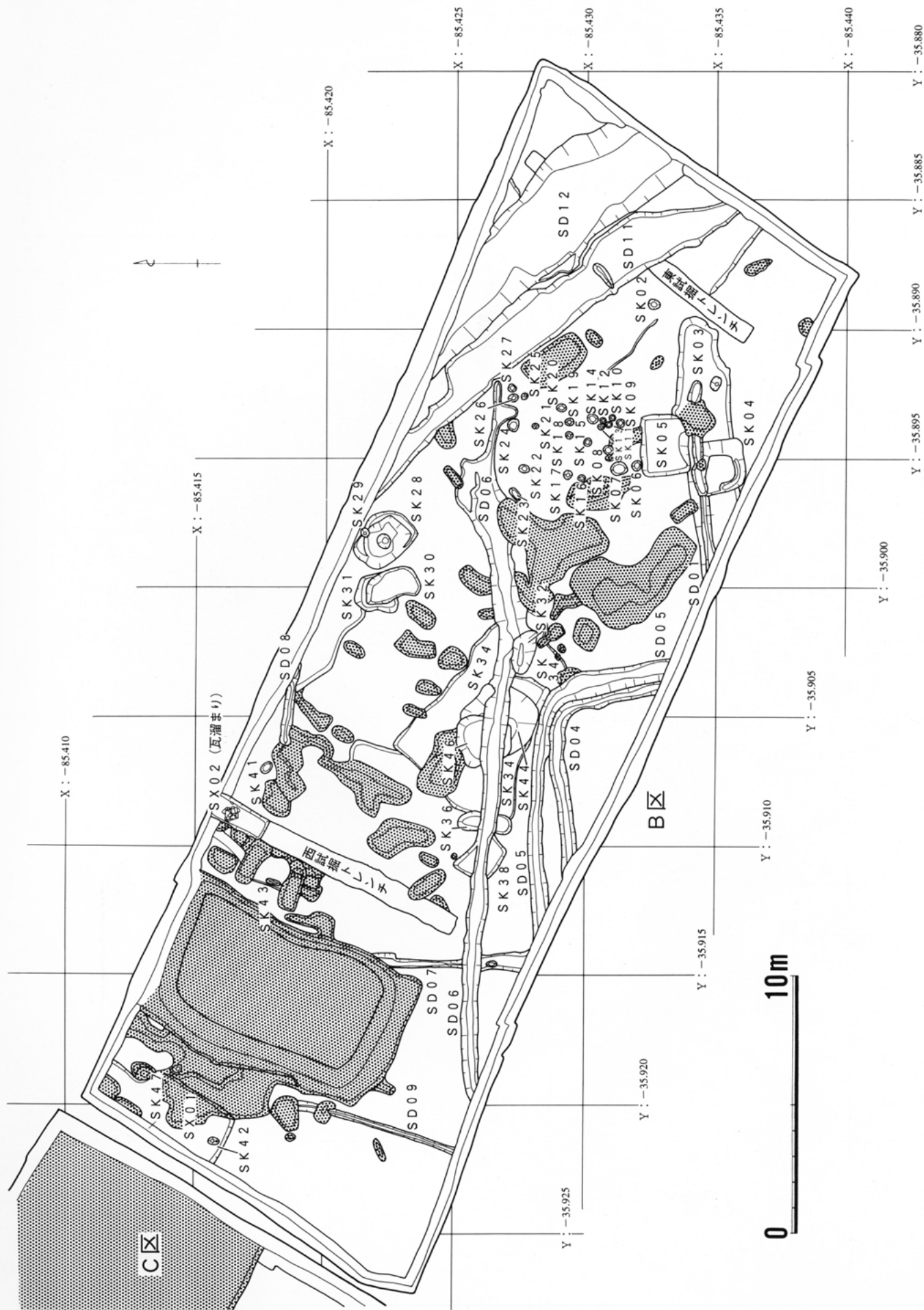
しかし大縄遺跡を含めて12世紀後半における遺構・遺物が再び多くなり、13世紀から14世紀にかけて連綿と集落が営まれたことは確実で、こうした中世における周辺的生活活動の契機は大縄遺跡のSD11・SD12にみられるような農業用水の掘削に伴う開発がこの地域全体で行われたことが背景にあるものと思われる。

註

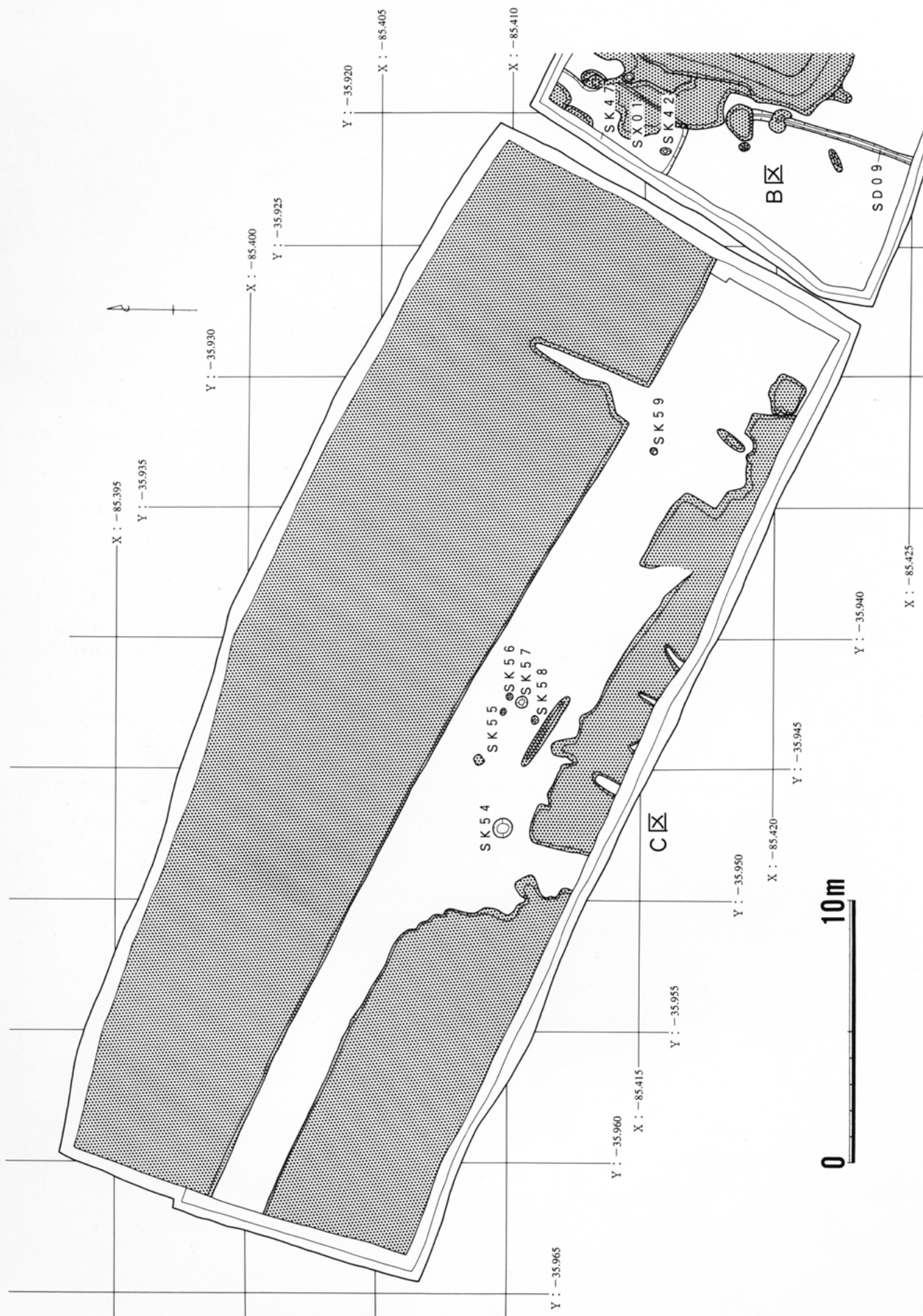
- (1) 鈴木正貴・蔭山誠一1997「愛知県における古代・中世の鉄器生産その1」『年報平成8年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- (2) 蟹江吉弘編1994「堀之内花ノ木遺跡」財団法人愛知県埋蔵文化財センター、池本正明編1996「儀長正楽寺遺跡」財団法人愛知県埋蔵文化財センター



付図1 A区遺構図 (1:200)



付図2 B区遺構図 (1:200)



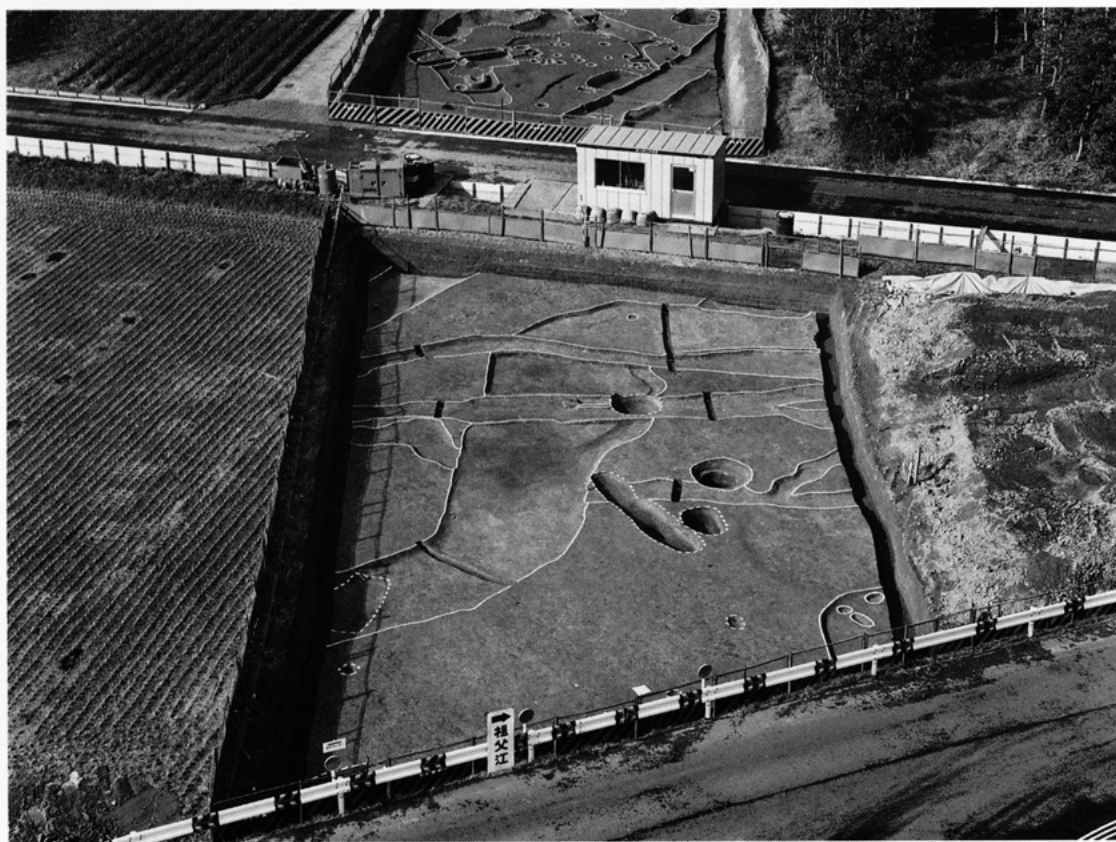
付図3 C区遺構図 (1 : 200)



大縄遺跡全景（左が北、上からA区・B区・C区）A区・B区調査時



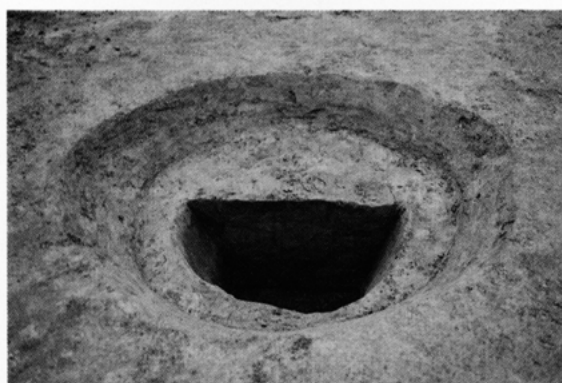
大縄遺跡から東方（尾張国分寺跡・堀之内花ノ木遺跡）を眺む



A区全景（東より）



B区全景（西より）



A区SK48（南より）



B区SX02（瓦溜まり・南より）



B区SK34・SK44（東より）



B区SK44出土植物質の遺物（北より）



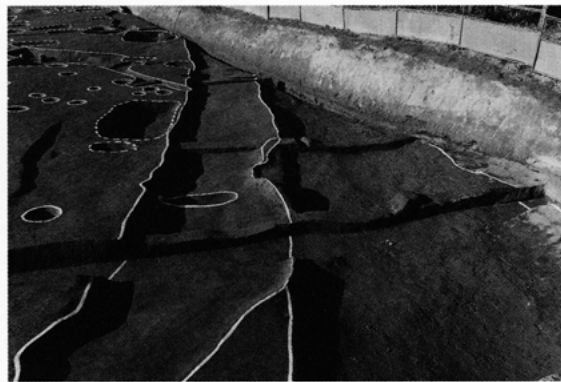
B区SK38とSK06（南より）



B区SD04とSD05（北より）



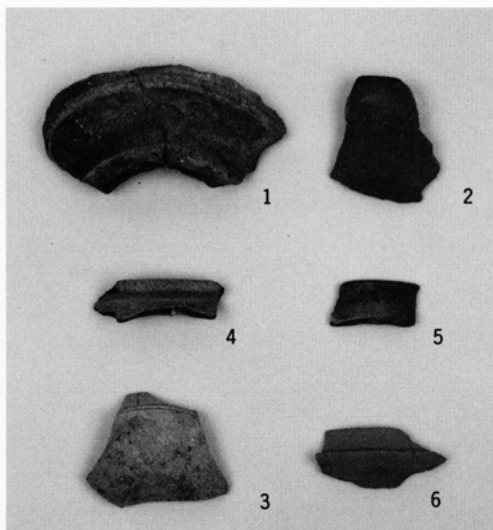
B区SK28とSK29（東より）



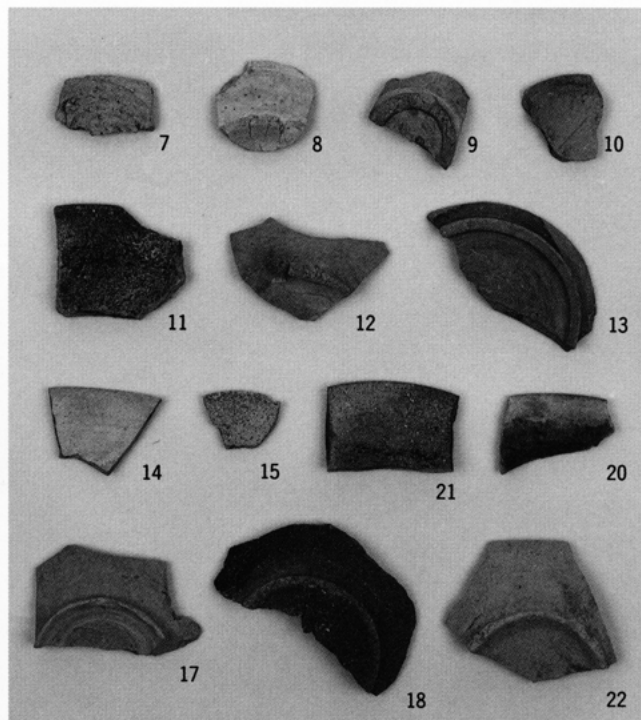
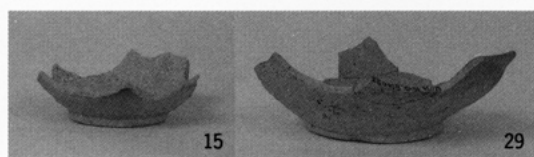
B区SD11・SD12（東より）



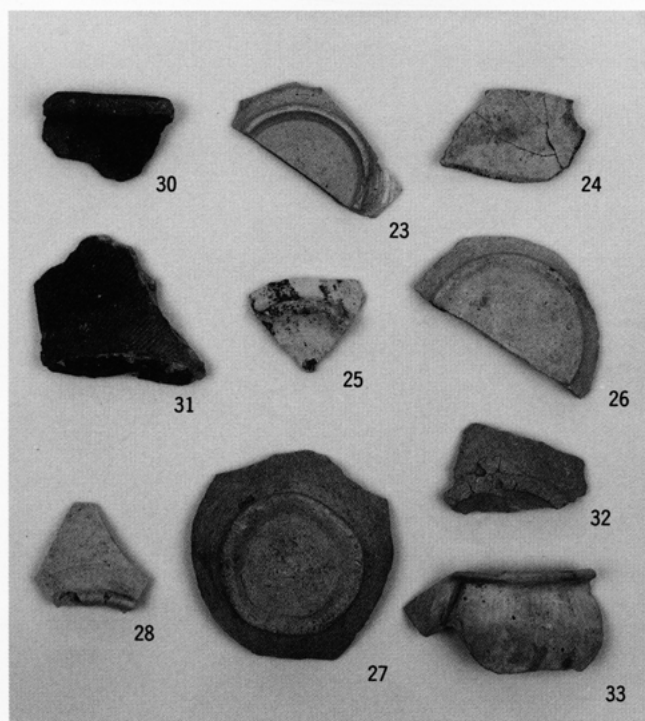
C区全景（西より）



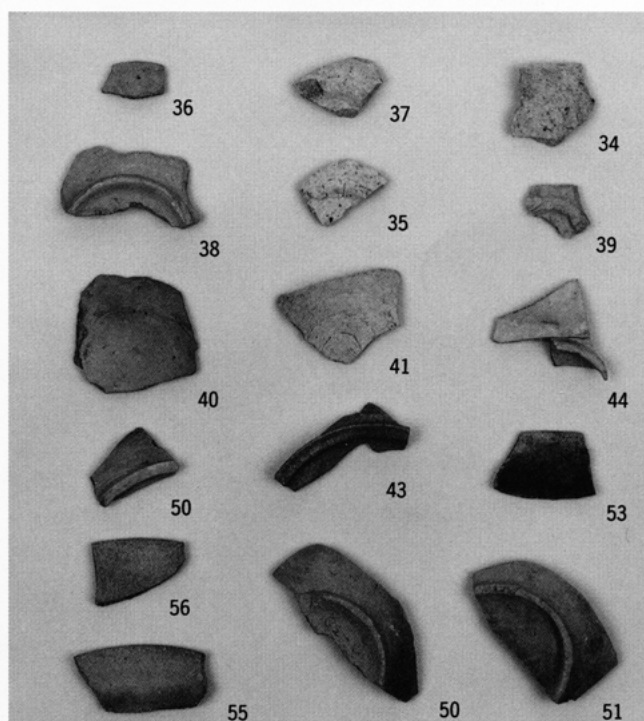
古墳時代以前の土器・陶器 (約 1 : 4)



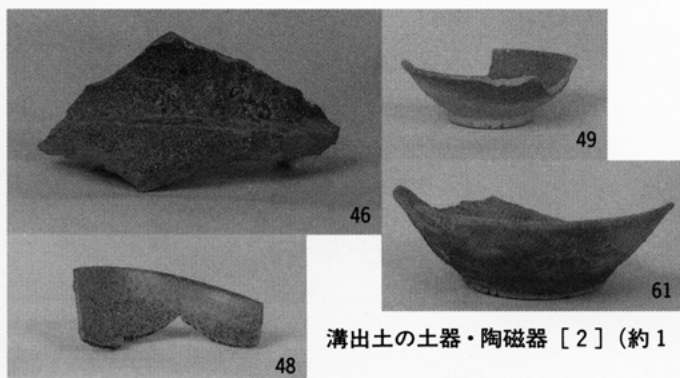
← ↑ 土坑出土の土器・陶磁器 [1] (約 1 : 4)



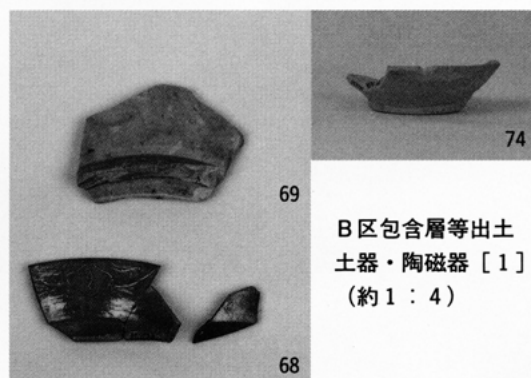
土坑出土の土器・陶磁器 [2] (約 1 : 4)



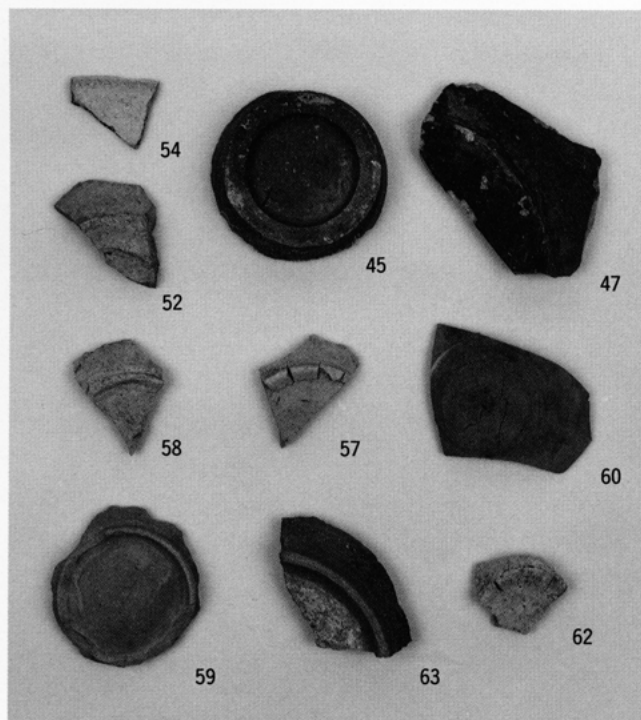
溝出土の土器・陶磁器 [1] (約 1 : 4)



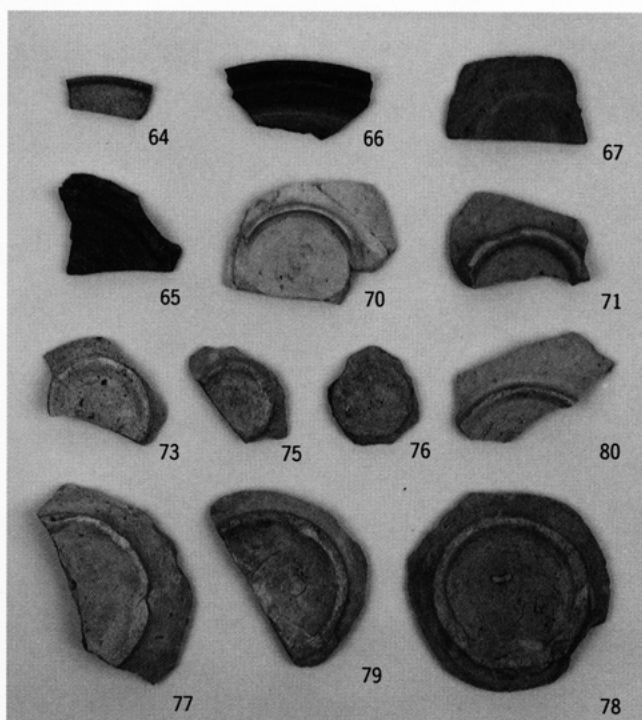
溝出土の土器・陶磁器 [2] (約 1 : 4)



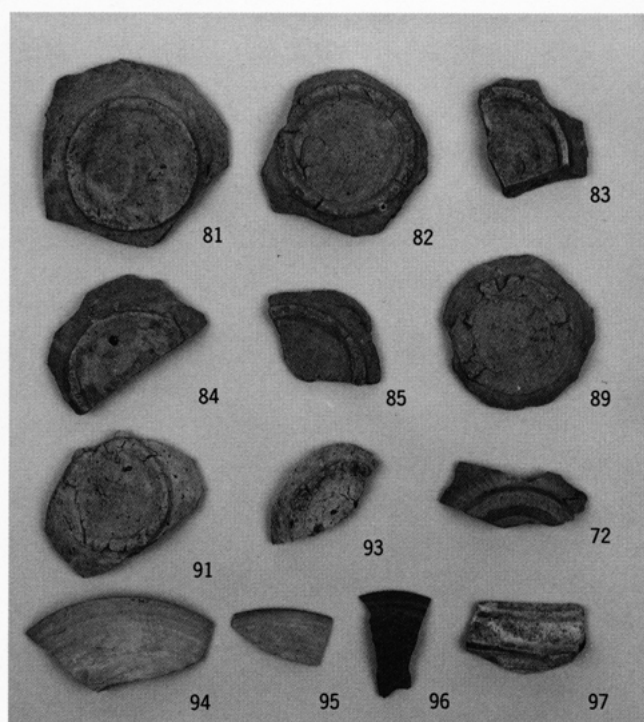
B 区包含層等出土
土器・陶磁器 [1]
(約 1 : 4)



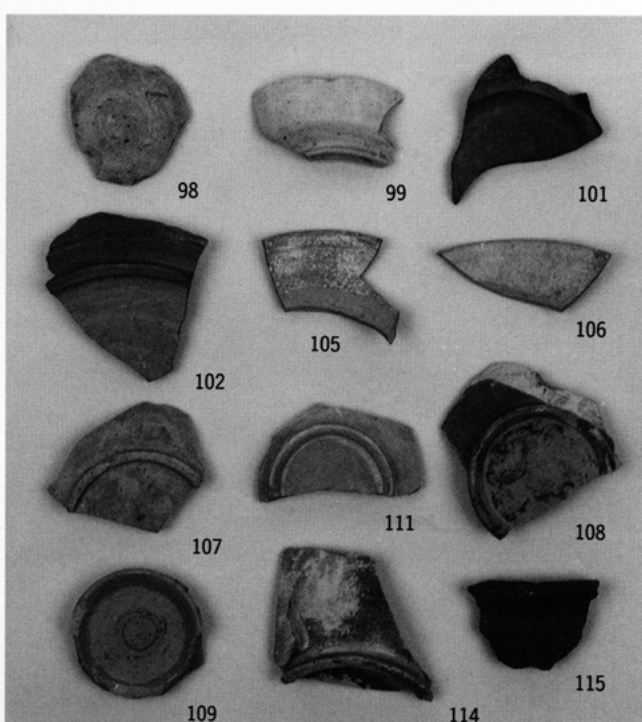
溝出土の土器・陶磁器 [3] (約 1 : 4)



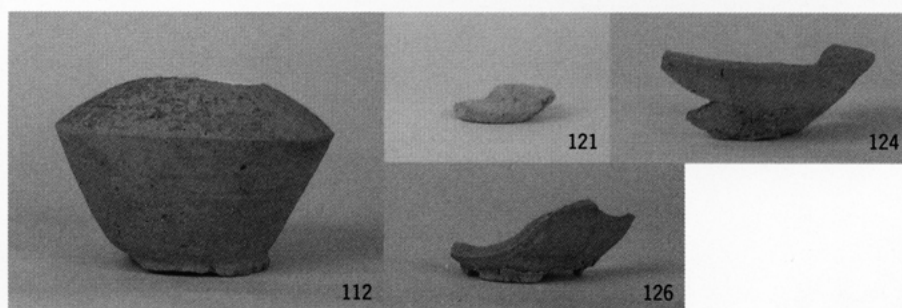
B区包含層等出土土器・陶磁器 [2] (約 1 : 4)



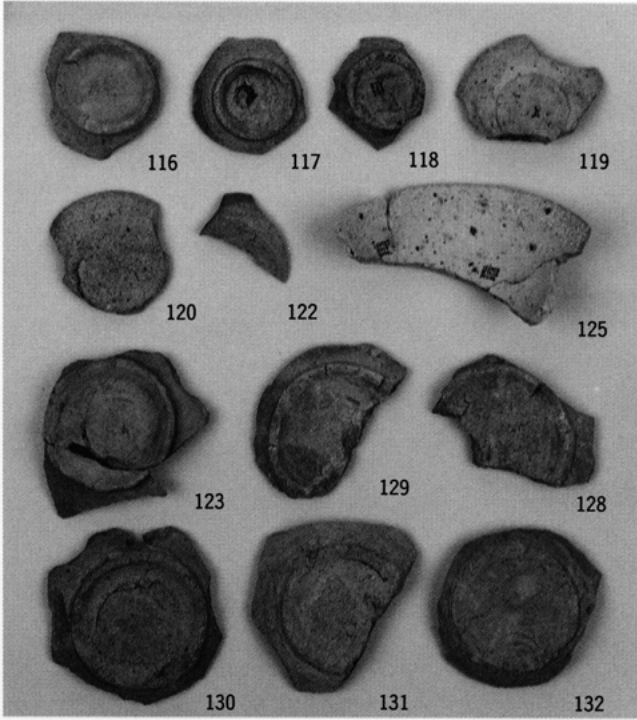
B区包含層等出土土器・陶磁器 [3] (約 1 : 4)



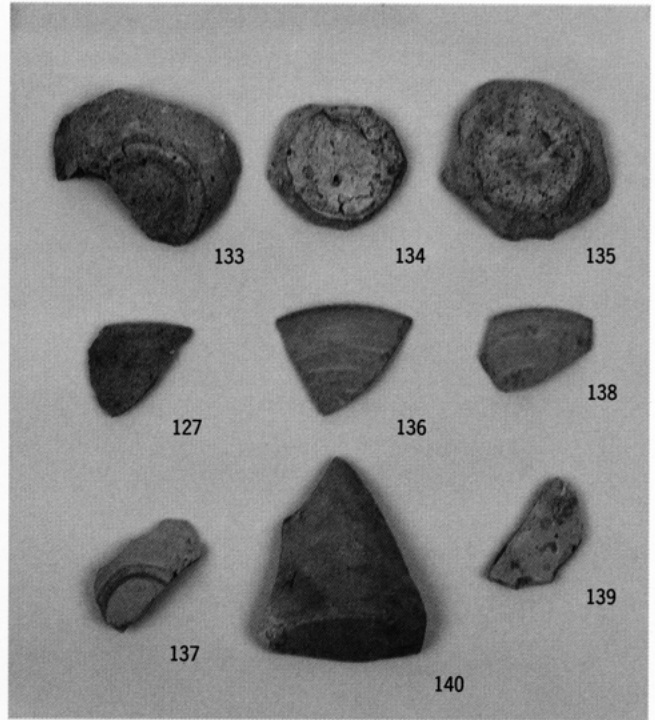
撿乱層等出土土器・陶磁器 [1] (約 1 : 4)



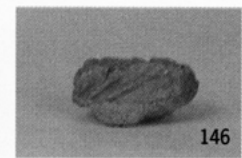
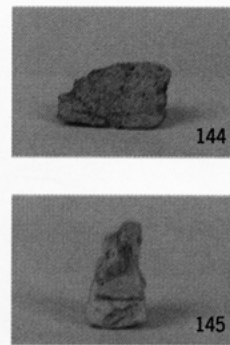
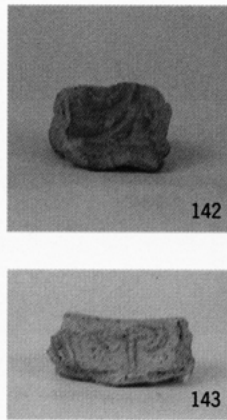
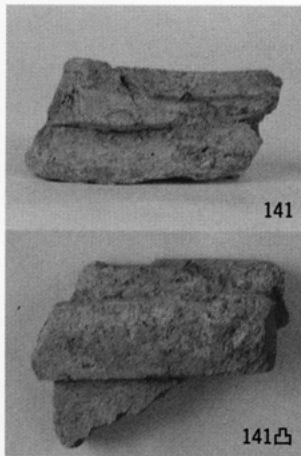
撿乱層等出土土器・陶磁器 [2] (約 1 : 4)



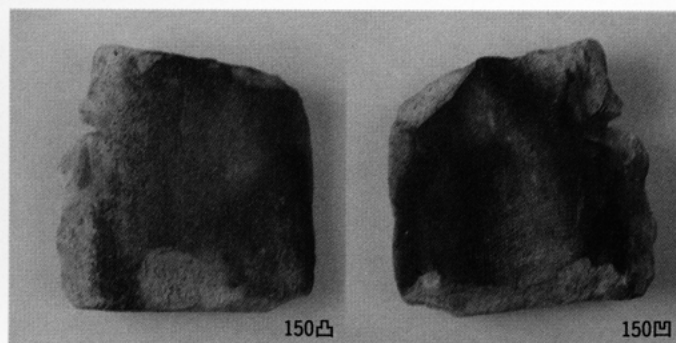
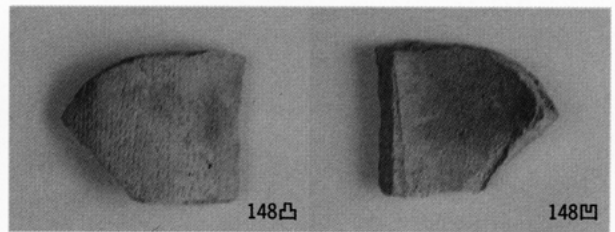
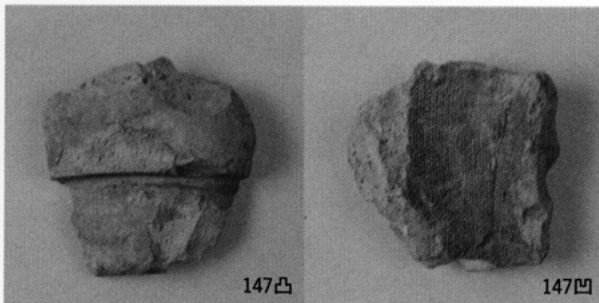
攪乱層等出土土器・陶磁器 [3] (約 1 : 4)



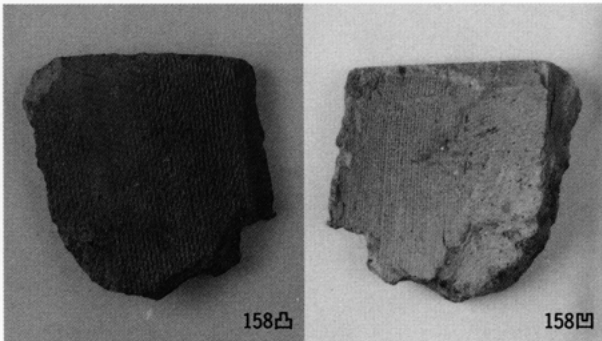
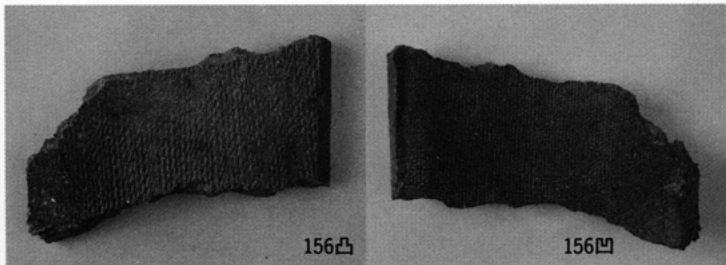
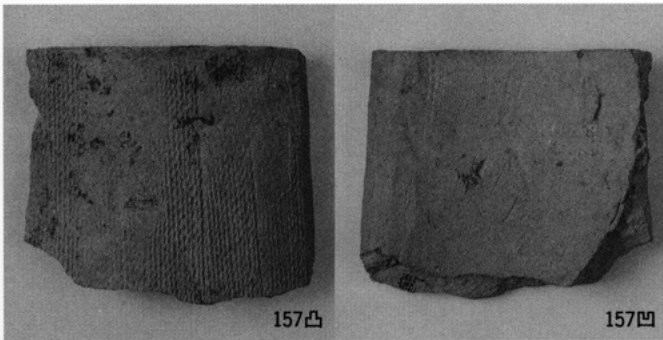
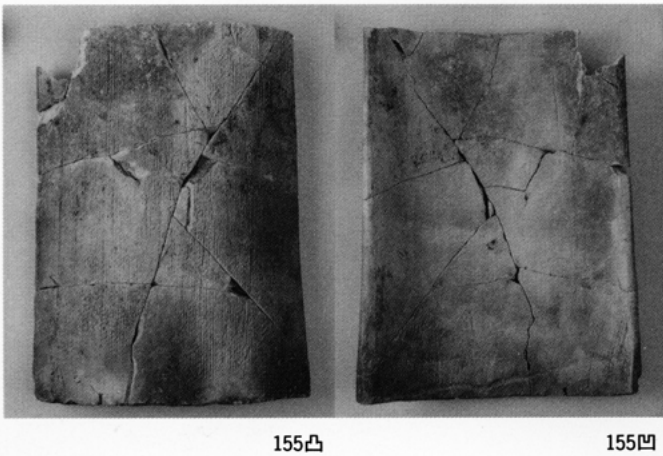
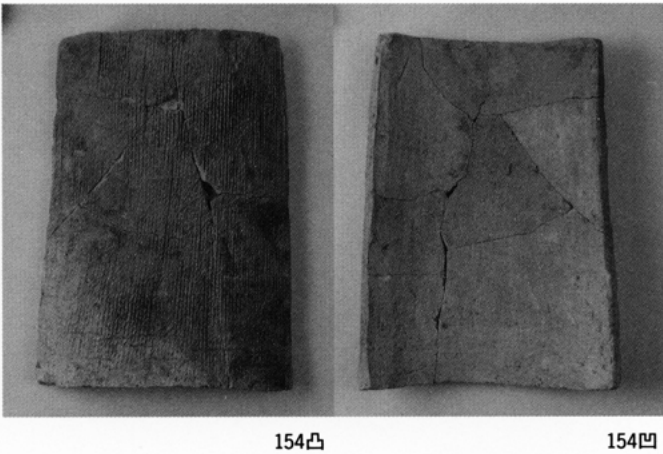
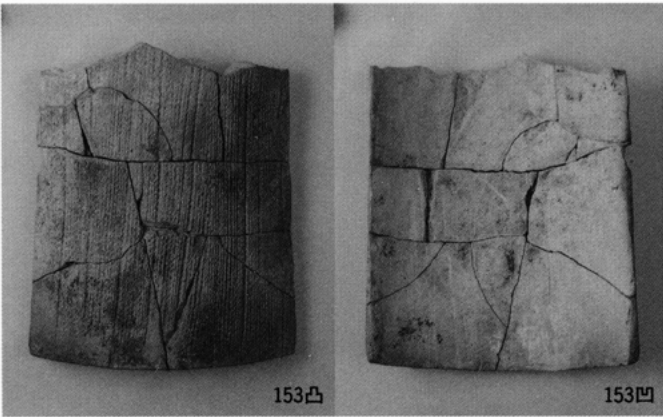
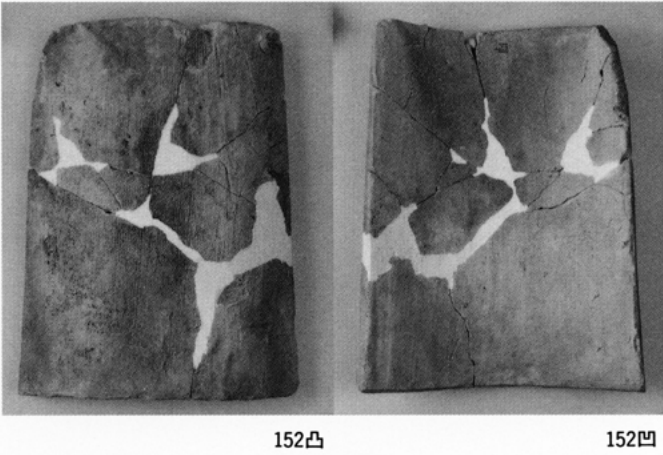
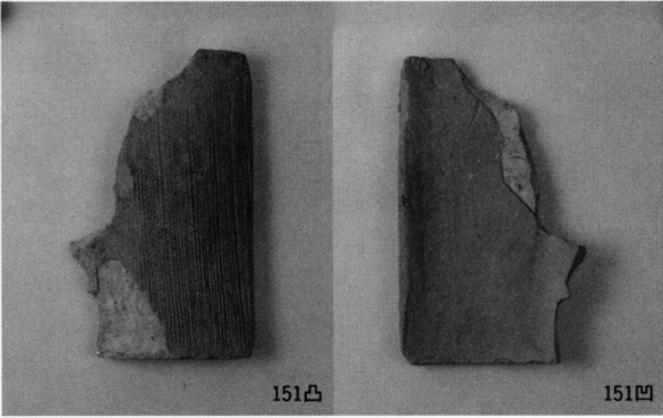
攪乱層等出土土器・陶磁器 [4] (約 1 : 4)



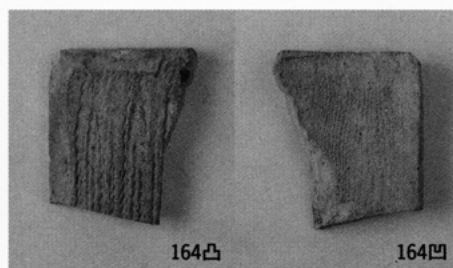
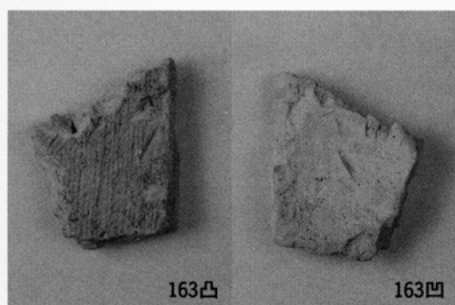
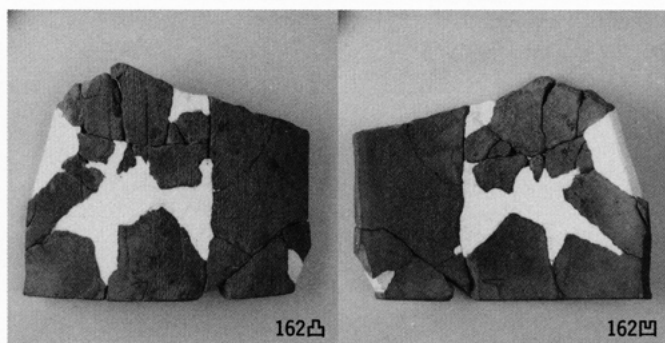
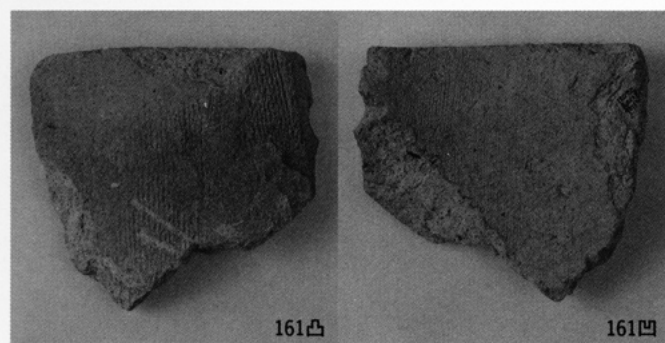
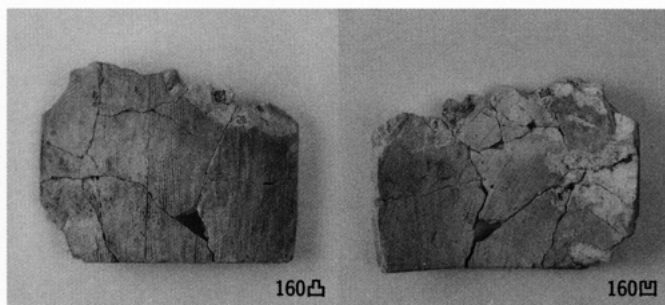
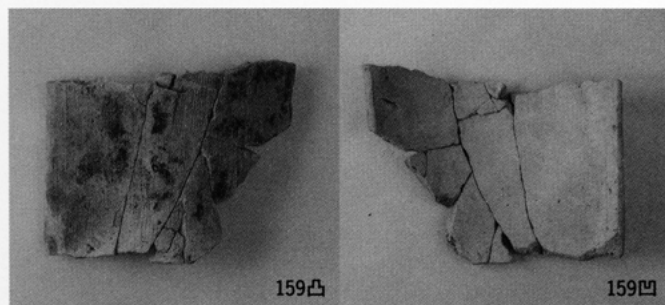
軒平瓦 K D
(約 1 : 4)



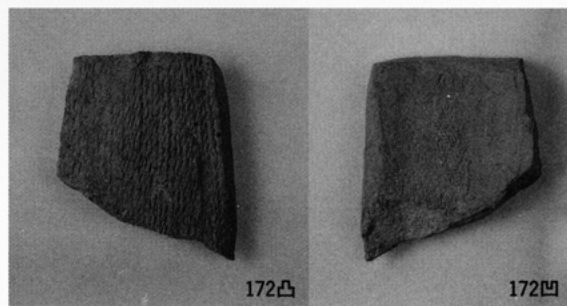
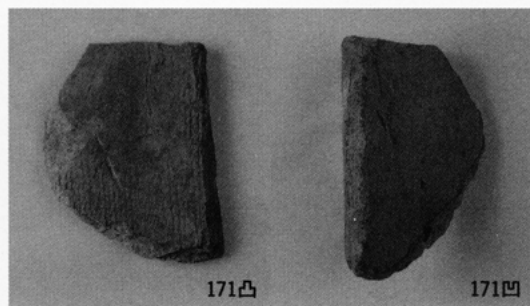
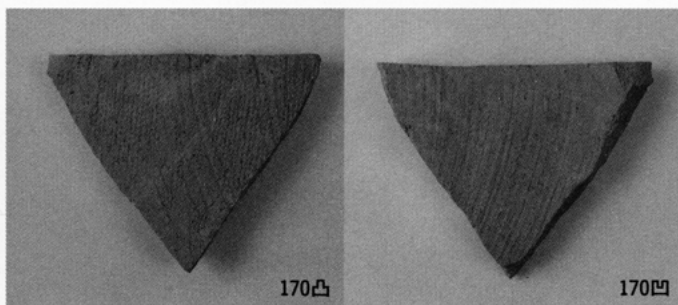
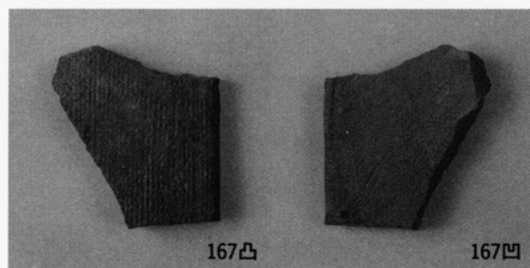
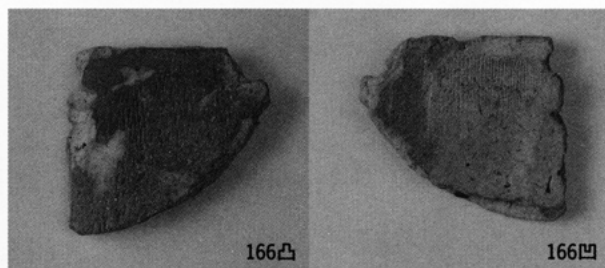
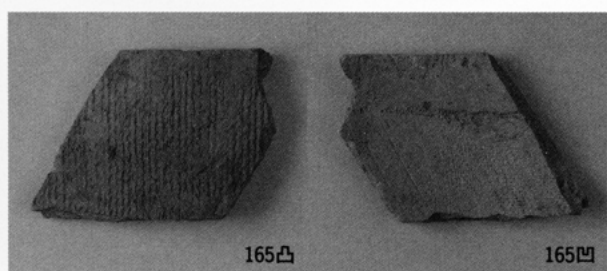
丸瓦 K A
(約 1 : 4、
149のみ約 1 : 6)

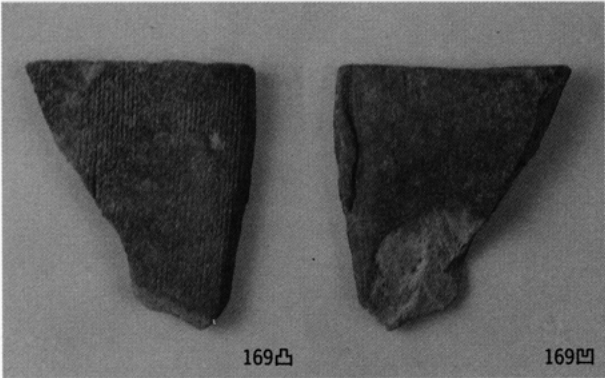


平瓦K B [1] (151~155は約 1 : 8、157~158は約 1 : 4)

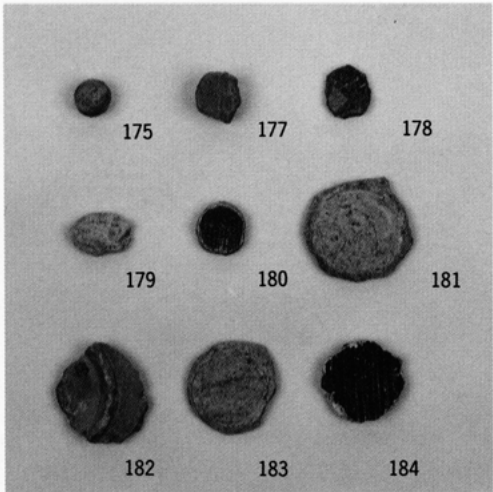
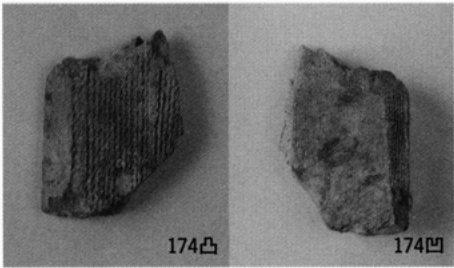
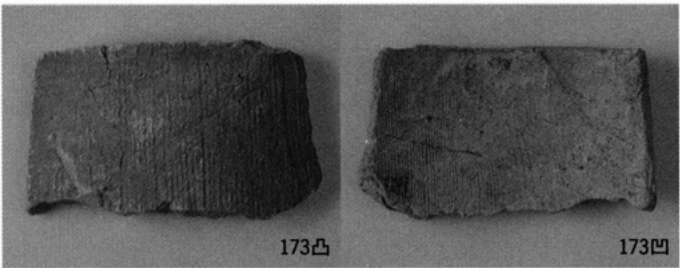


平瓦KB [2]
 (159・160・162は約1 : 8
 161・163~167・171~172は
 約1 : 4)

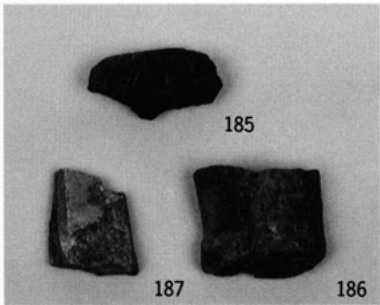




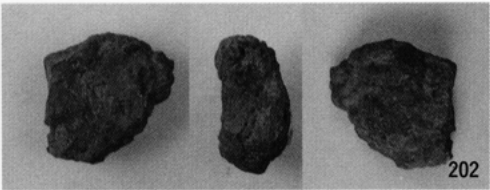
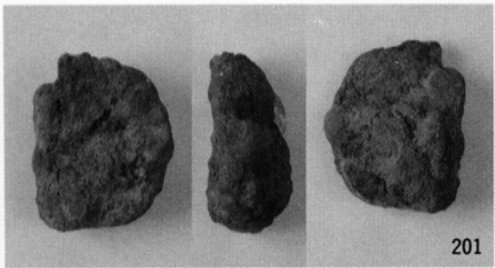
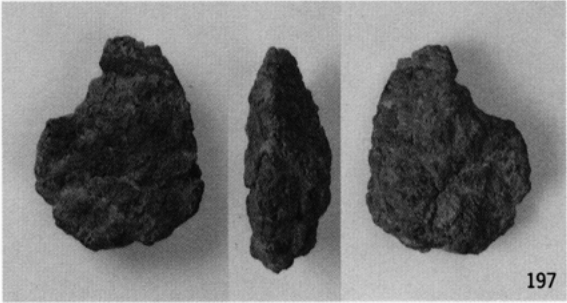
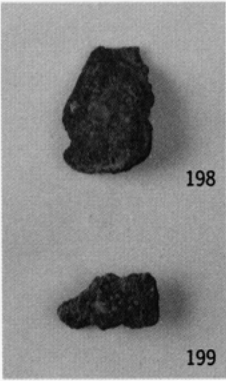
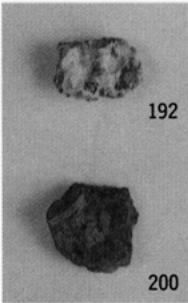
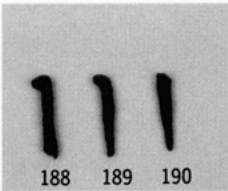
平瓦KB [3] (約1 : 4)



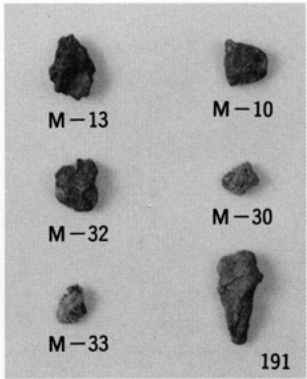
土製品 (約1 : 4)



石製品 (約1 : 4)



鉄資料 (約1 : 4)



報告書抄録

ふりがな	おおなわいせき							
書名	大縄遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第74集							
編著者名	蔭山誠一							
編集機関	財団法人愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24 TEL 0567-67-4163							
発行年月日	西暦 1996年 8月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査機関	調査面積 m²	調査原因
おおなわいせき 大縄遺跡	いなざわし いほりおおなわちよう 稲沢市井堀大縄 町	23220	9250	35° 13' 13"	136° 46' 16"	19951001 ～ 19951214	2200m²	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
大縄遺跡	集落跡	古墳時代	なし	須恵器・土師器				
		奈良・平安時代	土坑	須恵器・灰釉陶器・ 緑釉陶器・瓦・土師器				
		鎌倉・室町時代	土坑・溝	灰釉系陶器・青磁・ 施釉陶器（古瀬戸）・ 常滑甕・鉄滓類			方形状の区画溝 農業用の用水路	
		江戸時代	なし	加工円盤				

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第74集

大 縄 遺 跡

1997年 8 月30日

編集・発行 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 西濃印刷株式会社